□形式感動詞は實質的意義をば他語に讓り自己は唯形式的意義だけを表はす感動詞である。例へば「客亦知夫水與月乎」の「乎」の類だ。實質的意義をば「知夫水與月」をして表はさしめ、自己は唯疑問といふ形式的意義だけを表はして居る。

實質感動詞は自己だけて一斷句を成すことが出來るが、形式感動詞は自己だけては一斷句を成すことは出來ない。必ず他語と與に用ゐられなければならない。他の形式的品詞なる形式動詞、形式副詞等は單純、歸著、寄生等種々の別が有つて形式的意義の空虛が補充されるその補充され方に色々あるが、形式感動詞の補充され方は唯一つてある。卽ち皆單純てある。

客亦知夫水與月乎

に就いて言へば乎は形式的意義だけて實質的意義がないから客亦知夫水與月の意義を取入れて自己の形式的空虛を充すのてある。客亦知夫水與月は、實質的意義を表はすものてあるが、疑問といふ形式的意義をも含んて居る。併し疑問を表はすべき記號が無いから其の疑問の意を含んて居ることが甚だ不明瞭てある。そこて「乎」を附けて之を明瞭にする。「乎」は畢竟前言を再示して「そうか」といふ位の

意を表はすのてある。

形式感動詞に意義的のものと韻律的のものとの二種がある。右に擧げた「乎」のやうなものは前者てある。後者に屬するものは

力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。項羽本紀

の樣に用ゐる「兮」が有る。

形式感動詞は總べて前言を再示するものてある。日本語にそういふものが無いから日本人には其の性質が中々理解し憎い。日本語の

貴方は此の本を讀みましたか

の「か」は「乎」とは違ふ。「か」は助辭てあつて自分は一詞を成さない。動詞(讀みました)に密著し其れと一處になつて一つの動詞になる。漢文の「乎」は形式的ながら一詞てある。動詞と統合されるが動詞と密著しない。

君嘗讀此書乎。

といふ樣に「讀」と「乎」との間に「此書」といふ他語が挿まれても決して「乎」の「讀」に對する統合力に支障を來さない。これ「乎」に單獨性卽ち一詞としての能力が有るからて

ある。日本語では「讀みました」と「か」との間に「此の本を」が挿まることは出來ない。

即ち

1 貴方は讀みましたか、此の本を

2 貴方は讀みました、此の本を、か

(1)の樣にはいふが(2)の樣には云へない。

然らば形式感動詞が前言を再示するとはどんな風に再示するのであるかと云ふに「乎」に「於て」の意が有り、「于」に「于に」の意が有り、「焉」「爾」に「然り」の意があり、「也」に「また」の意が有る等の點からこれらは形式名詞形式動詞、形式副詞と共通なる性質即ち形式性を有するものであることが分る。されば之れらを日本語で說明するには形式性を代指性に易へて「そう」として解釋したら稍近いかと思ふ。

君嘗讀此書乎　　お前前に此の本を讀んだ、そうか。

我嘗讀此書矣　　私、前に此の本を讀んだ、そうだつた。

凡べてこう云つた具合のものであらうと思ふ。但し「そうだ」といふと客觀的であるが、感動詞は其れが主觀的である。その點は非常に違ふ。

形式感動詞の主なものは次の如くである。

終止的
- 說明……也　矣　焉　○　○　○　○　○　○　耳　爾　已
- 感嘆……○　矣　○　乎　哉　○　○　○　○　夫　○　○　○
- 疑問……也　矣　焉　乎　哉　與　歟　邪　耶　夫　○　○　○
- 命令……也　矣　焉　乎　哉　○　○　○　○　○　○　○　○

敍述性從屬的……也　矣　焉　乎　○　與　歟　邪　耶　○　○　○　○

表示性從屬的……也　矣　焉　乎　哉　與　歟　○　○　○　○　○　○

喚呼的……也　矣　○　乎　哉　○　○　○　○　○　○　○　○

この外に「兮」が有る。

又極古く用ゐられたものに次の樣なのがある。

來　忌　其　居　諸　且　些　思　止　只　斯　軹　而

「也」の用法

「也」は右の表に示す通り四種の用法が有る。

一、終止的用法　動詞又は敍述態名詞の終止的用法に在るものを實質語として其の意義を再示して終止する用法である。

イ　或問子產。子曰惠人也。論語憲問

語曰、日中則移、月滿則虧。物盛則衰。天地之常數也。進退盈縮與時變化、聖人之常道也。史記范睢列傳

孔子曰、不知命無以爲君子也。不知禮無以立也。不知言無以知人也。論語堯曰

子夏曰、大德不踰閑、小德出入可也。同子張

ロ　子路問事君。子曰勿欺也。而犯之。同憲問

ハ　穆公問曰、吾有司、死者三十三人、而民莫之死也。誅之則不可勝誅。不誅則疾視其長上之死而不救。如之何可也。孟子梁惠王下

我之不賢與。人將拒我。如之何其能拒人也。論語子張

(イ)は說明、(ロ)は命令、(ハ)は疑問だ。疑問の中には反轉も有る。說明的用法に於ては「也」を「なり」と訓ずる。そうして意義も「なり」に似て居る。たゞ「なり」は助辭であつて意義が客觀的概念的であるが「也」は主觀的である。それだけの相違が有る。日本て「なり」を用ゐる所は漢文でも「也」を用ゐる。唯注意すべきは「平なり美なり明なり」微なりなどの「なり」は「也」の意でないことである。日本語では「平」だけでは敍述が不明確であるから「なり」を附けるが漢文では「天下平」などの樣に「平」だけで「平なり」の意になる。之を「天下平也」といふと「天下平なるなり」の意になる。命令の場合は「也」は讀まない。疑問の場合には「や」或は「か」と讀む。

二、敍述性從屬的用法　「何々にして」「何々ならば」などの樣な意を以て下へ從屬する敍述性の語の下へ用ゐて其の意味を再示して提示する。

若勝我。我不若勝。若果是我果非也邪。我勝若。若不吾勝。我果是也而果非也邪。其或是也。其或非也邪。其俱是也。其俱非也邪。莊子齊物論十

微夫子之發吾覆也。吾不知天地之大全也。莊子田子方四

在於王所者長幼卑尊皆薛居州也。王誰與爲善。一薛居州如宋王何。孟子滕文公下

孔子謂季氏。八佾舞於庭。是可忍也。孰不可忍也。論語八佾

伯牛有疾。子問之。自牖執其手。曰亡之。命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而

有斯疾也。論語雍也

且彼佛者果何人哉。其行事類君子邪。小人邪。若君子也必不妄加禍於守道之人。如小人也其身已死其鬼不靈。韓愈與孟尚書書

詩云、娶妻如之何必告父母。信斯言也宜莫如舜。孟子萬章

去國數日見其所知而喜。去國旬月見所嘗見於國中者喜。及期年也見似人者而喜矣。莊子徐無鬼

右「一」「二」の用法は何れも敍述性の有る語卽ち動詞又は敍述態名詞の下へ用ゐるものである。そうして「二」は意義が終止せずに下へ續く。

三、表示性從屬的用法　副詞又は表示態名詞の下へ用ゐてその意味を提示する。

イ　子曰聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。論語顏淵

使予也而有用且得有此大也邪。且也若與予也皆物也。莊子人間世

知以之言也問乎狂屈。同知北遊一

吾始也疑子今視子之鼻閒。栩々然。莊子田子方十

鄉也吾見於夫子而問知。論語顏淵

ロ　好仁不好學其蔽也愚。好知不好學其蔽也蕩。好信不好學其蔽也賊。好直不好學其蔽也絞。好勇不好學其蔽也亂。好剛不好學其蔽也狂。論語陽貨

野馬也塵埃也生物之以息相吹也。莊子逍遙遊一

子夏曰、君子之過也如日月之食焉。過也人皆見之更也人皆仰之。論語子張

(イ)は副詞の下に用ゐたもの(ロ)は名詞(動詞性名詞も)の下へ用ゐたものである。そうして(イ)も(ロ)も連用的に下へ續く語の下へ用ゐてその意味を再示する。

この「三」の用法が「一」「二」と違ふ點は敍述性のない語の下へ用ゐることである。

四、喚呼的用法　喚呼態名詞の下へ用ゐて其の意義を高調する。

イ　子曰賜也非爾所及也。論語公冶長

子曰由也女聞六言六蔽矣乎。對曰未也。同陽貨

ロ　道也者不可須臾離。可離非道也。中庸

中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。同

孔子聖之時者也。孔子之謂集大成。集大成也者金聲而玉振之也。金聲也者始條理也。玉振之也者終條理也。孟子萬章下

(イ)は本來の名詞へ附き、(ロ)は人の言語を名詞として其れへ附く。

「矣」の用法

「矣」は前言に寄生して其の敍述を確めるものである。從來「也」の緩にして曲なるに對し矣は直にして急だと解釋されて來た。併し其れだけでは餘りに抽象的な解釋であつて了解し憎いと思ふ。幸に日本語に類似の意義を有する語がある。それは完了の助辭の「ぬ」と「つ」である。

ナ行變格　下二段活

て　な　ムズ

て　に　ヰ

つ　ぬ　ヤベシ

つる　ぬる　カ

つれ　ぬれ(ば)　ドパモ

この助辭で「矣」を譯すると「矣」の意義に髣髴たる場合が屢有る。但し「矣」は感動詞で意義が主觀的であるが、「ぬ」「つ」は客觀的である。且つ「ぬ」「つ」は完了を表はすものであるが、「矣」は敍述の確めであつて完了の語ではない。併し面白いことは「ぬ」「つ」は完了の語であるが、その完了は事實上の完了ではなくて概念の取扱方に於ける完了であるからその結果として敍述の確めになるし、「矣」は完了の語ではなくて敍述の確めであるが、敍述が確められた結果は概念の取扱方をして完了的ならしめる場合が多い。其れ故「ぬ」「つ」で「矣」を譯すると非常に工合が善い場合が有るのである。其の「ぬ」「つ」で譯し難い場合が有るとに對しては理由が二つある。一は「矣」が完了的でない場合があること、一は「ぬ」「つ」は動作動詞へのみ附くのに「矣」は必しも動作動詞の下へのみ用ゐられるのではないこと、この二つの理由に由るのである。

一、終止的用法　大抵は「矣」を讀まない。感嘆の意を含めて讀んで差支ない時には「かな」と讀む。併し「ぬ」「つ」で讀めるものはそれが一番當ると思ふ。

イ、由「此觀」之佛不足事亦可「知矣」。韓愈論佛骨表……〔亦知りつべし〕

管仲相「桓公」霸「諸侯」一「匡天下」。民到「于今」受「其賜」。微管仲吾其被「髮左衽」矣。論語憲問

……〔吾其れ髮を被つて衽を左にしなむ〕

子夏曰、博學而篤志、問而近思、仁在「其中」矣。同子張……〔仁は其の中に在りつ〕子聞「之」謂「門弟子」曰、吾何執、執「射乎、吾執」御乎。同子罕……〔吾は御を執りてむ〕

己所不欲勿施於人。在邦無怨、在家無怨。仲弓曰雍雖不敏、請事斯語矣。同顏淵…

…〔請ふ斯の語を事として む〕

嗚呼噫嘻我知之矣。疇昔之夜飛鳴而過我者非子也邪。蘇東坡後赤壁賦…〔我之を知りつ〕

子曰士而懷居不足以爲士矣。論語憲問

子曰巧言令色鮮矣仁。同陽貨

范文子謂欒武子曰、季孫於魯相二君矣。妾不衣帛馬不食粟。可不謂忠乎。左傳成十六

古之愚也直、今之愚也詐而已矣。論語陽貨

韓信謝曰、先生且休矣、吾將念之。史記淮陰侯列傳

文曰必受命於天、君何憂焉、必受命於戶則高其戶耳、誰能至者。嬰曰子休矣。同孟嘗君列傳

是直用管闚天用錐指地也。不亦小乎。子往矣、且子獨不聞夫壽陵餘子之學行于邯鄲與。莊子秋水十

(イ)憲問恥。子曰邦有道穀國無道穀恥也克伐怨欲不行焉可以爲仁矣子曰可以爲難矣、仁則吾不知也。論語憲問

子張問於孔子曰何如斯可以從政矣。子曰尊五美屏四惡、斯可以從政矣。同堯曰

子貢問曰何如斯可謂之士矣。同子路

中谷有蓷。嘆其濕矣。有女仳離。啜其泣矣。啜其泣矣、何嗟及矣。毛詩王風中谷有蓷

(ロ)魯仲連曰、吾將使秦王烹醢梁王。新垣衍怏然不悅曰噫嘻亦太甚矣先生之言也。史記魯仲連列傳

(イ)は説明、(ロ)は命令、(ハ)は疑問(反轉も)(ニ)は感嘆だ。

「矣」を他の感動詞の下へ使ふ場合がある。

子貢曰、夫子之文章可得而聞也、夫子之言性與天道不可得而聞也已矣。論語公冶長

四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已矣。同子罕

梁惠王曰、寡人之於國也盡心焉耳矣。孟子梁惠王

矣は其の意義の急激性から二面の眞理に對して一面だけを強く確める場合があ

る。その場合には言外に「併し」といふ意を帶びる。

子之言則然矣、宰相則知子矣。如時不可何。韓愈復上宰相書

子游曰、子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣、抑末也本之則無。如之何。論語子張

衞靈公問陣於孔子。孔子對曰、俎豆之事則嘗聞之矣。軍旅之事未之學也。同衞靈公

子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信行不篤敬、雖州里行乎哉。同上

詩經などには次の樣なのがある。

甲 雞棲于桀日之夕矣。羊牛下佸。君子于役。苟無飢渴。毛詩王風君子于役

乙 爰采唐矣、沫之鄉矣。云誰之思。美孟姜矣。期我乎桑中。要我乎上宮。送我乎淇之上。爰采麥矣、沫之北矣。云誰之思。美孟弋矣。期我乎桑中。要我乎上宮。送我乎淇之上。爰采葑矣、沫之東矣。云誰之思。美孟庸矣。期我乎桑中。要我乎上宮。送我乎淇之上矣。同鄘風鶉之奔奔

右の例の――は――に對する修用語が倒置されたものである。矣は――の全體の下に在る。「雞棲于桀、日之夕矣」は「日之夕雞棲于桀矣」である。又(乙)は「矣」が二つあるが、これは「爰於沫之鄉采唐矣」の如くいふべき「矣」を二個所へ分けたので上の「矣」は「采唐」といふ動詞を受けてその意義を確め、下の「矣」は「爰采唐沫之鄉」の全體を受けて之を確める。現時の口語で「吃飯了」を「吃了飯了」といふ樣なのと同じ云ひ方である。

二、敍述性從屬的用法　下へ續く用法だ。

君若勿已矣。修胷中之誠以應天地之情而勿攖。莊子徐無鬼二

子曰、苟志於仁矣。無惡也。論語里仁

升彼虛矣。以望楚丘矣。毛詩鄘風定之方中

善戲謔兮不爲虐兮。同衞風淇奧

三、喚呼的用法　「や」と讀む。

桑之未落、其葉沃若。……桑之落矣、其黃而隕。自我徂爾三歲食貧。毛詩衞風氓

園有桃、其實之殽。心之憂矣、我歌且謠。同魏風園有桃

王曰、大哉言矣。寡人有疾、寡人好勇。孟子梁惠王下

子曰、不レ有二祝鮀之佞一而有二宋朝之美一、難乎免二於今之世一矣。 論語雍也

「焉」の用法

「焉」は「然」の意がある。前言を指し「そうだ」と再示して語勢を揚げる詞である。揚々として堂々たる態度にいふのである。「也」の様に冷靜な平調でなく「矣」の様に急促したせせつこましい態度でなく、極めて悠揚たる高調である。

一、終止的用法

イ 士之能享二大名一顯二當世一者莫レ不レ有二先達之士一負二天下之望一者一焉。士之能垂二休光一照二後世一者亦莫レ不レ有二後進之士一負二天下之望一者一焉。之後焉莫レ爲二之前一雖レ美而不レ彰、莫レ爲二之後一雖レ盛而不レ傳。 韓愈與于襄陽書

是二人者未二始不一相須一也。然而千百載乃一相遇焉。豈上之人無レ可レ援、下之人無レ可レ推歟。 同

蓋二客不レ能レ從焉一。劃然長嘯、草木震動、山鳴谷應、風起水湧。 蘇東坡後赤壁賦

反而登レ舟放二乎中流一、聽二其所一止而休焉一。時夜將半、四顧寂寥。 同

窮髮之北有二冥海一者、天池也。有レ魚焉一。其廣數千里、未レ有二知二其脩一者一。其名爲レ鯤。有レ鳥焉一、其名爲レ鵬。背若二太山一、翼若二垂天之雲一。 莊子逍遙遊三

衛公孫朝問二於子貢一曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道未レ墜二於地一、在レ人、賢者識二其大者一、不賢者識二其小者一、莫レ不レ有二文武之道一焉。夫子焉不レ學、而亦何常師之有。 論語子張

子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。 同陽貨

「焉」は文末ならば單に語勢を揚げるだけであるが、次に別の斷句が有る場合には前言の語勢を揚げて巧に語を轉ずる。右の諸例を見ても皆巧に語を轉じてゐる。

甚しきに至っては

子夏曰、雖二小道一、必有二可レ觀者一焉。致レ遠恐泥、是以君子不レ爲也。 論語子張

などの樣に「併し」といふ意で下の語を起す場合さへある。

以上の語例は皆說明的に終止するが、又次の樣に命令又は疑問反轉的に終止する場合もある。

孟子之後喪踰二前喪一。君無見焉。 孟子梁惠王下

政有レ所レ不レ通、事有レ所レ可レ疑、奚所二諮而處一焉。 韓愈送溫處士序

子曰予欲無言。子貢曰、子如不言則小子何述焉。論語陽貨

二、從屬的用法

文王觀於臧（地名）見一丈人釣（スルヲ）……文王於是焉以爲太師北面而問曰可以及天下乎。臧丈人昧然而不應、冷然而辭。莊子田子方八

若是而稱曰（ヲモ）大夫烏公一鎮河陽而東都雖信多才士朝取（ツナ）一人焉拔其尤（カバ）暮取一人焉拔其尤自居守河南尹以及百司之執事與我輩二縣之大夫政有所不通事有所可疑奚所諮而處焉。同逵温處士序

往時張旭善草書不治他伎。喜怒窘窮憂悲愉佚怨恨思慕酣醉無聊不平有動於心必於草書焉發之。同逵高閑上人序

修用語たるべきものゝ語勢を揚げて下へ續くのである。

「焉」は形式名詞として「これに」「これを」「これより」の意にも用ゐられる。例へば「由是而之焉之謂道」の「焉」の類で前に第三頁に說いた通りである。眞に形式的な名詞であつて單に客語たるべき空位を塡めるに用ゐる。その感動詞たる「焉」との區別はどうか。それは客語を要する處に在れば形式名詞で、客語を要しない處に在つて語勢を揭げてゐれば感動詞である。併し中には何方とも言へない樣なのが有る。「四時行焉百物生焉」の「焉」などは形式名詞と見られないこともない。その決定は作者の心持と讀者の心持とに由ることになる。又形式名詞の「焉」と雖もそれを用ゐないよりは幾分か語勢を揚げることになるのである。その語勢を擧げる方に重きを置いて客語としての空位を塡めることを輕視した用法から感動詞としての「焉」が生れたのであらうと思ふ。そうすれば區別の附きにくいのが有るのは當然である。

「乎」の用法

「乎」の用法は三つある。

一、終止的用法　これは疑問感嘆又は命令を表はす。疑問ならば「か」や」と讀み疑問性不定詞を含むものゝ下では「ぞ」ぞや」と讀む。感嘆ならば「かな」或は「や」と讀む。命令の場合は「や」と讀む。

イ　子曰、聽訟吾猶人也、必也使無訟乎。論語顏淵

客亦知夫水與月乎。蘇東坡赤壁賦

ロ 子曰愛之能勿勞乎。忠焉能勿誨乎。論語憲問

今商君吳起大夫種之爲人臣是也。其君非也。故世稱三子致功而不見德。豈慕不遇世死乎。史記范雎列傳

ハ 惜乎。今之世愚未見其人也。蘇東坡上田樞密書

ニ 聊以吾子之行卜之也。董生勉乎哉。韓愈送董邵南序

(イ)は疑問、(ロ)は反轉、(ハ)は感嘆、(ニ)は命令だ。

「乎」は他の感動詞の下へも用ゐる。

嗚呼仲以爲威公果能不用三子矣乎。仲與威公處幾年矣。亦知威公之爲人矣乎。蘇老泉管仲論

子曰、由也女聞六言六蔽矣乎。論語陽貨

子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎。人而不爲周南召南其猶正牆面而立也與。同

武侯浮西河而下。中流顧而謂吳起曰、美哉乎山河之固、此魏國之寶也。史記孫子吳起列傳

子遊爲武城宰。子曰女得人焉耳乎。論語雍也

次の様なのは一旦終止した上で言外に「然らば」の意を含むのである。

以盾爲無弑心乎、其可輕以大惡加之。以盾不討賊情可責而宜加之乎、則其後頑然未嘗討賊。既不改過以自贖。何爲遽赦使同無罪之人。獻陽修春秋論下

使果無弑心乎、則當爲之辯明必先正穿之惡。使罪有所歸然後責盾縱賊。同

妻使妾舉藥酒進之。妾欲言酒之有藥則恐其逐主母也。欲勿言乎、則恐其殺其主。史記蘇秦列傳

二、從屬的用法　副詞その他連用的に下へ續く語の下へ附いてその意義を提示する。多く「や」と讀むが讀まない場合もある。又疑問詞の下では「惡乎」などの様に「か」と讀むが、そうでない場合例へば「於是乎」などの「乎」を「か」と讀む様なのは善くない様に思ふ。

政令於是乎成。今其謀曰、晉政多門、不可從也。左傳成十六

季康子問、仲由可使從政也與。子曰、由也果於從政乎何有。論語雍也

又況乎昆弟親戚之謗欬其側者乎。莊子徐無鬼一

古之人有云、仕不爲貧、而有時乎爲貧、謂祿仕者也。韓愈爭臣論

今一以天地爲大鑪、以造化爲大冶、惡乎往而不可哉。莊子大宗師十

荆軻雖遊於酒人乎、然其爲人沈深好書。史記刺客列傳

三、喚呼的用法

召文子曰、燮乎、吾聞之、喜怒以類者鮮、……。左傳宣十七

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰唯。論語里仁

「哉」の用法

一、終止的用法　感嘆、疑問、命令に用ゐる。

イ　王城之東晉公所廬、鬱々三槐惟德之符、嗚呼休哉。蘇東坡三槐堂銘

子曰、直哉、史魚、邦有道如矢、邦無道如矢。論語衛靈公

ロ　故必復有賢者而後可以死。彼管仲何以死哉。蘇老泉管仲論

何哉、君所謂踰者。孟子梁惠王下

ハ　民欲與之偕亡、雖有臺池鳥獸豈獨能樂哉。同梁惠王上

吾之不遇魯侯、天也、臧氏之子焉能使予不遇哉。同梁惠王下

ニ　嗣王戒哉、祗爾厥辟。辟不辟、忝厥祖。商書太甲

(イ)は感嘆で「かな」と讀む。(ロ)は疑問(ハ)は反轉(ニ)は命令で何れも「や」と讀む。

「哉」は他の感動詞の下にも用ゐる。

力能誅羽則誅之、不能則去之。豈不毅然大丈夫也哉。蘇東坡范增論

子曰、羣居終日言不及義、好行小慧、難矣哉。論語衛靈公

董生舉進士連不得志於有司、懷抱利器、鬱々適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。韓愈送董邵南序

子貢方人。子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。論語憲問

吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。同陽貨

增不去項羽不亡。嗚呼、增亦人傑也哉。蘇東坡范增論

子曰、鄙夫可與事君也與哉。其未得之、患得之。既得之、患失之。論語陽貨

總角之晏、言笑晏々、信誓旦旦、不思其反、反是不思、亦已焉哉。毛詩衛風氓

二、從屬的用法　これは例が稀だ。

意之所隨者不可以言傳也而因貴言傳書世雖貴之哉猶不足貴之也爲其貴非其貴也。莊子天道十

「與」歟」の用法

「與」歟」は同じ詞である。「與」の感動詞であることを明確にするために「與」へ「欠」を附けたのが「歟」である。

一、終止的用法　疑問反轉、感嘆に用ゐる。

子曰、賜也女以予爲多學而識之者與。對曰、然、非與。曰、非也、予一以貫之。論語衛靈公

子曰、無爲而治者其舜與。夫何爲哉。恭己正南面而已矣。同衛靈公

長沮曰夫執輿者爲誰。子路曰爲孔丘。曰是魯孔丘與。同微子

子貢曰管仲非仁者與。桓公殺公子糾、不能死又相之。同憲問

豈上之人無可援、下之人無可推歟。何其相須之殷而相遇之疎也。韓愈與于襄陽書

古之所謂鄉先生歿而可祭於社者、其在斯人歟。其在斯人歟。韓愈送楊少尹序

曰、此古戰場也、常覆三軍、往々鬼哭、天陰則聞傷心哉、秦歟漢歟、將近代歟。李華弔古戰場文

國君進賢如不得已將使卑踰尊疏踰戚可不愼歟。孟子梁惠王下

他の感動詞の下へも用ゐる。

子曰片言可以折獄者其由也與。論語顏淵

人而不爲周南召南其猶正牆面而立也與。同陽貨

次の樣なのは一旦終止した上でその場合といふ意を含むのである。

我之大賢與、於人何所不容。我之不賢與、人將拒我、如之何其拒人也。論語子張

二、從屬的用法　稀に用ゐる。

始吾於人也聽其言而信其行。今吾於人也聽其言而觀其行、於予與改是。同公冶長

三、喚呼的用法

或問子產。子曰惠人也。問子西。曰彼哉彼哉。論語憲問

「邪」耶」の用法

「邪」耶」は同じ詞である。

イ 余甚惑焉。儻所謂天道是耶非耶。 史記伯夷列傳

勝周公孔子曾參乃比於宦官宮妾則是宦官宮妾之孝於其親賢於周公孔子曾參者邪。 韓愈諱辨

ロ 夫人之立功豈不期於成全邪。 史記范雎列傳

愈縻於茲不能自引去貪二生以待老。今皆爲有力者奪之。其何能無介然於懷耶。 韓愈送溫處士序

吾嘗聞風俗與化移易。吾惡知其今不異於古所云邪。 同送董邵南序

若顏氏子操瓢與簞曾參歌聲若出金石。彼得聖人而師之汲々每若不可及。其於外也固不暇。倘何麴孽之託而昏冥之逃邪。 同送王秀才序

(イ)は通常の疑問で(ロ)は反轉だ。

「也」の下へも用ゐる。

幾死乃今得之。爲予大用。使予也而有用且得有此大也邪。 莊子人間世六

次の様なのは一旦終止してから其の場合といふ意を含むのである。

其在彼邪。亡乎我。在我邪。亡乎彼。 莊子田子方十

「夫」の用法

「夫」は感嘆及び疑問を表はす。

故視而可見者形與色也。聽而可聞者名與聲也。悲夫。世人以形色名聲爲足以得彼之情。 莊子天道十

子謂顏淵曰用之則行。舍之則藏。唯我與爾有是夫。 論語述而

「矣」「也」「已」の下へも使ふ。

子曰博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣夫。 論語顏淵

子曰君子而不仁者有矣夫。未有小人而仁者也。 同憲問

子曰苗而不秀者有矣夫。秀而不實者有矣夫。 同子罕

子曰未之思也夫。何遠之有。 同

伯牛有疾。子問之。自牖執其手曰。亡之。命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也。 同雍也

子曰莫我知也夫。子貢曰何爲其莫知子也。 同憲問

然則君之所讀者古人之糟魄已夫。莊子天道十

「耳」「爾」「已」の用法

「耳」「爾」は同音で同じである。「已」も似た音で同義である。何れも「のみ」と訓ずる。前言を指して「それだけである」それまでのことだ」といふ意を表はすものである。用法は動詞又は敍述態名詞の下へ用ゐられて意義が終止するに在る。

今先生何以說吾君使吾君說若此乎。徐無鬼曰吾直告之吾相狗馬耳。莊子徐無鬼一

荀卿獨曰人性惡、桀紂性也、堯舜僞也。由是觀之、意其爲人也剛愎不遜而自許太過。彼李斯者又特甚者耳。蘇東坡荀卿論

夫南面而聽天下其所託重而恃力者相與將耳。韓愈送溫處士序

威公聲不絕乎耳色不絕乎目而非三子者則無以遂其欲。彼其初之所以不用者徒以有仲焉耳。蘇老泉管仲論

難者曰聖人借人止以垂教爾。歐陽修春秋論

躬藥而不嘗者有愛親之心而不習於禮是可哀也無罪之人爾。同

縱而來歸、殺之無赦、而又縱之而又來、則可知爲恩德之致爾。歐陽修縱囚論

若夫縱而來歸、而赦之可偶一爲之爾。同

如有所立卓爾雖欲從之末由也已。論語子罕

夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬可謂仁之方也已。同雍也

「のみ」と訓ずる語に「而已」がある。「而已」は「耳」「爾」「已」と略同義であるが文法上は非常に違ふ。「而已」は二詞であり且つ「而」も「已」も形式動詞であつて感動詞ではない。實は「而して已む」の意である。されば「已」は「而」の下に用ゐるばかりでなく「則」の下へも使ふ。

天之蒼々其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也亦若是則已矣。莊子逍遙遊

「而已」が「而して已む」であるのに對して「則已」は「則ち已む」である。之を何れも「のみ」と訓ずるが「耳」「爾」とは意味の工合は違ふ。

「兮」の用法

「兮」は他の感動詞と違ひ、音律的である。他の感動詞は多少何等かの意義が有るが

「兮」は全く自己の意義がない。唯前語の意義をそのまゝに延長するものである。自己の意義はないが前語の意義を延長するからそれが自己の意義になる。兮は感動詞中用法の最も自由な詞であつて如何なる詞の下へも用ゐ得るものである。例へば

共承嘉惠兮俟罪長沙。側聞屈原兮自沈汨羅。造託湘流兮敬弔先生。遭世罔極兮乃隕厥身。嗚呼哀哉逢時不祥。鸞鳳伏竄兮鴟梟翺翔。闒茸尊顯兮讒諛得志。賢聖逆曳兮方正倒植。世謂伯夷貪兮謂盜跖。廉莫邪爲頓兮鈆刀爲銛。于嗟�兮生之無故。斡棄周鼎兮而寶康瓠。騰駕罷牛兮驂蹇驢。驥垂兩耳兮服鹽車。章甫薦屨兮漸不可久。嗟苦先生兮獨離此咎。訊曰、已矣國其莫我知。獨堙鬱兮其誰語。鳳漂々其高遷兮夫固自縮而遠去。襲九淵之神龍兮沕深潛以自珍。彌融爚以隱處兮夫豈從蝘蜓與蛭螾。所貴聖人神德兮遠濁世而自藏。使騏驥可得羈兮豈云異夫犬羊。般紛々其離此尤兮亦夫子之辜也。鵾九州而相君兮何必懷此都也。鳳皇翔于千仞之上兮覽德輝而下之。見細德之險微兮搖增翮逝而去之。彼尋常之汙瀆兮豈能容吞舟之魚。橫江湖之鱣鯨兮固將制於螻蟻。史記屈原列傳賈生弔屈原辭

などの類だ。

極古い形式感動詞

極古い形式感動詞に「來」「居」「忌」「其」「諸」「且」「些」「思」「止」「只」「軹」「斯」「而」などが有る。詩經などに多く見えてゐる。「來」だけは後世のものにも詩賦などに往々用ゐてゐる。

歸去來兮田園將蕪。胡不歸。陶淵明歸去來辭

伯夷辟紂居北海之濱。聞文王作興曰盍歸乎來。吾聞、西伯善養老者。孟子盡心上

日居月諸照臨下土。乃如之人兮逝不古處。胡能有定、寧不我顧。毛詩邶風日月

夜如何其。夜未央。庭燎之光、君子至止、鸞聲將々。同小雅鴻雁庭燎

叔于田乘乘黃。兩服上襄、兩驂雁行、叔在藪、火烈具揚、叔善射忌。又良御忌。同鄭風大叔于田

椒聊之實、蕃衍盈匊。彼其之子、碩大且篤。椒聊且遠條且。同唐風椒聊

誰謂爾無羊。三百維羣。誰謂爾無牛。九十其犉。爾羊來思其角濈々。爾牛來思其耳濕々。同小雅鴻雁無羊

陟彼南山言采其蕨。未見君子憂心惙惙。亦既見止亦既覯止我心則說。 同召南草蟲

鳳兮鳳兮何德之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而已而今之從政者殆而。 論語微子

唐棣之華偏其反而。豈不爾思。室是遠而。 同子罕

「歸去來」の「去」を孟子の「歸乎來」に由つて「乎」と同しだといふ說がある。又「來」は「哉」と通ずるもので「歸去來」は「歸乎哉」であらうかといふ。そうすれば「歸らむかなや」と讀むべきであるが、よく判らない。普通は「歸りなむかいざ」と讀んでゐる。

「諸」且」は同音で「之于」是于」の音である。「思」止」只」斯」は「是」と類音である。「而」は形式動詞の「而」(カウシテ)代名詞の「而」(ナンヂ)と同音である。そうすればこれら皆代名詞、形式名詞、形式動詞等と語源を同じうするものであらう。

第七節　複性詞の小分

一つの詞でありながら直接の統合關係なき二つ(或は其れ以上もあり得る)の概念を表はすものを複性詞といふ。その表はす二つの概念は直接の統合關係はないが、他詞の媒介に因つて間接の關係を生ずる。その如何なる間接關係が有るかに關して複性詞は二種に分たれる。第一種には「諸」盍」闔」旃」の四つが有り、第二種には「所」攸」の二つがある。

第一種の複性詞

第一種の複性詞は、全く別々なる二概念が一詞に由つて表はされ、他詞の媒介に由つて間接の關係を生ずるものである。「諸」盍」闔」旃」の四つがそうだ。

「諸」の性質

諸は「之於」の二詞或は「之乎」の二詞が約音に由つて一詞となつたものである。

一「諸」が「之於」の意である場合、

子曰、君子求諸己。小人求諸人。 論語衛靈公

臧氏使五人以戈楯伏諸桐汝之間。會出逐之。反奔。執諸季氏中門之外。 左傳昭二十五

予未得爲孔子徒也。予私淑諸人。 孟子離婁

且許子何不爲陶冶。舍皆取諸其宮中而用之。何爲紛々然與百工交易。孟子滕文公

或問禘之說。子曰不知也。知其說者之於天也其如示諸斯乎指其掌。論語八佾

徒取諸彼以與此。然且仁者不爲。況於殺人以求之乎。孟子告子下

「諸」といふ一詞の中には「之」といふ意味があるがそれを形式名詞といふことは出來ない。形式名詞部といふことは出來る。又「於」といふ意味もあるがそれを一品詞と見ることは出來ない。一品詞部といふことは出來る。

「諸」の「之」たる部分と「於」たる部分とは何等直接の關係はないが「之」たる部分は客語となつて上の動詞に關係し「於」たる部分は下の名詞を統率して上の動詞へ關係する。兩部が同じ動詞に關係するからその動詞とこの二者とが一連詞となる。「求諸己」を解剖すれば

となる。「求」と「於」との關係は第四五頁に說く。

二「諸」が「之乎」の意てある場合

齊宣王問曰、湯放桀武王伐紂有諸。孟子梁惠王下

齊宣王問曰、人皆謂我毀明堂。毀諸已乎。同

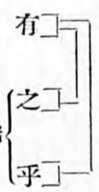
定公問、一言而可以興邦有諸。論語子路

醫戾曰然則救諸。左傳昭二十五

子貢曰有美玉於斯韞櫝而藏諸、求商賈而沽諸。論語子罕

子路問聞斯行諸。子曰有父兄在、如之何其聞斯行之也。同

「諸」の含む「之」の意は形式名詞部て「乎」の意は形式感動詞部てある。そうして「乎」の形式感動詞的意義は決して「之」の意味をその實質とするものてはない。上の動詞の意義を實質とするものてある。「之」の意義と「乎」の意義とは直接には關係がないが二者何れも上の動詞へ關係するから、上の動詞とこの二者とは共に一連詞を成す



ものて之を圖解すれば右の如くになるのである。

「盍闔」の性質

「盍」と「闔」は同じだ。「何不」の約音で「何ぞ」といふ意と「不」といふ意味とを持つてゐる。訓は「なんぞ……ざる」と二度に讀む。「どうだ何々しないか」何うだ何々しようてはないか」と人を誘導するに用ゐる。

伯夷叔齊聞西伯昌善養老。盍往歸。及至西伯卒。 史記伯夷列傳

顏淵季路侍。子曰盍各言爾志。子路曰、願車馬衣(輕)裘與朋友共敝之無憾。顏淵曰願無伐善無施勞。 論語公冶長

哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何。有若對曰盍徹乎。 同顏淵

王謂時子曰我欲中國而授孟子室養弟子以萬鍾使諸大夫國人皆有所矜式。子盍爲我言之。 孟子公孫丑下

伯成子高辭爲諸侯而耕。禹往見之則耕在野。……子高曰昔堯治天下不賞而民勸、不罰而民畏、今子賞罰而民且不仁、德自此衰刑自此立、後世之辭自此始矣、夫子闔行邪、無落吾事。倪々乎耕而不顧。 莊子天地

「盍」の有する「何」の意義は不定副詞的意義で「不」の意義は形式副詞的意義だがこの二意義は直接には關係はない。併し何れも下の動詞に對して修飾語になるのであるから、この二義を有する「盍」と下の動詞とは共に一連詞を成す。圖解すれば

讀むには「盍」を「何不」と見て「蓋ぞ往きて歸せざる」と讀む。

□「盍闔」は「何不」の意である。然るに往々次の樣な奇例が有る。

イ 子張問於滿苟得曰、盍不爲行、無行則不信、不信則不任、不任則不利。 莊子盜跖

闔不亦問是已。奚惑然爲。以不惑復於不惑、是尙大不惑。 莊子徐無鬼

ロ 綬爲儒。河潤九里、澤及三族。使其弟墨儒墨相與辯。其父助翟。十年而綬自殺。其父夢之、曰、使而子爲墨者予也。闔胡嘗視其良、既爲秋柏之實矣。 同列御寇

(イ)は「盍」「闔」の下に「不」が有つて一見「盍」「闔」は「不」の意味がなく唯「何」の意だけの樣に見え

る。(ロ)には「闔」の下に「胡」が有つて一見「闔」に「何」の意味がなくて唯「不」だけの意味の様に見える。これに關して從來徹底した解釋が無い様である。私はこう思ふ。「闔」は「何不」の意であるが一詞で疑問の意(何)と否定の意(不)との二義を表はすのである から二義の中の一方が稍不明瞭に感ずる場合が有ることを免れない。そこで否定の意が稍不明瞭で物足りなく感じた場合には、別に「不」を附け加へて「闔不」とする「闔」は否定の意がないのではなく不十分なだけである。疑問の意が物足りなく感じた場合は「胡」を附け加へて「闔胡」とする。「闔」に「何ぞ」の意がないのではなく唯不十分なだけである。「闔胡」は「何ぞ何ぞ……ざる」の意である。

こういふことは他の場合にもある。例へば「奈何」「胡寧」「豈誰」「業已」「曾經」なども同理である。「奈」「胡」「豈」だけでも疑問の意は有るが不十分に感ずるから「何」「寧」「誰」を加へる。「業」「曾」だけでも「すでに」かつて」の意はあるが不十分に感ずるから「已」「經」を加へる。日本語でも出雲邊の人などが「無からう」といふことを「無かるまい」と云ひ、遠江あたりの人が「有つた」といふことを「有つたつたつた」と云ふ様なのも同理である。英語は古は否定副詞を二つ使ふことが有つたといふ。これを同義重語といふ。單にその意義を明瞭にするためである。

複性詞は日本語には無いから漢文の複性詞を日本語で訓むには二つに分けて二度に讀む。併し二度に讀んでも複性詞てないものは有る。「宜しく……べし」「當に……べし」「將に……むとす」など皆二度に讀むが「宜當」「將」は複性詞ではない。

「旃」の性質

「旃」は「之焉」の約音である。極古くのみ用ゐられた。

臧昭伯之從弟會爲讒於臧氏而逃於季氏。臧氏執旃。（左傳昭二十五）

「執旃」は「執之焉」の義だ。「之」の意味が有る點は形式名詞的で「執」に對して客語となるが「焉」の意が有る點は形式感動詞的である。

第二種の複性詞

□第二種の副性詞は同一概念の二様に働くものが一詞に由つて表はされるものて「所」「攸」の二つが有る。「攸」は極古くのみ用ゐられたもので「所」と同じてある。普通使ふのは「所」である。今

イ　父遺貨財而死子浪費父之所遺

の「所」に就いて言つて見よう。「子浪費父之所遺」は日本語では「子、父の遺す所を浪費す」であつて「所」はたゞ「ところ」と讀む。日本語の「ところ」は其の場合形式名詞である。併し漢文ではこの「所」は父の遺した貨財を指すので下の動詞「遺」の表はす動作の客體たる「所」を指す詞である。故に子が父の遺した「所」の其れを浪費したので「所」は「浪費」といふ動詞の客語である。然るに又一面から觀ると「所」は「遺」といふ動詞の客體でもある。何となれば「遺」は何を遺すのかと云ふと「所」(貨財)を遺すのである。即ち

子が、父が所を遺した所を浪費する

客體　動作　客體　動作

であつて「所」は「遺」の客體であると同時に「浪費」の客體である。貨財といふ同一物でありながらその概念の運用から云ふと二つである。それ故之を複性だと云ふのである。

「所」は「遺」に對してその客體を表はすが、其の表はし方は名詞的でなくて副詞的である。即ち「所」の第一面が「遺」に對する效力は副詞的である。併しその第二面が「浪費」に對する效力は名詞的である。「所」はこの場合副詞部と名詞部との二部を有するのである。

又場合に由つては次の樣に下に「者」といふ詞が有つたり、本名詞が有つたりする。

ロ　子浪費父之所遺者。

ハ　子浪費父所遺之貨財。

これを解釋すれば

ロ　子が、父が所を遺した所の者を浪費する。

ハ　子が、父が所を遺した所の貨財を浪費する。

となる。この場合「所」の第二面は浪費の客語にならずに「者」や「貨財」の從屬語になる。

この「所」を關係代名詞だと解した文法書が有る。成程西洋文典の所謂る關係代名詞に似た點は有る。所謂る關係代名詞には二種有る。一は先行詞が有り一は先行詞がない。

a. The son squandered his fortune, *Which* his father had left him.

子がその財産(其れを彼の父が彼に遺した)を浪費した。

b. This fortune is *What* my father left me.

此の財産は私の父が其れを私に遺した所のものである。

c. I am going *Where* the fire broke out yesterday.

私は其處に昨日火事があつた所のそこへ行きつゝある。

右のabの斜字は關係代名詞、cは關係副詞だ。aには先行詞[fortune](財産)があるがbcには先行詞が無い。漢文の「所」は先行詞がないからaよりはbに似てゐるが、次の動詞に對して副詞的であつて名詞的でないからbよりはcに似てゐる。だから私は關係代名詞だと云ふよりは關係副詞だと云ふ方がまだ近いと思ふ。併し其れも不合理たるを免れない。何となれば「所」にしても英語の所謂る關係代名詞關係副詞にしても、凡べて複性詞である。之を代名詞や副詞として論ずべきものではない。

「所」は複性詞であつて同じ慨念が二樣に運用されるのであるから、之を二面に分けて一面を副詞部とし一面を名詞部として論ずべきである。「所」の有する副詞部は常に客語的である。主語的てはない。日本語で云へば「其れを」「其處を」或は「其れに」「其處に」である。前例の「所」は「其れを」の意てある。「其れに」の意に用ゐれば

騅者羽平日所乘駿馬也。

騅は羽が平日所に乘る所の駿馬だ。

の類だ。

所居住東京之予能知東京之地理。……〔誤例〕

などは文を成さない。「居住」には下に客語「東京」があるから「そこに」の意にはならないし、勿論「それが」の意にはならないから全く義を成さないことになる。

今次へ古文の例を擧げる。皆「其れを」「其處を」或は「其れに」「其處に」の意である。

是故無貴無賤無長無少道之所存師之所存也。韓愈師說

此不肖人之所勉也。非賢者之所務也。史記李斯列傳

仁者以其所愛及其所不愛、不仁者以其所不愛及其所愛。孟子盡心

其子之賢不肖皆天也。非人之所能爲也。莫之爲而爲者天也。莫之致而至者命也。孟子萬章

君之所未嘗食唯人肉耳。易牙蒸其首子而進之。君所知也。韓非子十過

備其所憎禍在所愛。韓非子備內

聶政直入上階刺殺俠累。左右大亂。聶政大呼擊殺者數十人。史記刺客列傳聶政

襄子當出、豫讓伏於所當過之橋下。同豫讓

物無害者無所可用安所困苦哉。莊子逍遙遊六

然龍弗得雲無以神其靈矣。失其所憑依信不可歟。異哉其所憑依乃其所自爲也。韓愈雜說一

子曰視其所以觀其所由察其所安人焉廋哉人焉廋哉。論語爲政

子夏之門人……對曰子夏曰可者與之其不可者拒之。子張曰異乎吾所聞。論語子張

皆「そのものを」「そのものに」であつて「そのものが」の意なのはない。この事は日本では氣が附かない所であつたらしい。唯支那人馬建忠の著文通にはこの事が論じてある。

「所」の副詞化　□「所」が複性詞であることは實に上述の如くである。然るに一面また單性なる副詞としての用法が有る。

其所求進見之士豈有賢於周公者哉。韓愈復上宰相書

其所求進見之士雖不足以希望盛德至比於百執事豈盡出其下哉。同

恃交援而簡近鄰怙强大之救而侮所迫之國者可亡也。韓非子亡徵

の「所」などがそうだ。この「所」は「これに」といふ意の副詞であつて複性詞ではない。

所求進見之士――求進見於此之士――所に進見を求むるの士

所迫之國――迫之之國――所に迫るの國

この「所」は「これに」の意であるから「此に」「之に」と同義である。唯「所」は副詞であるから動詞の上に置かれ「此」「之」は名詞であるから下に置かれる。この用法に於ける「所」は直譯すれば「これに」であるが和訓の習慣はやはり「ところ」と戻つて讀む。

「所謂」「所有」の訓　「所謂」「所有」は普通「いはゆる」「あらゆる」と訓ずるが、漢文としては特殊の連詞ではない。例へば「其所謂道」は「其の所謂る道」と訓ぜられても「其の道と謂ふ所」である。直譯的に讀めば「其の所を道と謂ふ所のそのもの」である。「國中所有名山名川」は「國中の所有ゆる名山名川」と訓ぜられても「國中有る所の名山名川」「國中所を有つ所のその名山名川」である。不斷讀むには何と讀んでも文法を會得するには直譯して見るが善い。

「所以」「所爲」「所自」「所由」「所與」　「所」は「そのものを」「そのものに」の意であつて動詞の客語になる場合が多いが、又前置詞「以」「爲」「自」「由」「與」等の客語になる場合がある。

此乃吾所以居子之上也。史記孫子吳起列傳

此乃ち吾が所を以て子の上に居る所のそれ(理由)だ。

吾不忍爲之民也。所爲見將軍、欲以助趙也。同魯仲連列傳

所の爲に將軍を見る所のそれ(理由)は趙を助けようと思ふのだ。

財用有餘而不知其所自來。莊子天地十二

其の所自り來る所のそれ(本)を知らない。

夫功之成非成於成之日。蓋必有所由起。蘇老泉管仲論

蓋し必ず所に由つて起る所のそれ(本)が有る。

其良人出則必饜酒食而後反。其妻問所與飲食者則盡富貴也。孟子離婁下

所と與に飲食する所のその者(人)を問へば盡く富貴だ。

「所由起」「所與飲食」を「由つて起る所」「與に飲食する所」と讀むと「由」「與」と「所」とは直接の關係が無い樣に見える弊がある。「所由」「所與」は「所に由つて」「所と與に」であつて直接の關係がある。「所以」「所爲」を「ゆゑん」と讀むのはその弊を免れるためである。

所以の用法　「所以」は日本語では「以て……所」と讀む場合もあるが大抵「ゆゑん」と讀む。「ゆゑん」は「故に」の音便であるが今日では日本語の「ゆゑん」は既に一つの形式名詞になつてゐる。併し漢文では「所以」は連詞である。「所」は複性詞でその副詞部は前置詞「以」の客語をなし、その名詞部は「以」及び「以」の被修用語をも統率する。そうしてその「所」が何物を指すかに就いて「所以」の意義が三つに分れる。一は理由原因を指し、二は方法を指し、三は方法物を指す。

一、理由原因を指す

イ　君不出令則失其所以爲君。臣不行君之命而致之民則失其所以爲臣。韓愈原道

帝之與王其號雖異其所以爲聖一也。同

夫待弱國之救忘彊秦之禍。此臣所以爲大王患也。史記張儀列傳

ロ　是故聖益聖愚益愚。聖人之所以爲聖、愚人之所以爲愚其皆出於此乎。韓愈師說

天長地久。天地所以能長且久者以其不自生故能長生。老子上

吾所以有大患者爲吾有身。及吾無身吾有何患。同

「所」は下の動詞の表はす動作の生ずる理由原因を指す。「其所以爲君」は「其の君が此の理由を以て君であるといふ其の理由」の意である。(イ)は理由で(ロ)は原因だ。理由とは人の思想から見て言ひ、原因とは自然的に見て言ふのである。

「所以」が目的を表はす樣に見える場合が有る。

臣所以降志辱身居市井居者徒幸以養老母。史記刺客列傳聶政

などは目的を表はすには相違ないが矢張理由である。目的の存在は行爲の理由である。若し特に目的としての意味を明にしようとする時は「所爲」を用ゐる。

吾不忍爲之民。所爲見將軍欲以助趙也。史記魯仲連列傳

秦所爲急圍趙者前與齊湣王爭彊爲帝、已而歸帝、今齊湣王已益弱、方今唯秦雄天下。此非必貪邯鄲、其意欲復求爲帝。同

所爲見將軍は「所の爲に將軍に見えた所のその理由」の意で「爲」は前置詞である。

二、方法を指す

使錯自將而討吳楚未必無功。惟其欲自固其身而天子不悅。奸臣得以乘其隙。錯之所以自全者乃其所以自禍歟。蘇東坡鼂錯論

先王知其然。是故以不治治之、治之以不治。乃所以得治之也。同王者不治夷狄論

乃今觀卿之書、然後知李斯之所以事秦者皆出於荀卿、而不足怪也。同荀卿論

觀其所以微見其意者、皆聖賢相與警戒之辭。同留侯論

この「所」は下の動詞の表はす動作の方法を表はす。「錯之所以自全」は「鼂錯が或る方法で自分の身の安全を謀つた所の其の方法」である。其の方法は反つて「其の方法もて自ら禍する所の其の方法」であつたといふのである。

三、方法物を指す。方法物とは道具又は材料をいふ。有形物ばかりではない。無形物でも善い。

師者所以傳道授業解惑也。韓愈原道

師は所を以て道を傳へ業を授け惑を解く所のもの(方法物)だ。

孝者所以事君也、弟所以事長也、慈者所以使衆也。大學

郊社之禮所以事上帝也、宗廟之禮所以祀乎其先也。中庸

「所以」は原因理由、方法、方法物を表はすが、原因理由、方法、方法物は同一概念に統一される。何となれば方法は目的を結果として故意に作る原因であり、そうして方法とは作用として觀

て之を言ひ、事物として觀て方法物といふのであり、理由は主張の基礎としての原因であるから、畢竟皆同一物である。

所以の副詞化　前に第四[四]頁で「所」が單性の副詞として用ゐられる場合の有ることを言つたが、之に由つて「所以」も亦單性副詞として「故に」の意となる場合が有る。

安知夫縱之去也不意其必來以冀免所以縱之乎。又安知夫被縱而去也不意其自歸而必得免所以復來乎。夫意其必來而縱之是上賊下之情也。意其必免而復來是下賊上之心也。　歐陽修縱囚論

この「所以」は「ゆゑに」と讀むが善い。直譯すれば「所を以て」である。諸本には隨分無理に戻つて「ゆゑん」と讀んでゐるものがある。

「所」の單用　「所」には副詞部があるから下に動詞が有るべき筈である。然るに、

上曰何謂上計。令尹對曰東取吳西取楚并齊取魯傳敝燕趙固守其所山東非漢之有也。　史記酈布列傳

坐觀其變而不爲之所則恐至於不可救。　蘇東坡電錯論

の「所」の樣に自己の屬すべき動作の觀念を自己の內へ含んで仕舞ふ場合が有る。

卽ち「其所」は「其所守」の意、「其所可爲」の意である。

所と處　「處」は本名詞で場所の意である。又動詞としては「をる」又は「處置」の意である。然るに「所」を次の樣に使ふのはどういふ譯であらうか。

碩鼠碩鼠、無食我黍。三歲貫女。莫我肯顧。逝將去女。適彼樂土。樂土樂土爰得我所。　毛詩魏風碩鼠

懿子曰、彼好專利而妄。夫見君之入也將先道焉、若逐之必出於南門而適君所。　左傳哀二十五

子謂薛居州。善士也。使之居於王所。　孟子滕文公

爲我告魏王。急持魏齊頭來。不然者我且屠大梁。須賈歸以告魏齊。魏齊恐亡走趙匿平原君所。　史記范雎列傳

一見「處」と通ずる樣に見える。併しその用法を見ると必ず名詞の下に用ゐてある。「無處而不適」などの「處」に「所」を用ゐた樣な例はない。これは矢張前項の「所」と同じ用法で「君所」は「君所居」などいふべき「居」の意味を「所」の內部へ含ませたものであらうと思ふ。そうすれば「所」は動詞性名詞である。

「所」と被動　「爲奸臣所乘」などの樣に用ゐた「所」を「被」の意味と思ふのは誤てある。矢張「奸臣が所へ乘ずる所の其れになつた」の意て「所」の普通の用法てある。「所」に「被」の意味が有るのてはない。尙この事は第三七頁、二〇八頁に詳論してある。

攸　音「ゆう」て「所」とは音が違ふが意味は同じてある。極古くのみ用ゐられた。孟子などにもあるが其れはみな詩書の引用又はその擬古てある。

東征西夷怨、南征北狄怨、曰奚獨後予。攸徂之民、室家相慶。曰徯予后、后來其蘇。
商書仲虺之誥

書曰徯我后、后來其無罰。有攸不惟臣。東征綏厥士女。孟子滕文公

王在靈囿、麀鹿攸伏、麀鹿濯々、白鳥翯々。毛詩大雅文王靈臺、孟子梁惠王

「所乎」の辨　莊子に次の樣な奇例が有る。

一晦一明日改月化、日有所爲而莫見其功。生有所乎萌、死有所乎歸。始終相反乎無端、而莫知乎其所窮。莊子田子方四

普通無造作に「生萌す所有り死歸する所有り」と訓じてあるが「乎」の用法が頗る奇てある。私は之を下の如く解釋する。曰く「乎」は感動詞であつて「於是乎」惡乎」などの「乎」と同じて副詞其の他連用の語の下へ附けるものてある。「所」は副詞的意義が有るから下へ「乎」が附く。「生は所に萌す所のそのものが有る」「死は或るものへ歸する所のそのものが有る」の意だから「乎」が「所へ」の下へ附くことは不思議はない。「乎」を「於」(前置詞)と解して「乎に萌す所」と解しても見たが其れはいけないと思ふ。何となれば「乎」を「於」の意の前置詞に使つた例が見當らないからてある。

第八節　變態品詞

單性詞と複性詞　一單詞の內部に異なる二つの性質の無いものは單性詞てあつて、其の性質に因つて名詞、動詞、副體詞、副詞、感動詞等の名稱が與へられる。一詞てありながら內部に異なる二性質を持つて居り、その二性質の間に何等文法上の直接なる統合關係のないものは複性詞てあつて、此れは直に名詞だとか動詞だといふ樣に名づけることは出來ない。

變態の單性詞　一詞の內部に異なる二性質が有つても、二性質の間に直接なる統合關係が有つて、一方が一方を統率して全體を代表するならば、これはその代表

的性質に由つて名詞、動詞……等の名を與へることが出來る。そういふものは矢張單性詞であるが、全然その性質の單一なものと區別して之を變體品詞といふ。例へば日本語で云つて「先生ぶる」「學生らしい」の樣なものは上部に名詞的性質を具へて居り下部に動詞的性質を具へて居るが、名詞的性質は從屬的であつて代表的性質は動詞的であるから、之を動詞といふことが出來る。卽ち「先生ぶる」は事物ではなく動作であるし「學生らしい」は事物ではなくて狀態である。それだから此等は名詞でなくて動詞である。しかし「行く」「歸る」などが正態動詞であるのと違つて此等は變態動詞である。正態品詞でなくて變態品詞である。そうして上部に有する名詞的性質は代表的性質ではないから之を名詞といふことは出來ない。唯之を名詞部といふ。若し其れが動詞的性質であれば動詞部といふ樣に副詞部も副體詞部も有る譯で、それらを總稱して品詞部といふ。

詞の他詞に對する効力　凡そ詞が二つ連つて連詞を成す場合は一方は他の一方に從屬し一方は一方を統率する。「月が出た」といふ連詞に就いて言へば、「月が」は「出た」に從屬し「出た」は「月が」を統率する。「出た月」と言へば其の反對になる。そこで

詞には必ず二つの効力がある。一は他を統率するか統率しないかに關する効力で之を縱的効力と云ひ、一は他に從率するかしないかの効力で之を横的効力と云ふ。「月が出る」に就いて言へば「月が」は縱的には單行的で他語を統率せず、横的には從屬的で「出る」へ從屬してゐる。「出た」は縱的には對行的で月を統率し、横的には獨立的で他へ從屬しない。又「良い月が出た」に就いて言へば「月が」は縱的に對行的で「善い」を統率してゐる。日本語で云へば縱的効力とは上の語に對する効力で横的効力とは下の語に對する効力であるが、漢文では必ずしもそう云へない。何となれば漢文では「花を觀る」を「觀花」と云ふ樣に、語の排列が違ふ場合があるからである。

變態詞の他詞に對する効力　凡そ變態品詞の從屬部の縱的効力（從屬語に對する効力）は正態品詞と同じである。それが名詞部であればその縱的効力は名詞と同じで、動詞部であれば動詞と同じである。併し從屬部は他詞に對して横的効力（統率語に對する効力）を持つて居ない。何となれば一詞の內部に於てその代表部へ從屬して居るのであるから、外部の他詞に對しては何等の立場もないのである。變態品詞の代表部は全詞を代表するのであるから、其の縱的効力も横的効力も全

く正態品詞と同じてある。例へば變態の動詞「先生ぶる」はその獨立して意味が切れるか、他語へ從屬するかに關して他の正態動詞と同樣であるが、同時に又上に主語を置くことも副詞を置くことも出來る樣な點も他の正態動詞と同樣てある。上部に「先生」といふ名詞部の有る無いに關係しない。

變態詞の種別　變態詞は其の代表部の性質に因つて品詞別が立てられる。卽ち變態名詞、變態動詞、變態副詞等の別が有る。そうして其の中には複雜な變態もある。

變態名詞

變態名詞は一詞の內部に從屬部として異なる性質を持つてゐる名詞てある。其の著しいものに動詞性名詞、副詞性名詞、名詞性再名詞の三つが有る。

動詞性名詞

動詞性名詞は一名詞の內部に從屬部として動詞的性質を持つてゐるものてある。

卽ち動詞として言ひ懸け、まだ一詞を成さない中にその態度を改め、名詞として其の詞を終るものてある。

子路從而後遇丈人以杖荷蓧。論語微子

の「荷」は動詞性名詞てある。その動詞的效力としては主語「丈人」を統率し、修用語「以杖」を統率し、客語「蓧」を統率してゐるが、その名詞的性質としては自分が客語となつて「遇」に從屬する。そうして――の全體をして一つの連詞的名詞たらしめる。

孟子曰、君子深造之以道、欲其自得之也。自得之則居之安、居之安則資之深、資之深則取之左右逢其原。孟子離婁下

孔子之作春秋也、諸侯用夷禮則夷之、夷而進于中國則中國之。經曰、夷狄之有君不如諸夏之亡。韓愈原道

今其言曰、曷不爲大古之無事。是亦責冬之裘者曰、曷不爲葛之之易也。責饑之食者曰、曷不爲飮之之易也。同

博愛之謂仁、行而宜之之謂義、由是而之焉之謂道、足于己無待於外之謂德。同

其爲道易明、其爲敎易行。同

志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元。孔子奚取焉。取非其招不往也。孟子萬章

右の＝は皆動詞性名詞である、そうして――の全體をして一連詞的名詞たらしめる。

動詞性名詞は日本語では第四活段を用ゐる。右の例の訓の「荷ふ」以てする」自得する」居る」資る」等皆そうだ。その名詞的意義を明瞭にするために形式名詞「こと」を添へて「之に居ること」之を資ること」などの様にいふことが有るがそれは意譯だ。

聞古之人有舜者其爲人也仁義人也。韓愈原道

麟之爲物不畜於家不常有於天下其爲形也不類。同獲麟解

周公之爲輔相其急於見賢也方一食三吐其哺方一沐三握其髮。同復上宰相書

の「爲人」爲物」爲形」爲輔相」の「爲」は皆同樣な動詞性名詞である。意譯すれば「人間ぶり」(爲人)「宰相ぶり」(爲輔相)……である。「爲人」だけは特に「人たる」と讀まずに「人となり」と讀むことになつてゐる。

副詞性名詞

副詞性名詞は一詞の中に副詞的性質と名詞的性質とを有し、副詞的性質を從屬的性質とし名詞的性質を代表的性質とするものである。

夫衞之所以爲衞者以蒲也。今伐蒲入於魏衞必折而從之。史記樗里子列傳

古之士三月不仕則弔。故出疆必載質。然所以重於自進者以其於周不可則去之魯於魯不可則去之齊於齊不可則去之宋之鄭之秦之楚也。韓愈復上宰相書

仲尼曰始作俑者其無後乎爲其象人而用之也。孟子梁惠王上

往役義也往見不義也且君之欲見之也何爲也哉曰爲多聞也。同萬章

の「以」爲」の類がそうだ。「以」爲」はもと歸著形式副詞卽ち前置詞であるが、こゝでは副詞性名詞(前置詞性名詞)となり、副詞(前置詞)的性質としては其の下の語を客語に取り其の上て――の全體をして一名詞たらしめる。

名詞性再名詞

名詞性再名詞は詳しく云へば敍述態名詞性の表示態名詞である。例へば

北冥有魚其名爲鯤。鯤之大不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。鵬之背不知其

幾千里也。莊子逍遙遊

事有曠百世而相感者。余不自知其何心。韓愈祭田橫墓文

一齊人傅之衆楚人咻之雖日撻而求其齊也不可得矣。引而置之莊嶽之間數年、雖日撻而求其楚亦不可得矣。孟子滕文公下

商君亡至關下欲舍客舍。客人不知其是商君也曰商君之法舍人無驗者坐之。史記商君列傳

蜂房水渦矗不知其幾千萬落。杜牧阿房宮賦

の「幾千里」其の他――の語は皆敍述態の名詞として上の「其」に就て之を敍述して居るが、其の敍述の結果を一つの概念として再び名詞を成してゐる。敍述態名詞としての意義は「幾千里なり」の意であるが、其れが「幾千里なること」の意になつてゐるから再名詞なのである。そうして――の全體を一つの連詞的名詞たらしめる。

變態動詞

變態動詞は一詞の內部に異なる性質を有する動詞である。其の著しいものは名詞性動詞、副詞性動詞動詞性再動詞の三つである。

名詞性動詞

名詞性動詞は名詞の性質を從屬部に有し、そうして動詞的性質を有する部分が全體を代表するものである。これに色々有る。

一、名詞を材料として、「爲」といふに等しき意義を以て之を統率するもの

君君臣臣。　　君爲君、臣爲臣。

父父子子。　　父爲父、子爲子。

の上段の――の類だ。單に「君臣」といふものを表はすのではなく「君たり臣たり」といふ意義である。

名詞はどういふ場合にこういふ名詞性動詞になるかといふと、其れは先づ第一にその物が單に物と考へられずに、人の或る動作の結果生じた生產物と考へられる。生產物の概念の中には生產作用の概念が有つて其れが物の概念へ從屬してゐる。始めは作用の概念が物の概念へ從屬して居つても作用の概念の方が深く注意さ

れると次には物の概念の方が作用の概念へ從屬し作用の概念が物の概念を統率する樣になる。そうなると生産物の概念は一面生産物の概念でありながら一面生産作用の概念であることになる。そうして名詞性と動詞性とを兼ねる所の一詞となる。これが名詞性動詞である。若しこの生産物の概念が物の概念と作用の概念との二つに分解されて二詞に成れば、右の例の「君」父は下段の「爲」君「爲」父となる。そこで右の例の上段と下段とは同じ意義を成すのである。唯上段の「君」父は分解されずに居り、下段は分解されてゐるだけの相違である。日本讀では上段の例も下段の例も同樣に「君たり」父たり」といふ樣に「たり」を添へてよむ。日本語の「たり」を解釋すれば「たり」は「とあり」の約言で「と」は生産物を示す助辭「あり」は生産性の形式動詞である。それが約せられて出來た「たり」は生産物と生産作用とを示す助辭である。嚴密に直譯すれば右の例の名詞性動詞「君」父」は「君たり」父たり」として下段の「爲君」爲父」は「君とあり」父とあり」である。

右の例は客語を有して居ない例であるが、次の樣にその生産性作用に客語の有ることもある。○は客語。

父父」焉、子子」焉。
君君」焉、臣臣」焉。

下に「而」があつて「たりて」の意なる場合及び「而」が無くてもそういふ意味を含む場合は、日本語では「たりて」といふことは續きが惡いから「として」といふ。例へば

臣」焉而不君」其君、子」焉而不」父」其父。韓愈原道

焉に臣として其の君を君とせず、焉に子として其の父を父とせず。

「臣たりて」子たりて」の意であるが「臣として」子として」と讀むのである。

この用法は自動の生産性動詞的である。併し生産性の客體は自己の內部に之を含んで居るから別に生産性の客語は要らない。之を生産性の非生産化といふ。

今次へ古例を擧げる。

イ 天皇氏以木德王。十八史略大古

齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰善哉、信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟吾得而食諸 論語顏淵

鼎鐺、玉石、金塊、珠礫、棄擲邐迤、秦人視之不甚惜。杜牧阿房宮賦

晏子長不滿六尺身相齊國名顯諸侯。史記管晏列傳

吳王僚因楚喪使二公子將兵往襲楚。同伍子胥列傳

管仲相威公霸諸侯攘戎狄終其身齊國富彊諸侯不敢叛。蘇老泉管仲論

增之欲殺沛公人臣之分也羽之不殺猶有君人之度也。蘇東坡范增論

人皇氏兄弟九人分長九州。十八史略大古

(イ)は客語のない場合である。(ロ)は客語の有る場合で依據性だ。

又次の樣なのも右の(イ)に屬する。

詩云經始靈臺經之營之庶民攻之不日成之經始勿亟庶民子來。孟子梁惠王上

夫秦失其政陳涉首難豪傑蠭起相與竝爭不可勝數。史記項羽本紀贊

豫讓曰臣事范中行氏范中行氏皆衆人遇我我故衆人報之至於智伯國士遇我我故國士報之。史記刺客列傳

天下初發難也俊雄豪傑建號壹呼天下之士雲合霧集魚鱗襍遝熛至風起當此之時憂在亡秦。同淮陰侯列傳

今乃聽於羣臣之說而欲臣事秦。同蘇秦列傳

の‖は名詞性動詞であつて「子は「子たり」の意「雲は「雲たり」の意である。「子來」は「子と來る」で「魚鱗襍遝」は魚鱗と襍遝する」である。

雨下　霧散　蟻集　鳥合　雁行　鼎立

櫛比　林立　風發　響應　星羅　碁布

蠶食　狐疑　雄飛　雌伏　牛飲　馬食

針小　皿大　雪白　漆黑　水平　砥平

などこの類である。但し漢文の習慣として二字の連詞は一氣に讀んで之を單詞化する場合がある。讀む心持で何方にもなる。連詞として讀めば「子來」は「子と來る」である。單詞として讀めば「子來」である。「子のごとく來る」といふ風に讀むのは意譯だ。「魚鱗襍遝」の樣に四字のものは常に連詞である。

二　名詞へ「爲」の意を持たせて「變某爲某」「使某使某爲某」の意に用ゐるもの、

人其人廬其廬　(使其人爲人使其廬其廬爲廬)

其の人を人にし其の廬を廬にす。

の「人」「廬」の類だ。唯「人」「廬」といふ物を表はすのではなく、その物が或る動作の結果生

ずる生産物であることと、及びその生産作用とを表はす。矢張事物を生産物と見た場合に其の名詞が名詞性の生産動詞となるのである。日本語では名詞へ「にす」を添へて「人にす」「廬にす」といふ樣に讀む。「人たらしむ」「廬たらしむ」と讀んでも善い譯である。

この用法は他動の生産性動詞としての非生産態に在る。今次にその古例を擧げる。

今者無故誘致虜使以詔諭江南爲名是欲臣姜我也是欲劉豫我也劉豫臣事醜虜南面稱王……一旦豺狼改慮捽而縛之父子爲虜。胡澹進上高宗封事

孔子之作春秋也諸侯用夷禮則夷之夷而進于中國則中國之。韓愈原道

龍乘是氣茫洋窮乎玄間薄日月伏光景感震電神變化水下土汨陵谷。韓愈雜說一

非盡天下之地臣海內之王者其意不厭。史記刺客列傳荊軻

左白臺而右閭須南威之美也前夾林而後蘭臺強臺之樂也有一於此足以亡其國。戰國策魏

三　名詞に「爲」の意を持たせて「以某爲某」或は「視某爲某」の意に用ゐるもの、

般既滅矣天下宗周。〔天下以周爲宗〕

般既に滅ぶ。天下周を宗とす。

臣焉而不君其君。〔爲之臣而不以其君爲君〕

焉に臣として其の君を君とせず

の「宗」君」は宗、君その物を表はすと同時に人が宗、君として取扱ふ動作をも表はす。即ち「以爲宗」以爲君」の意が有る。日本讀では「とす」を添へて讀む。

これも他動の生産性動詞としての非生産態であるが前の「二」とは違ふ。「二」は物を變更するもので意義が客觀的であるが、この「三」は物をそういふ風に待遇しそういふ風に思ふ意で思念的である。前の「二」は「何々にす」と讀むが此の「三」は「何々とす」と讀む。文法上の理論から言ふと「二」も「三」も生産性動詞であるから兩方とも「とす」と讀むべきであつた。何となれば生産物を示す記號は「と」であつて「に」ではないからである。所が兩方とも「とす」と讀むと、客觀的と思念的との區別が就かない。その區別を明にする爲に一方を「にす」と讀むのである。

老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼天下可運於掌。孟子梁惠王

經曰不獨親其親則天下皆親不獨子其子則天下皆子。馮用之機論

此魯仲連所以義不帝秦、非惜夫帝秦之虛名、惜天下之大勢有所不可也。胡濟菴上高宗封事

分天下王諸將、羽自立爲西楚霸王。十八史略西漢

故齊王橫與其徒五百餘人入海島。上召之曰、橫來、大者王、小者侯、不來且舉兵誅。同

生乎吾前其聞道也固先乎吾、吾從而師之。韓愈師說

其所謂道道其所道。非吾所謂道也。其所謂德德其所德。非吾所謂德也。同原道

これら皆「とす」と讀むものである。又次の樣に「として」と讀んで他の動詞と續くのが有る。

繆公之於子思也亟問亟餽鼎肉。子思不說於卒摽使者出諸大門之外北面稽首再拜而不受、曰今而後知君之犬馬畜仇。自己名孟子曰、食而不愛豕交之也。愛而不敬獸畜之也。同盡心上

豫讓曰、臣事范中行氏。范中行氏皆衆人遇我、我故衆人報之、至於智伯國士遇我、我故國士報之。史記刺客列傳

及秦軍降諸侯諸侯吏卒乘勝多奴虜使之。同項羽本紀

「師事」「兄事」「奴隸視」「對岸火視」「雲煙過眼視」などもこの例である。この例は他動であるから第四四頁の例の自動であるのとは區別されなければならない。

四 進行性なるもの　時間や方向は靜止的にも考へられるが、進行的にも考へられる。進行的に考へた場合は、その時間、方向は經過した時間、進行した方向であるから、進行作用の觀念が含まれてゐる。此の進行作用の觀念に重きを措くとその名詞は名詞性動詞になる。

管仲卒。齊國遵其政常彊於諸侯。後百餘年而有晏子焉。史記管晏列傳

當是時也禹八年於外、三過其門而不入。孟子滕文公

天下靡然從公復歸於正。蓋三百年於茲矣。蘇軾韓文公碑

「百餘年」は「百餘年」といふ時間と其の經過とを表はすものである。通常「百餘年にして」と讀むが、直譯すれば「百餘年して」である。「八年於外」は「外に八年し……」である。方向の名詞も「溯長江六百里而到漢江」などの樣に進行性の動詞となる。凡そ數詞

は皆そういふ風に用ゐられる場合が有る。

五 存在性あるもの　凡ゆる事物の觀念にはその存在の意が含まれてゐる。その存在の意が注意された場合にはその名詞は名詞性の存在動詞となる。

角者吾知其爲牛蠶者吾知其爲馬。　韓愈獲麟解

周道衰孔子沒火于秦黄老于漢佛于晉宋魏隋齊梁之間其言道德仁義者不入

于楊則入于墨不入于墨則入于老不入于老則入于佛。　同原道

春王正月戊申朔隕石于宋五。　左傳僖十六

子謂仲弓曰犂牛之子騂而角雖欲勿用山川其舍諸。　論語雍也

六 運用性のもの　「兵」「鋤」「鑿」「鋸」「指」「目」などの樣な器具機官の概念にはそれ〴〵その運用の觀念が從屬して居るから、その運用に重きを置けば名詞性動詞になる。「兵す」は殺す意味、「鋤す」は耕す意味、「鑿す」は穿つ意味、「鋸す」はひく意味、「筆す」は書く意味、「火す」は燒く意味、「膏す」は油をさす意味、「飯す」は食はせる意味、「指す」はさす意味、「目す」はめくばせする意味である樣に其れ等の物を用ゐてその作用を發揮する意味になる。

其の他種々のものがあるであらう。但し「衣る」「服す」「冠す」「履す」「帶ぶ」「樹つ」の類「國す」「都す」「家す」「城く」「次ぐ」「隣す」「位す」「基す」「軍す」「陣す」「屯す」「舍る」「泊す」の類は名詞性動詞と見るよりは、同じ原辭が名詞にも動詞にも用ゐられるものと見るべきであらうか。

詞の妙用　漢文は各詞が大抵單音であつて活用が無く且つ助辭が無く、それで巧に各詞を用ゐて簡潔に思想を表はすものであつて、此の點に於て實に世界無比のものである。勿論俗事の實用には不便なものであるが、古典としてその妙味を味ふには及ぶものが有るまいと思ふ。殊に名詞性動詞の妙用に至つては實に感服の外ない。論語などの文章が崇高であるのもそういふ點が大に關係すると思ふ。之を若し書き下しにしたならば價値は十分の一もないことになる。何となれば助辭や語尾や殺風景な贅物が澤山目に這入るからである。彼の韓愈の原道の

子焉而不父其父臣焉而不君其君民焉而不事其事。

を書き直して

與之爲子而不以其父爲父與之爲臣而不以其君爲君與之爲民而不以其事爲

事。

としたならばどうであらうか。更に之を

これに子として其の父を父とせず、これに臣として其の君を君とせず、これに民として其の事を事とせず。

としたならば全く文の妙味はなくなるであらう。讀むには日本語で讀んで結構である。讀めば非常に長くなるものが僅少の文字に巧く表はされてゐる處が善いのである。

副詞性動詞

副詞性動詞は副詞的性質を從屬部に持つた動詞である。これに種々有る。

本副詞性動詞

本副詞が形式動詞「爲(ス)」の意味を含むと次の樣な副詞性動詞になる。

天之生㆑大聖㆒也不㆑數(セ)其生㆑大惡㆒也亦不㆑數(セ)。韓愈對馮問

且周公以㆓王之言不㆒可㆑苟(セス)而已必從而成(サバ)之也設有㆑不幸王以㆓桐葉㆒戲㆓婦寺㆒亦將舉而從㆑之乎。柳子厚桐葉封弟辨

太子曰无(ナカリシモ)事㆓於齊㆒吾猶不㆑敢(ナセ)今以㆓君命㆒奔㆓齊急㆒而受㆑室以歸是以師婚也民其謂㆓我何㆒。左傳桓六

句讀之不㆑知惑之不㆑解或師㆑焉或不(セス)焉。韓愈師說

天可㆑必(ス)乎賢者不㆒必貴㆓仁者不㆒必壽㆓天不㆑可㆑必(ス)乎仁者必有㆑後。蘇東坡三槐堂銘

「不數」は「不數生」の「生」の形式的意義「爲」が「數」の中へ含まれたので「不數爲(セ)」の意である。

だからこゝでは「數」が副詞性を有しながら一つの動詞である。

「氷炭不晉」不零壞翃」などの「晉」も副詞性動詞である。通常「氷炭晉ならず」零壞も翃(ツバ)ならず」と讀むが「晉ならず」と讀んでは日本語としては語を成し憎い。これは矢張他の副詞性動詞の例に倣つて「氷炭晉せず」といふ樣に讀むべきである。「せ」は形式動詞の「す」であるから前言の氷炭を指し晉氷炭の相違をする意になる。

前置詞性動詞

前置詞卽ち歸著性ある形式副詞が「爲」の意味を含んで形式動詞化したものに「以」、「於」、「自」、「與」、「爲」等がある。

「以」の用法

「以」は前置詞としては「以て」の意であるが前置詞性の形式動詞としては「以てす」の意である。卽ち「以て」の意味を從屬部とし「す」の意を代表部とするものである。用法が二つある。

一　寄生形式動詞としての用法

陳涉之得民也、以項燕扶蘇、項氏之興也、以立楚懷王孫心。而諸侯叛之也、以弑義帝。蘇東坡范增論

三代之得天下也、以仁、其失天下也以不仁。孟子離婁

の「以」は皆「以てす」の意である。「以項燕扶蘇」は「以項燕扶蘇得民」の意、「以立楚懷王孫心」は「以立懷王孫心興」の意だが「得民」と「興」は上に有るから其の形式的意義(卽ち「す」といふ意義)を「以」の中へ含ませることが出來る。そうすれば「以」は「以てす」の意味になる。そうして其の「す」といふ形式動詞的意義は何に由つて實質化するかといふと上の「得民」興」叛之」に寄生するのである。上の「得民」興」叛之」は皆自己の立場を持つてゐる語で決して「以てす」に對する補充語ではない。然るに「以てす」が勝手にそれを利用するのである。

二　單純形式動詞としての用法

古人秉燭夜遊良有以也。況陽春召我以煙景大塊假我以文章。李太白春夜宴桃李園序

千乘之國攝乎大國之間、加之以師旅、因之以饑饉。論語先進

子曰道之以政齊之以刑、民免而無恥。道之以德齊之以禮有恥且格。論語爲政

この「以」は「以てす」の意ではあるが(一)の「以」とは用法が違ふ。(一)の用法では「以てす」の「す」といふ意味が上の語(得民、興)へ寄生するのであるが、此の(三)の用法では「す」の意味が前の語へ寄生するのではない。この(三)の用法の。は「以てす」に對する單純な補充語であつて別の役目はない。それだから「以てす」の用法は單純形式動詞としての用法である。

「召我以煙景」を「我を召すに煙景を以てす」と讀むが其れは外に日本語として適當な

讀み樣がないからてある。「召」が實質語て「以てす」が形式語てあるから「召」の意味は直接に「以てす」の「す」へ懸るのである。直譯すれば「召於」てある。「勉强す」運動す」などに於けると同樣に「召し爲」である。「召しす」て意味が分り憎ければ假に「召すことす」としても善い。唯「召すこと」といふと名詞の樣に聞えるから名詞てなく動詞てあると思ふ必要がある。

陽春、我を召すこと煙景を以てす……(召すことす)

。の動詞が漢字二字の場合ならば讀むのに都合が善い。「攻擊敵軍」以「奇兵」は

敵軍を攻擊、奇兵を以てす……(攻擊す)

「攻擊」か「ら直接に「す」へ續けて「攻擊す」と讀んて見れば「攻擊」と「以」との關係がよく分る。「召我以煙景」も「攻擊敵軍以奇兵」も皆一つの連詞的動詞てある。前の〔二〕の例と違ふ點はそこだ。〔三〕の例と此の〔三〕の例と違ふことは上へ「不」を附けて見ると分る。

(甲) 陳涉之得民也以項燕扶蘇

陳涉之得民也不以項燕扶蘇……否定

(乙) 陽春召我以煙景

陽春召我以煙景……否定イ

陽春不召我以煙景……否定ロ

(乙)の例てはイの樣に「不」を「召」の上に置くことが出來る。是れ「召」が「以てす」に對する單純補充語てあつて「召」と「以」とが素直に統合されてゐることを證するものてある。(甲)の例てはそうは行かない。「以てす」に對する補充語がないのてあるから「不」は直接に「以」の上へ置くより外の置き方はない。「不」だけではない。「可」ても「宜」ても「勿」てもそうだ。

古例て言へば

齊桓公飲酒、醉遣其冠。恥之三日不朝。管仲曰、此非有國之恥也、公胡其不雪之以政。韓非子難二

聽不失一二者不可亂以言。計不失本末者不可紛以辭。史記淮陰侯列傳

「不」は必ずしも「以」の直ぐ上にのみ用ゐるのてはない。

「於」「于」の用法

前置詞の「於」「于」が形式動詞「爲」の意味を帶び「於」「于」の意味が從屬部となり「爲」の意味が代表部となつて「於てす」「于てす」の意となる場合がある。前置詞性形式動詞である。

これに用法が二つある。

一　寄生形式動詞としての用法

子曰、民之過也各於其黨、觀過斯知仁矣。論語里仁

子曰由之鼓瑟、奚爲於丘之門。論語先進

君子無終食之間違仁。造次必於是顚沛必於是。同里仁

臣聞爭名者於朝、爭利者於市。史記張儀列傳

薄言采芑、于彼新田、于此菑畝。毛詩小雅采芑

瞻鳥爰止、于誰之屋。同節南山正月

「於其黨」は「於其黨過之」の意である。「過之」と云はなくてもその動作は既に分つてゐるから言ふ必要はないが、「於」が副詞であつては意味が終止しないから「過之」の動作の形式的意義(「爲」といふ意義)だけを取つて「於其黨爲」と云つて善い。その「爲」の意義を更に「於」へ含ませて仕舞へば「於」は「於てす」の意となつて前置詞性動詞となるのである。

「於」と「于」とは意義上の相違は殆ど認められない。併し此の「」の用法では普通「於」の方が用ゐられ「于」の方は極古く用ゐられただけである。

二、單純形式動詞としての用法

少焉月出於東山之上、徘徊於斗牛之間。蘇東坡赤壁賦

有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。論語學而

君子食無求飽、居無求安、敏於事而愼於言、就有道而正焉、可謂好學也已。同

詩云、王赫斯怒、爰整其旅、以遏徂莒、以篤周祜、對于天下。此文王之勇也。孟子梁惠王

萬章問曰、舜往于田、號泣于旻天。何爲其號泣也。孟子萬章上

「於」「于」の此の用法の普通の解釋は下の三種であらうと思ふ。今之を批判して眞の解釋を得ようと思ふのである。

1「於」「于」は動詞(前例、遊)の下、名詞(赤壁之下)の上へ置くもので名詞(赤壁之下)が客語(依據性)であることを明示する記號(助字)であるといふ日本文典流の解釋

2「於」「于」は前置詞であつて名詞(赤壁之下)の上へ置かれ、名詞(赤壁之下)と共に一つの小句

(Phrase)と爲つて上の動詞(遊)に對して修飾語になるといふ西洋文典流の解釋

3、同上客語となるといふ解釋

此の三種の解釋には缺陷が有る。

(1)の解釋は「於」「于」を日本の「に」と同性質のもの卽ち助辭と見て唯「に」は名詞の下へ附き「於」「于」は名詞の上へ附くだけの相違と見てゐる。これは甚だ粗雜な考である。日本の「に」は名詞の下へ密著し名詞と共に一名詞となるもので、名詞の格を示す記號であつて、名詞から切り放して一詞を成すだけの單獨性はないが、漢文の「於」「于」は名詞の上へ密著するものではない。名詞の上に修飾語が有れば「於」「于」はそれよりも上へ置かれるのであるから「於」「于」は名詞から切り放されて一詞を成すだけの單獨性がある。「於」「于」は助辭ではなくて品詞としての一詞である。既に一詞である以上は「於」「于」と下の名詞との間に文章論(相關論)的の關係を認めなければならない。「於」「于」を單に助辭であるとする解釋は誤つてゐる。そこで(2)の解釋が生ずるのである。

(2)の解釋は「於」「于」を前置詞とするのであるから「於」「于」と下の名詞(赤壁之下)との間に客體關係を認めてゐる。この點に於て(1)の解釋の缺點は濟はれるが、更に第二の難關に到達する。それは「於」「于」と下の名詞とより成る連詞(於赤壁之下)を上の動詞(遊)に對する修飾語とすることである。漢文の法則として修飾語が被修飾語の下に置かれることは特殊の場合の外には無い。動詞(遊)より下に在る語(於赤壁之下)を修飾語とすることは漢文の齊一なる法則に例外を作ることになる。解釋の到らないことを省みずに例外を作るべきものではない。この缺陷を免れるために(3)の解釋が生ずる。

(3)の解釋は(2)で修飾語と見たものを客語と見るのである。動詞(遊)の下に在る語(於赤壁之下)を客語と見るのであるから、客語が歸著語の下に置かれるといふ漢文の大法則に合致してゐる。併しながらこれは前置詞の性質を無視したものである。「遊」に對しての客語ならば「赤壁之下」だけで「於」の必要はない。「遊赤壁之下」でなければならない。「於」まで入れて「遊」の客語であるといふことは「於」の意義を無視したもので却つて(1)の解釋に陷つたものである。「於」を單に客語の記號と見ながら自ら共れに氣附かないものである。「赤壁之下」が「於」の客語であるのに「於赤壁之下」が又「遊」の客語となるとは如何なる概念關係を成すのであるか。その說明が出來ない以上は(3)の解釋は成立しない。

以上の樣な缺陷があるから右の三種の解釋は何れも成立しない。そこで別に解釋を求める必要が有る。私の考は次の如くである。

私は「月出於東山之上」などいふ「於」は「矢張「於てす」の意であると思ふ。「月出づること東山の上

に於てす」の意で「出づる」は動作の實質的意義を表はし「於てす」は動作の形式的意義を表はすものであると思ふ。其う考へた根據は次の二つである。

〔イ〕「以」「於」「目」等の各の三用法を比較すると次の如くなる。

甲	乙	丙
1 以レ德報レ怨	其報レ怨也以レ德	報怨以德
2 於レ言愼レ之	其愼レ之也於レ言	愼之於言
3 日自レ東出	日之出也自レ東	日出自東

この對照に於て「以」「於」「目」は其の意義は(1)(2)(3)各異なつて居るが其の用法は(1)(2)(3)皆横に甲に於て等しく乙に於て等しく丙に於て等しいと思ふ。然らば丙に於て(1)「報怨以德」の訓「怨に報ゆるに德を以てす」が文法上正しいならば丙の三句の直譯は皆同樣に

1 怨に報ゆるに德を以てす

2 之を愼むに言に於てす

3 日出づるに東に自つてす

であるべきだと思ふ。――は形式語で、――はその形式的意義を實質化させるための單なる補充語である。「怨に報ゆるに」と讀んでも「に」はまだ意譯である。眞の直譯ならば「に」は要らない。「に」を除いて

1 怨に報ゆる(こと)德を以てす

2 之を愼む(こと)言に於てす

3 日出づる(こと)東に自つてす

と云へば尙善い。「こと」の意を含めて讀むのである。

〔ロ〕從來「月出于東山之上」の類は「月東山の上に出づ」と讀み「月之出也于東山之上」の類は「東山の上に于てす」と讀んでゐるがその何れとも言へない樣な例が有る。

萬章問曰舜往二于田一號二泣于旻天一。何爲其號泣也。孟子曰……長息問二於公明高一曰舜往二於田一則吾既得レ聞レ命矣、號泣于旻天于父母則吾不レ知也。　孟子萬章上

方二唐貞觀開元之間一、公卿貴戚開館列第於東都者號二千有餘邸一。　李文叔書洛陽名園記後

の「于」「於」などは

旻天に父母に號泣するは

號泣すること旻天に于てし父母に于てするは　則ち……

公卿貴戚　東都に館を開き第を列ぬる

館を開き第を列ぬること東都に於てする　者……

こういふ風に二通りに讀める。勿論その何れかが漢文の精神に叶ふものでなければならないが、その見分は中々難かしい。蓋しそういふ例の存することは「於」「于」の「一」「二」の二用法が從來の學者が考へた程根本的の相違のあるものでないことを證するものであらうと思ふ。「に」と讀めば助辭になり「於てす」と讀めば動詞になる。そんな激しい相違があるものではなく兩方とも「於てす」であつて

月出於東山之上……月出づる東山の上に於てす

月之出也於東山之上…月の出づるや、東山の上に於てす

の如き區別だらうと思ふ。

以上の二つの理由から私は次の如く解釋する。

□「於」「于」はもと前置詞であつて、その用法は第一に

孟子對曰於傳有之。孟子梁惠王

民於其黨過之。

の＝の如く。の名詞を統率し。と共に連詞的副詞を成しその下の動詞――を修飾するに在る。（これが前々頁の甲である）。この用法では前置詞であるから敍述性がない。

これへ動作の形式的意義（「爲」の意義）が加はると

其有之也於傳。

子曰民之過各於其黨。論語里仁

の「於」の樣に「於てす」の意となる。これは前置詞性の寄生形式動詞である（卽ち第四五頁の乙である）。この「爲」といふ寄生形式動詞的意義が轉じて單純形式動詞的になると

有之於傳。

民各過於其黨。

となる。「有之」と「過」は動詞で單に實質的意義を表はす。下の客語。。に對する依據性が不明確であるから、之を明確にする爲に「於てす」といふ形式動詞を添へる。「於てす」は上の――に對する形式語となつてその動作の形式的意義（爲）を表はし且つ下の客語。。を統率する。そこで「有之於」は「之有りす」の意、「過於」は「過ちす」の意になる。

之を圖解すると

民各過ぎ　歸著語　於（オイテ）　其黨　客語　実質語（アヤマチ）　形式語（ス）

民は各其黨に過ちす　於て

徘徊　歸著語　於（オイテ）　斗牛之間　客語　実質語　形式語（ス）

斗牛の間に徘徊す　於て

「於」「于」は尙次の樣な例のあることを知る必要がある。

子路欲殺衞君而事不成。身菹於衞東門之上。是子孰之不至也。子自謂才士聖人邪。則再逐於魯。削迹於衞。窮於齊。圍陳蔡不容身於天下。子孰子路菹此患。莊子盜跖

及寡人之身、東敗於齊、長子死焉。西喪地於秦七百里。南辱於楚。寡人恥之。孟子梁惠王

且陽子之不賢則將役于賢以奉其上矣。若果賢固畏天命而閔人窮也。惡得以自暇逸乎哉。韓愈爭臣論

此等の例も前と同じてあるが唯上の動詞をして被動態たらしめる。直譯は「敗於齊」は「齊に於て敗られす」（敗られ齊に於てす）である。

衞公出于衞、公出于壤隤。左傳成十六

桓公渴餒而死南門之寢公守之室。身死三月不收蟲出于戶。韓非子十過

九成之臺起于累土。老子下

召莊公于鄭而立之、以親鄭。左傳桓二

この場合は上の動詞に出發性を與へる。そうして「於」「于」を「より」或は「に」と讀めばそれは意譯てある。

使負棟之柱多於南畝之農夫、架梁之椽多於機上之工女、釘頭磷々多於在庚之粟粒、瓦縫參差多於周身之帛縷、直欄橫檻多於九土之城郭、管絃嘔啞多於市人之言語。杜牧阿房宮賦

盜莫大於子。天下何故不謂子爲盜丘而乃謂我爲盜跖。莊子盜跖

罪莫大于可欲、禍莫大于不知足。老子下

これらは上の動詞をして比較態たらしめる。「南畝の農夫よりも多く」といふ風に

讀むが直譯すれば「南畝の農夫に、まして多かりす」である。

日本讀に於て通常「於」を「に」或は「より」の意に讀むが次の樣に「を」の意味に讀む習慣のあるのが有る。

仰以觀於天文、俯以察於地理。易經

子曰父在觀其志、父沒觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。論語學而

人性之無分於善不善也猶水之無分於東西也。孟子告子

これら「を」と讀んでも「於」の用法が違ふのではない。漢文の意義は何處までも「に」である。「觀於天文、察於地理」は「觀之於天文、觀之於地理」で眞理を天文に觀、地理に察するのである。「無改於父之道」は「無所改於父之道」で父の道に對して改むる所がないのである。「無分於善不善」は「無所分於善不善」「於善不善無區別」であつて善不善に對して別がないのである。そういふ譯であるから苟くも「於」「乎」が有る以上決して「を」と讀まない方が善い。

唯こゝに「于」を「を」の意味に解釋したのは無理もないと思はれる樣な用法がある。

其れは

今予其敷心腹腎腸、歷告爾百姓于朕志。商書盤庚

今我既羞告爾于朕志。若否。罔有弗欽。無總于貨寶生々自庸。同

などの樣な用法である。併し「于」には決して「を」の意味はない。意譯だと言へば其れまでであるが漢文の和訓の精神から言つて妥當な直譯の出來る限り無暗に意譯を施すべきものではない。此れと同じ用法が他の處で直譯されてゐる。

楚自克庸以來、其君無日不討國人而訓之于民生之不易禍至之無日戒懼之不可以怠、在軍無日不討軍實而申儆之于勝之不可保紂之百克而卒無後。左傳宣十二

の「于」は通常「于てす」と訓ぜられてゐる。これは商書盤庚の文と同一用法であつて唯「于」の客語が長いだけである。商書の訓の樣に讀めば

之に「民生の……以て怠るべからざる」を訓へ

となるべきであるがそう訓んで居ない。然らば商書の方も

歷告(之)爾百姓于朕意

無總(之)于貨寶

と訓ずれば善いのである。何を告げ何を總めるのかといふと其れは「之を」である。

(之を)爾百姓に告ぐるに朕が意に于てす

(之を)總むるに貨寶に于てする無かれ

であるが「之」を用ゐないだけだ。

「乎」の用法　「乎」は大體に於て本來の形式動詞と見るべきものでは前置詞性の形式動詞と見るべきものではないが、その形式動詞たる點に於て「於」「于」と酷似するものが有る。今こゝへ「於」「于」と比較して再説することにする。

莫春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。　論語先進

子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之。夫子之求之也其諸異乎人之求之與。　同學而

如曰、吾志存乎立功而事專乎報主、雖遇其人未暇禮焉則非愈之所敢知也。　韓愈與于襄陽書

卷舒不隨乎時、文武惟其所用。　同

子曰、禹吾無間然矣菲飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫。　論語泰伯

今天下一君四海一國、舍乎此則夷狄矣去父母之邦矣。　韓愈後念九日復上宰相書

以上は上の動詞の依據性を明確にする。

志乎古者必遺乎今。　韓愈答李翊書

以上は上の動詞を被動態たらしめる

孝子之至莫大乎尊親。　孟子萬章上

道莫大乎仁義。教莫正乎禮樂刑政。　韓愈送文暢序

城之大者莫大乎天下矣。　莊子盜跖

以上は上の動詞を比較態たらしめる。

これらの用法に於て「乎」は「於」「于」と殆ど變りはない。唯强ひて言へばその依據性が「於」「于」は緩やかで「乎」は明確にその一點を把持する樣である。又進行的意義のない場合には「乎」の方が「於」「于」より工合が善い樣である。例へば「志存乎立功」「其意蓋在乎此」などいふ時は「於」「于」よりも「乎」の方が工合が善い。

「於」や「于」は必ず名詞の上に用ゐられるのであるが「乎」は名詞の上に用ゐられる外に動詞(動詞性名詞でなく)の上に用ゐられる場合が有る。

知不可乎驟得託遺響於悲風。蘇東坡赤壁賦

古之人有云仕不爲貧而有時乎爲貧謂祿仕者也宜乎僻尊而居卑若抱關擊柝可也。韓愈爭臣論

この「乎」は矢張前置詞性の形式動詞ではなくて正態の形式動詞であるが、一面は下の動詞「驟得」「辭尊而居卑」を客語とし、一面は上の「不可」「宜」に對して形式語になる。「に」と讀んでゐるが文法上は

驟に得るに　乎　不可なり　て　す

てある。

「乎」の「於」「于」と異なる點を摘記すれば

1「於」「于」は前置詞(於て、于て)になり又前置詞性動詞として「二」「三」の二用法が有るが「乎」は前置詞にならず又前置詞性動詞でもない。併し歸著性が有るから「於」「于」の「三」の如く用ゐられる。

2「於」「于」は名詞の上にのみ用ゐられるが「乎」は動詞の上にも用ゐられる。

「乎」が「於て」の意に前置詞として用ゐられた例は私にはまだ見つからない。多分無からうと思ふ。

「爲」の用法

「爲」は前置詞「て」は「爲に」の意てあるが前置詞性動詞「て」は「爲にす」の意てある。「爲に」といふ前置詞へ「爲」といふ意味を持たせたものてある。

蚋竈諫於王而不用致爲臣而去齊人曰所以爲蚋竈則善矣所以自爲則吾不知也。孟子公孫丑

顏淵死子哭之慟從者曰子慟矣曰有慟乎非夫人之爲慟而誰爲。論語先進

子曰古之學者爲己今之學者爲人。同憲問

人君無智愚賢不肖莫不欲求忠以自爲舉賢以自佐。史記屈原列傳

「爲蚋竈」は「爲蚋竈謀之」の意「自爲」は「自爲己謀之」の意て「謀之」の動作としての形式的意義「爲」を「爲に」の中へ含ませたものてある。寄生形式動詞としての用法だ。「爲」には單純形式動詞としての用法は無い。

「自」の用法

「自」は前置詞では「自り」或は「自つて」の意であるが前置詞性動詞では「自りす」の意である。「自つて」といふ前置詞へ「爲」といふ形式動詞の意味を含ませたものである。これに用法が二つある。矢張「於」「于」の二用法と同様だ。

一、寄生形式動詞としての用法。「よりす」と讀む。

子路宿於石門。晨門曰、奚自。子路曰、自孔氏。論語憲問

君子之道、辟如行遠、必自邇。如登高、必自卑。中庸

醫沸檻泉維其深矣。心之憂矣。寧自今矣。不自我先。不自我後。毛詩大雅蕩召旻

池之竭矣不云自頻。泉之竭矣不云自中。同

鎬京辟廱。自西自東。自南自北。無思不服。同文王有聲

「奚自」は「自何處來」の意「自孔子」は「自孔子來」の意だ。

「自」の外「由」も「下に「以」而」が有る時は前置性動詞である。「より」と訓じても「よりし」の意である。

自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本。大學

自有生民以來未有孔子也。孟子公孫丑

自孔子而來至於今百有餘歲。同

子曰禘自既灌而往者吾不欲觀之矣。論語八佾

由周而來七百有餘歲矣。孟子公孫丑

「自某以前」「自某以來」「自某以東」「自某以西」などを「……以前」「……の以東」など音で讀むと日本語では「以前」以東等が名詞になるが、漢文では「某よりし以て前」「某よりし以て來」「某よりして東」の意である。從つて「自由」が前置詞性動詞になる。

二、單純形式動詞としての用法　動詞の下に用ゐてその動詞を補充語にする。

是歲十月之望步自雪堂將歸于臨皐。蘇東坡後赤壁賦

九月入杞。公及戎盟于唐。冬公至自唐。左傳桓二

蛇々碩言出自口矣。巧言如簧。顏之厚矣。毛詩小雅節南山巧言

懿厥哲婦爲梟爲鴟。婦有長舌。維厲之階。亂匪降自天。匪生自地。匪教匪海。時維婦寺。同大雅瀌瀌印

「歩自雪堂」を「雪堂より歩して」と讀むやうに「自」を「より」と讀むが文法上から言へば「歩する雪堂より す」「歩する雪堂に自つてす」である。

日本語に「花見より歸る」などいふ樣に「より」を動作の名詞へ附ける云ひ方が有るが漢文にもそれがある。

廿有六年春公伐戎。夏公至自伐戎。春秋莊二十六

王歸自克夏至于亳誕告萬方。商書湯誥

面白い云ひ方だと思ふ。

「與」の用法

「與」は前置詞では「與に」の意であるが、前置詞性動詞となつた場合には「與にす」の意だ前置詞「與に」が形式動詞的意義(爲)を帶びたものである。その用法は二つある。

一、寄生形式動詞としての用法　「與にす」と讀む。

子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者是丘也。論語述而

子罕言利與命與仁。同子罕

吾非斯人之徒與而誰與。同微子

二、單純形式動詞としての用法　この用法は主として「孰何」の下に用ゐる。

起曰將三軍使士卒樂死敵國不敢謀子孰與起。文曰不如子。起曰治百官親萬民實府庫子孰與起。文曰不如子。史記孫子吳起列傳

藺相如固止之曰公之視廉將軍孰與秦王曰不若也。同廉頗列傳

願謂僕曰楚亦有平原廣澤游獵之地饒樂若此者乎何與寡人。同司馬相如列傳

この場合の「孰何」は「いづれぞ」と讀む。「何れがまさる」といふ意の動詞である。そうしてその比較の對手は「與」の下の名詞が表はすが「孰何」の依據性を明にするために「與」を附けるのである。

動詞性再動詞

一つの動詞でありながら二つの動詞の意義を有し、その一方の意義が一方の意義を統率してゐるものを動詞性再動詞といふ。その著しいものは形容動詞性の動作動詞である。

形容動詞性の動作動詞を日本語に求めると、例へば「強し」「高し」等は形容動詞である が之を「強かり」「高かり」或は「強うす」「高うす」と云へば形容動詞性の動作動詞になる。始め形容動詞として言ひ出し、中途から動作動詞に變更したものである。形容動詞は時の形式に依らずに事件を考へたもの、動作動詞は時の形式に依つて事件を考へたもので、日本語では其の區別は活用で明瞭に分るのである。

「強し」「高し」は形容動詞で「強かり」「高かり」は形容性動作動詞であるが、漢文では此の區別は不明瞭である。併し「強し」「高し」と「強うす」「高うす」の區別は明瞭である。例へば

1 其兵頗強……強し

2 大富其國強其兵……強うす　他動

3 敵人強我兵畏之……強しとす　他動

(1)は單純なる形容動詞であるが(2)(3)は形容動詞性の動作動詞(他動)である。そうして(2)と(3)は均しく他動であつても(2)の方は實際に強い兵になるので客觀的であるが、(3)の方は強いと視、強いと思ひ、強いとして待遇するだけで眞に強いかどうかは分らないので思想的である。此の客觀的、思想的の區別は形式動詞「爲」の用法(第三〇七、第三一九頁)と同樣である。又名詞性動詞の用法(第三三一—三三六頁)と同樣である。

客觀的なる形容性動作動詞の例

欲修其身者先正其心。欲正其心者先誠其意。　大學

是以聖人之治虛其心、實其腹、弱其志、強其骨、常使民無知無欲。　老子上

苟爲後義而先利、不奪不饜。　孟子梁惠王

此の用法の和譯は「……くす」「……にす」である。そうして「くす」は音便で「……うす」となる場合がある。

思想的なる形容性動作動詞の例

巫醫樂師百工之人、君子鄙之。今其智乃反不能及。　韓愈原道

入者主之出者奴之。入者附之出者汙之。　同

子之道豈足貴邪。世之所高莫若黃帝。尙不能全德而戰涿鹿之野流血百里。　莊子盜跖

王曰叟不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。　孟子梁惠王

此の用法の和譯は「……とす」である。併し中には「重んず」「輕んず」「甘んず」「疎んず」「賤ん

ず」安んず」難んず」など云ふのもある。これは「重みす」輕みす」甘みす」……の音便である。勿論これも「重しとす」輕しとす」……と讀んだ所て差支はない。

變態副詞

一詞の內部に從屬部として異なる性質を含んだ副詞である。そういふ副詞は餘り無いものであるが唯一つ「故」といふ副詞がある。これは名詞的性質を含んで居るものであつて名詞の上に用ゐるべき語を冠し得る。

若此三子者固義之至也忠之節也是故以義死難視死如歸。生而辱不如死而榮。士固有殺身以成名唯義之所在雖死無所恨。史記范雎列傳

「故」が名詞性副詞であるから上へ「是」といふ副體詞が附くのである。

複雜變態詞

此れまて說いて來た變態詞は自己の內部に唯一つの異なる性質を藏するものであつて、單純變態詞とも稱すべきものである。然るに茲にまた複雜な變態詞があるのである。

前置詞性動詞性名詞

前置詞性動詞性名詞は前置詞性動詞が更に名詞化したものである。其の最も屢用ゐられるものは「於」「以」「爲」「與」の四つである。

於　前置詞の「於」は「於て」の意であるが、其れが動詞の意を帶びて「於てす」の意となり、更に名詞の意を帶びて「於てすること」の意となつたものがある。日本讀では「於ける」である。日本語の「於ける」は前置詞性動詞にも前置詞性動詞性名詞にも使ふが、漢文では專ら後者である。

寡人之於國也盡心焉耳矣。孟子梁惠王

先生之於儒可謂勞矣。……先生之於文可謂閎其中而肆其外矣。……先生之於爲人可謂成矣。韓愈進學解

口之於味也目之於色也耳之於聲也鼻之於臭也四肢之於安佚也性也。有命焉。君子不謂性也。孟子盡心下

或曰、平公失君道、師曠失臣禮、夫非其行而誅其身、君之於臣也、非其行則陳其言、善諫不聽則遠其身者臣之於君也。韓非子難一

「寡人之於國也」は「寡人之於國爲政也」の意である。「爲政」といふ動作の形式的意義「爲」を「於」に含ませれば「於てす」の意となり、其れを更に名詞的に取扱へば「於てすること」(國に於て政を爲すこと)の意となる。それを「於ける」と讀む。「於ける」が前置詞性動詞性の名詞であるから――の全體が一つの連詞的名詞となる。日本語では「日本に於ける支那思想」の「於ける」の様な用法があるが漢文にはそれは無い。

以(モツテスル)(以ユエ)

孟子對曰、殺人以挺與刃有以異乎。曰無以異也。以刃與政有以異乎。孟子梁惠王

孟子曰君子深造之以道(モツテスル)欲其自得之也。孟子離婁下

「殺人以挺而殺之」といふべき「殺之」の代りに形式的意義(爲といふ意義)を「以」に含ませれば「以」は「以てす」の意となる。それへ更に名詞的意義を持たせれば「以てすること」の意となる。讀むには「以てする」と讀む。「以」に名詞的意義があるから――の全體が一つの連詞的名詞となるのである。

「以」が「故」の意の名詞たる場合があるがそれはこの「以てすること」の意から轉じたものである。

爲(タメニスル)　前置詞では「爲に」の意であるが前置詞性動詞では「爲にす」の意である。之れへ名詞的意義を持たせると「爲にすること」の意となる。

然則古之所謂正心誠意者將以有爲也。韓愈原道

上無以爲身、下無以爲人。莊子盜跖

與(オケル)　前置詞では「與に」の意で前置詞性動詞では「與にす」の意だが、其れへ更に名詞的意義を持たせると「與にすること」の意から相對する關係といふ意になる。

秦之與魏、譬若人之有腹心疾也。史記商君列傳

帝之與王、其號雖殊其所以爲聖一也。韓愈原道

「秦之與魏」は「秦の魏と相對する關係」の意である。「與」といふ前置詞が相對するといふ動作の形式的意義「爲」を含み、更に關係といふ名詞の形式的意義を含んだものである。通常「秦の魏とは」と讀むが「秦の魏に與ける」と讀むべきものである。そう讀んだ本もある。

名詞性動詞性名詞

名詞性動詞性名詞は名詞性動詞へ更に名詞的意義を持たせたものである。

愛其子擇師而教之於其身也則耻師（トスルヲ）焉……巫醫樂師百工之人不耻相師（トスルヲ）士大夫之族曰師曰弟子云者則群聚而笑之。韓愈師說

王之不王（タラ）不爲也非不能也。孟子梁惠王

「耻師焉」は「耻以之爲師」の意で「師は「師とすること」の意だ。

動詞性再動詞性名詞

動詞性再動詞が再び名詞化されたものである。例へば

古之欲明（ユセムコトヲ）明德於天下者先治其國。大學

の明などの類だ。「明」は「明（アキラ）けし」の意ならば形容詞だが、それが動作動詞的意義を帶びると「明にす」の意となり、更に名詞的意義を帶びると「明にすること」の意となる。

第二章　詞の副性

第一節　名詞の副性

詞の文法上の性能に本性と副性との二種が有る。本性は詞の固有の性能で其の詞が其の詞たるに必要缺くべからざるものである。例へば事物を表はすといふ性能は名詞が名詞たるに缺くべからざるもの、作用を敍述するといふ性能は動詞が動詞たるに缺くべからざるもので、此等は本性である。副性とは本性に副つて生ずる第二次的の性能であつてその有無はその詞が其の詞たるに缺くべからざるものではない。例へば名詞が主語になつてゐる場合には客語になり得べき資格は無く、客語になつてゐる場合には主語になり得る資格は無い。そういふ資格は副性である。

副性に相と格との二種がある。相とはその詞の連詞又は斷句中に於て獨立するか他語に從屬するかの立場に關係しないもの、格とは其の立場に關係するもので

ある。その詳細は總編に於て已に論じてある。（第四四―四七頁）

名詞の相

名詞の相の主要なるものは相對絶對の相、實質形式の相、表現の相の三種である。この外西洋文法には性、數、人稱などいふものがあるが、そういふものは漢文法では文法上の相とする程の價値が無い。

相對態と絶對態

詞のその概念の相對と絶對とに關する相を相對絶對の相といふ。此れに相對態と絶對態の二態が有る。

本名詞の中相對名詞は其の本性のまゝに用ゐれば相對的なる概念を表はす。例へば「父」は相對名詞である。これをそのまゝに用ゐればその詞自己は誰の父であるかを表はすことが出來ない。そこで「文王父」「伍子胥父」などの樣にその相對の基準を表はすべき補充語を附け加へる。こういふ場合の「父」は相對態である。然るに前からの續きなどで唯「父」と云つても誰の父か分る場合が有る。そういふ場合には之を絶對態といふ。

絶對名詞は大抵は絶對態に在る。例へば「山海」などの類である。併し此れらも「死屍之山」「歌吹之海」などいふ時はその「山」「海」は自らその質を表はさないから相對態に在る。

代名詞不定名詞にも相對絶對の二態が有る。形式名詞はその實質的意義に對して相對的であるが、之を相對絶對と見ずに實質形式と見る。

實質態と形式態

詞の、其の概念が實質的であるか形式的であるかに關する相を實質形式の相といふ。これに實質態と形式態との二態が有る。

形式名詞は其の本性上、實質的意義が缺けて居る。これをその本性のまゝに用ゐれば單に事物の概念の形式的意義を表はすだけである。之を形式名詞の形式態といふ。例へば

夫以法毒天下者、未有不反中其身及其子孫。蘇東坡始皇論

の「者」は形式態である。「者」といふ詞自身は實質的意義を缺いてゐる。そこで「者」の上に「以法毒天下」といふ補充語があつて「者」に缺けた實質的意義を補充する。

多數の形式名詞は常に形式態に在る。併し寄生形式名詞はその本性としては實質的意義を缺いて居つても文章中に用ゐられる場合には他語に寄生するから常に實質的意義が暗示される。之を形式名詞の實質態といふ。例へば

愈不助釋氏而排之。其亦有說。韓愈與孟尚書書

釋老之害過於楊墨。韓愈之賢不及孟子。孟子不能救之於未亡之前。而韓愈乃欲全之於已壞之後。同

の「之」は前言——に寄生してゐる爲にその實質的意義が暗示される。前言の——は皆自己の役目が有るもので決して「之」に對する補充語ではないが、「之」の實質的意義は暗示される。それだから「之」は實質態に在る。

然るに「之」は他語に寄生せずに漫然或る何物かを指す場合が有る。

子張問政。子曰、居之無倦。行之以忠。論語顏淵

の「之」などがそうだ。これも實質態であるが、前例の「之」の樣な他語へ寄生するものと區別して之を非寄生的實質態とする。

對等的形式態　右に述べた樣な尋常の形式態は唯形式名詞にのみ存し、本名詞、代名詞、不定名詞の三者(卽ち實質名詞)には無い。然るに實質名詞には一種の特殊なる形式態が有る。

イ　志也者心之主氣之帥萬事之樞機也。朱伯賢論志

ロ　或曰、天道無親常與善人。若伯夷叔齊可謂善人者非邪。史記伯夷列傳

の(イ)の「萬事之樞機」は實質的意義の外に終止的用法といふ形式的意義を持つてゐる。その上の「心之主氣之帥」は實質的意義は有るが形式的意義は自分では之を示さずに之を下の「萬事之樞機」に依賴してゐる。卽ち——は自分で自分の用法を定めずに一切を下の「——」に依托する。「——」が說明的だから——も說明的になるが——が疑問ならば——も疑問になるのである。「萬事之樞機」の有する形式的意義は單に自己の實質的意義に對するのみならずその餘力を以て上の「心之主氣之帥」にも對する。こういふ用法も矢張一種の形式態である。(ロ)の「叔齊」には上の「若」に

對して客語になり得る形式的意義が有るが、その餘力は「伯夷」にも及ぶ。「伯夷」は自己の力で「若」に對して客語になるのではなく「叔齊」の形式的意義に伴食するのである。「叔齊」の用法も形式態である。(イ)(ロ)の═══は皆形式態である。併し尋常の形式態と違つてその形式的意義に對する二つの實質的意義は對等である。即ち上の═══と下の═══とはその實質的意義が對等である。故に═══の用法を對等形式態といふ。

表現の相

表現の相は名詞の重要なる一つの相であつて、その詞に敍述の能力が有るか無いかに關するものである。此の相には表示態、敍述態、指示態、喚呼態の四態が有る。

表示態

表示態は名詞の相の一態であつて單にその概念を表示するだけであつて全然敍述作用の無いものである。

六王畢四海一、蜀山兀阿房出、覆壓三百餘里隔離天日驪山北構而西折直走咸陽。二川溶々流入宮牆。五步一樓十步一閣廊腰縵廻簷牙高啄、各抱地勢鉤心鬬角盤々焉囷々焉。蜂房水渦矗不知其幾千萬落。杜牧阿房宮賦

の═══の樣なのがそうだ。「六王」は唯六王といふものを表示するだけで何事をも敍述して居ない。「四海」以下皆そうだ。

敍述態

□敍述態は名詞の相の一態であつて完全な敍述能力を持つて居るものである。

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客而浮生若夢、爲歡幾何。李白春夜宴桃李園序

志也者、心之主、氣之帥、萬事之樞機也。朱伯賢論志

是志者又主乎心而造就萬事之柄也。同

機者生於智者也、智者隨其性者也。馮用之機論

知利而知害、知去而知就、其唯聖人乎。同

指山之一草而問焉曰山乎。曰山則不可。韓愈原人

嗚呼孟嘗君特雞鳴狗吠之雄耳。王荆公讀孟嘗君傳

夫鷄鳴狗吠之出其門此士之所以不至也。同

異哉、其所憑依乃其所自爲也 韓愈雜說一

家貧不足以自活應舉覓官凡二十年矣。同上兵部李侍郎書

持弓矢十三年、有官勳棄之來歸。同坊者王承福傳

の――の樣なのがそうだ。皆名詞であつて動詞ではないが、動詞の樣に敍述の能力が有る。

名詞の敍述態の日本讀は「なり」を添へて「何々なり」と讀む場合が多い。或は「…か」「…ならむや」「…ならむか」「…のみ」などと讀む場合もあり、意味の續く場合は「…にして」と讀み或は全く助辭を添へない場合もある。

日本語としては「なり」を添へたものは名詞性動詞であつて名詞ではない。「…か」「…のみ」の類や又は全く助辭を添へないのが日本語に於ける名詞の敍述態である。例へば次の「」の類がそうだ。

酒は百樂の「長」。　　苦は樂の「種」。

勤勉は幸福の「母」。　　腕は「神影流」。

孔子は「聖人」か　　劍は一人の「敵」のみ。

漢文では名詞のみで動詞の力を借りずに日本語の「…なり」の意に用ゐられるものは皆名詞の敍述態であつて、名詞性動詞ではない。下に「也」「矣」「耳」「乎」等が有つても無くても、そういふものは感動詞であるから問題ではない。

名詞だけであつても「何々たり」「何々とす」「何々にす」の意であるものは名詞性動詞であつて名詞ではない。(第四二頁參考)

分主態と合主態　敍述態に在る名詞は形容動詞と同じ樣に敍述性が有るのであるから、その敍述せらるべき事柄に主體が無ければならない。併し前からの關係で主體の觀念が暗示される場合には主體を表はすべき主語が要らない。之を合主態といふ。主語を要する場合には之を分主態といふ。

肯定態と否定態　判斷にはそうだと判斷する場合とそうでないと判斷する場合と二種ある。前者を肯定と云ひ後者を否定といふ。名詞の敍述態は敍述態そのまゝならば肯定であるが、肯定の意を特に強くいふ場合には副詞「是」を前へ附け

る。否定を表はす場合には副詞「非」を前へ附ける。後世の俗文では「非」の代に「不是」を用ゐる。

1 秦虎狼之國　　秦是虎狼之國

2 秦非虎狼之國　　秦不是虎狼之國

(1)の――内は肯定で(2)の――は否定である。「非」を「あらず」と讀むのは意譯である「非」は日本語にはないから讀まずに置き、下の名詞へ「ならず」を添へて讀むべきてあつた。

叙述態の理論　□多數の人は云ふてあらう、酒は百藥の長」など云ふのは「長なり」と云ふべき「なり」を省略したものであると。此の考は誤てある。「なり」などは原始時代には無かつたに相違ない。未開人の言語に名詞で終るものが現に澤山有るのである。日本でも「なり」は可なり後の產物でなければならない。吾々は動詞的に明確に云ふ時「なり」や「だ」を用ゐるので、率直に單純に云ふ場合には名詞だけを用ゐるのである。必要のない場合には「なり」や「だ」を用ゐないので決して省略ではない。又「此れは誰の物か」など云ふ場合を考へても「誰の物だか」の「だ」の省略ではない。況や漢文に於ては「なり」に當る助辭はないのである。「也」は感動詞で「耳」や「矣」の類であつて「なり」の樣な動詞性を有するものではない。漢文の名詞に敍述態のあることは事實上否定が出來ない。

西洋の論理學には斷定には結語が要ると論ずるものと要らないと論ずるものがある。要ると論ずるものは彼等の國語に名詞の敍述態が殆ど存しない爲に國語に誤られたのである。「日本は帝國」といふことを西洋では必ず「日本は帝國にある」といふ樣に動詞「ある」を結語として用ゐるので「日本」は主語「帝國」は判定語「ある」は結語だと云ふのである。又形容動詞の場合でも「此花は美しい」と云ふことを必ず「此の花は美しくある」と云つて「ある」を結語にする。そういふ國語に由つて研究された論理學家が結語を必要と見たのは無理のない誤謬であると云はなければならない。然るに漢文や日本語では、「日本は帝國」、「日本者帝國」、「此の花は美しい」、「此花美」と云へるのである。西洋でも動作動詞の場合は「人は死ぬ」と云ふことを「Man dies」といふ樣に結語はない。是に由て觀れば結語の必ずしも必要でないことは事實である。が吾々は更に概念論としての論理學上に立つて更に歩を進めなけ

ればならない。

動詞は作用を敍述する。「人は死ぬ」「花は美しい」と云ふ樣に「死ぬ」「美しい」は一個の概念でありながら唯實質的意義が有るばかりでなく「人」「花」に對して判斷を下す所の判定性(敍述性)を持つて居る。此の判定性は「死」「美」といふ概念の一運用であつて一つの概念ではない。「人は」「花は」には之に屬する示題性(判斷の對象として立つ能力)が有りその示題性が「人」「花」なる概念の一運用であつて一概念でないのと同樣である。論理的斷定とは示題性ある概念と判定性ある概念との二概念の統覺である。そうして右の例の「死ぬ」「美しい」は「人」「花」に就いて其の内包だけを判定するもので外延をば判定しない。即ち「死ぬ」「美しい」といふ概念には外延がなくて内包だけなのである。

所が名詞には「者」といふ名詞を除く外は皆内包と外延と兩方有る。「牡丹は花の王」と云つた時には「花の王」といふ名詞は牡丹に就いてその内包と外延とを判定する。即ち「花の王」といふ概念には内包と外延と兩方あるのである。

外延性の無い詞(動詞)なる「死ぬ」「美しい」は一語で概念の實質と判定性とを表はす。

然らば外延性の有る詞(名詞)なる「花の王」が一語でありながら概念の實質と判定性とを表はすのに何の差支が有らうか。若し差支が有るとすれば外延が邪魔になるのでなければならない。併し外延が判定性に對して邪魔をする筈がない。「花は美し」の「美し」が花の性質であるならば「牡丹は花の王」「孔子は聖人」の「花の王」「聖人」は牡丹孔子の性質であると云へるではないか。その外延は「牡丹」と「花の王」とに共通のものである以上「花の王」の判定性に何の邪魔をも成すものではない。「花は美し」に於ては「美し」は花の内包だけを判定する。そうして花の外延は一向邪魔にならない。「牡丹は花の王」に於て「花の王」の外延が邪魔にならないのもこれと同理である。

茲に至つて吾々はこういふ結論に到達する。名詞の敍述態は名詞の形容動詞的用法である。語を假つて言へば名詞の敍述態は外延性ある形容動詞であると云へる。但し形容動詞は外延の無いものである。若し外延が有れば其れは名詞であつて形容動詞ではない。

西洋の語にも全然名詞の敍述態がないのではない。西洋人に「此れは何ですか」と

物を問へば一々「此れは何々にある」とばかりは答へない。名詞だけを云ふ場合はある。それは矢張敍述態である。唯それに主語がないだけである。

名詞性再名詞といふことを前に第四元頁で述べたが此れは名詞の敍述態といふことが十分分つてからでなくては分りが悪からうと思ふから序に一寸こゝで再説する。

蜂房水渦矗不知其幾千萬落

の「幾千萬落」は第一に「幾千萬落」といふ數を表はす。そこに名詞性がある。第二に「幾千萬落なり」といふ敍述性がある。そこに敍述態名詞としての名詞性がある。それが更に「幾千萬落なること」といふ意味になる。そこで再び表示態名詞になる。即ち此の名詞性再名詞は敍述態名詞性の表示態名詞なのである。

指示態

□指示態は名詞の相の一態であつて事物を一つの存在として有りのまゝに指示するものである。

黄雲城邊烏欲棲歸飛啞々枝上啼。李白烏夜啼

長安一片月萬戸擣衣聲秋風吹不盡總是玉關情何日平胡虜良人罷遠征。同子夜吳歌

長安大道連狹斜青牛白馬七香車。盧照鄰長安古意

天津橋下陽春水天津橋上繁華子。劉廷之公子行

木蘭之枻沙棠舟玉簫金管坐兩頭。同

山河千里國城闕九重門不覩皇居壯安知天子尊。駱賓王帝京篇

春和景明波瀾不驚上下天光一碧萬項沙鷗翔集錦鱗游泳岸芷汀蘭郁々青々范文正公岳陽樓記

桂棹兮蘭槳擊空明兮泝流光渺々兮予懷望美人兮天一方。蘇東坡赤壁賦

高館張燈酒復清夜鐘殘月雁歸聲只言啼鳥堪求侶無那春風欲送行。高適夜別韋司士

の――のやうなのがそうだ。

「黄雲」は天に黄雲の有るのを見て「黄雲」と云つたので黄雲の存在を言ふのである。

明確な斷定には主語が有り敍述語が有り、主體の概念と作用の概念とが分解されて居るが、指示態では主體と作用とが分解されて居ない。「黃雲」といふ一語の中に主體も作用も含まれてゐる。強ひて分ければ、黃雲的物體が黃雲的作用をしてゐるのである。「黃雲が黃雲してゐる」と云つた樣な譯だ。併し其れは主體と作用とに分解すればそうなのだが、指示態は分解されないのであるから、「黃雲」一語で濟む。此の語句を意譯すれば「黃雲が棲いて居つて城邊へ烏が塒を探しに彼方此方から飛び歸つて來てかあ〳〵と樹の枝で啼いてゐる」となる。併しそれでは名詞が動詞に變つてゐる。

敍述態には主語が有るが指示態には主語はない。主語に表はさるべき觀念は內部に含まれてゐるのである。敍述態には明確な判定性が有る。卽ち或る事柄に就いて判斷を下すのである。敍述態の判定は思惟的判定である。反省的認識である。指示態にも判定性は有ることは有るがそれが甚だ不明確である。明確に或る題目を捉へて思惟的に反省的に判定するのではなく、見たまゝ、有りのまゝ、何等の反省、批判を加へずに之を直觀するのである。判定性は有るが直觀的判定である。

喚呼態

喚呼態は名詞の相の一態であつて事物の概念に主觀的意義を加へて之を喚呼するものである。

1 故曰仁者無敵。王請勿疑。孟子梁惠王

子曰、由誨女知之乎。知之爲知之、不知爲不知。是知也。論語爲政

子曰二三子偃之言是也。前言戲之耳。論語陽貨

力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。史記項羽本紀

2 議長、三番。議長、十五番。議長、三番。

3 鳳兮、鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而、今之從政者殆而。論語微子

右の例の(1)は自分が話の對手にしようと思ふ人を呼ぶのて之を第二人稱の喚呼態といふ。其の概念には話の對手としようと思ふ主觀的意義が附隨してゐる。(2)は說話者が說話者たる人を喚呼するのて之を第一人稱の喚呼態とする。その

概念には私を御呼び下さいといふ主觀的意義が附隨してゐる。こんな用法は漢文の古いものに例は少からうが近時の漢文には勿論有る。昔は貴人が「人や在る」と呼べば遠く控へて居る侍臣が自己の名を名のつたものである。その場合の名のりは此の第一人稱喚呼態である。(3)は自分の感情を刺戟した事物を喚呼するもので、其の概念には之に對する主觀的感想が附隨してゐる。

喚呼態にも判定性が全然無いのではないが甚だ不明確である。敍述態は思惟的判定を表はすから判定が明確だが、指示態と喚呼態は直觀的判定を表はすのであるから判定が不明確なのである。指示態も喚呼態も直觀的であるが、其の相違は指示態の方は客觀的直觀で、喚呼態の方は主觀的直觀である。

名詞の格

漢文の名詞には格を示すべき語尾も助辭も無いのであるから、其の格は甚だ不明確である。世には漢文の名詞には格が無いと思ふ人も有るが、其れは不明確なだけで格が無いのではない。

格とは前に言つた通り詞の連詞又は斷句中に於て占むべき立場に對する資格である。若し漢文の名詞に格が無いとすれば、漢文の名詞は連詞又は斷句の中に於て何等の立場を得ることが出來ず、從つて連詞又は斷句の材料となることが出來ない筈である。何處の國語にそんな馬鹿げた名詞が有らうか。名詞のみではない、苟くも詞にして格の無い詞といふものは無い。

名詞が斷句又は連詞の中に於て占むべき立場は種々である。日本語其の他の諸國語に於てはその種々なる立場に對して種々異なる資格を持つてゐる。例へば日本語の名詞は「何々が」は主語たるべき資格「何々の」は連體語たるべき資格「何々を」「何々に」は他動客語、依據客語たるべき資格を持つてゐるといふ樣に種々の格を持つてゐる。然るに漢文の名詞は一般に

明月出……主語
明月下……連體語
對明月懷故鄉……依據の客語
賞明月……他動の客語

といふ樣に同じ「明月」が連詞の中に在つて種々の立場に立ち得るのである。吾々は同じ詞が其のまゝで種々の立場を取り得べき資格を一般格と名づける。此の一般格は日本語の主格(明月が)、連體格(明月の)、依據格(明月に、他動格(明日を)の樣な特殊格でなくて各の特殊格に共通なる格である。之を喩へて言へば日本語の名詞は國語教員の資格、英語教員の資格、歷史教員の資格といふ樣に一々違つた免狀を持つて居るが、漢文の名詞は各科共通の唯一枚の教員免狀を持つて居る樣なものである。

漢文の一般の名詞は、唯一つの一般格を以て連詞中に於て種々の立場に立つのであるから、便利な樣ではあるが、その立場の不明確な場合がある。その弊を救濟する方法が無ければならない。その爲には形式副體詞に「之」が有り、前置性動詞に「於」自「與」が有る。此等を附加することに由つてその缺點は頗る緩和される。

待明月之出於山上……主體的連體語

明月之下……連體語

對於明月……依據の客語

炬火明於明月……比較の客語

涼氣來自明月……出發の客語

雪花孰與秋之明月……與同の客語

「明月之」は日本語の「明月の」の意である。併し日本の「明月の」は名詞であつて連體格はその名詞の一偶性である。「明月の」を連體格名詞と云ふことが出來る。何となれば「の」は助辭であつて一詞ではない。漢文の「明月之」は「明月」と「之」との二詞であつて「之」は副體詞である。嚴密に言へば「明月之」は連詞なる名詞性副體詞であつて名詞ではない。「明月その」といふ樣なものだ。

且つ名詞が「之」に對し「於」「自」「與」に對するには矢張其の立場を占むる資格が要るのである。即ち「明月之」は「之」や「於」などに續いた名詞の自身の格は何處までも一般格である。

連詞であつて「明月」は一般格を以て「之」に對して實質語となり「之」は之に對して形式語になつてゐる。「於明月」は「明月」が一般格を以て「於」に對して客語となり「於」が之に對して歸著語になつてゐる。

以上は一般の名詞に就て言つたのであるが形式名詞の「之」焉」の二つは唯客語にな

るだけであるから此れは一般格ではなくて客語格である。

名詞はその表現の相に表示態、敍述態、指示態、喚呼態の四態が有る。漢文の名詞の格は一般格が有るだけであつても其の運用に種々あり且つ其の運用は表現の相に由つて違ふのであり、又「之」焉」が客語格であることは表示態たる場合のことであるから、格を論ずるには表現の相の四態を分けて別々に論じなければならない。

表示態名詞の格

名詞の格の運用は表示態に於て最も著しい。普通、格といふのは表示態に於ける格を指すので他の三態に於ける格などは世間の人から氣附かれずに居る位である。

一般の名詞の格

漢文の表示態名詞は「之」焉」の二詞を除く外は皆一つの一般格が有るだけで、同じ語形に種々の運用が有るのであるから、其の格の運用を論ずるには格の最も詳密な

他國語と比較して論ずれば、抽象的に論ずるよりは意義が具體的になつて分りが善い。そうして幸にも我が日本語の名詞の格は其の詳密な點に於て世界無比である。

日本語の表示態名詞の格は

主格		舟が	舟が走る　〔舟走〕
客格	他動詞	舟を	舟を泛べる　〔泛舟〕
	依據格	舟に（へ、まで）	舟に乘る　〔乘舟〕
	出發格	舟から	舟から下りる　〔降自舟〕
	與同格	舟と	舟とどうだ　〔筏執與舟〕
	比較格	舟より	舟より速い　〔速於舟〕
連體格		舟の	舟の帆　〔舟之帆〕
一般格		舟	舟走る、舟漕ぐ

の八格である。この中他動格より比較格までの五格は之を客格或は客語格といふ。

漢文の一般の名詞の格は唯一つの一般格が有るだけであるが、其の格の自由なる運用及び形式副體詞の「之」及び形式動詞の「乎」「於」「于」「自」「與」等の利用に由つて日本語の名詞の八格を振廻したと同樣の效果を收めることが出來る。

漢文の名詞の一般格の運用を大別すると次の五種になる。下段の「文字」は例示である。

主格的用法	舟走
客格的用法	泛舟
實質的用法	舟者　舟之
修用的用法	舟有人
連體的用法	舟帆

「舟者」「舟之」の「舟」が實質的用法であるといふ理由はこの「舟」はその下の形式名詞の「者」や形式副體詞の「之」の表はす形式的意義に對して實質的意義を供給するからである。

客格的用法といふ中には次の二つが有る。

- 客格的用法
  - 他動格的用法……泛舟
  - 依據格的用法……
    - 乘舟
    - 出自舟
    - 騎馬速於舟
    - 騎馬執與舟

「自舟」を「舟より」と訓ずるが「舟に自つてす」といふ樣に「舟」は「自」に對して依據的客語になるのである。

「速於舟」を「舟よりも速なり」と訓ずるが、矢張「舟に於てす」といふ樣に舟は「於」に對して依據的客語になる。

日本語の名詞の格には出發格、與同格、比較格等が有るが、これは漢文では其の意義を名詞に求めずに動詞の方に求め、動詞へ依據性の形式動詞「自」(ヨリス)「於」(オイテスト)「與」(セニス)を附けるから、名詞の用法はその場合に依據格的用法になるのである。卽ち漢文の名詞には出發格的用法、與同格的用法、比較格的用法が無い。

以上說いたのは一般の名詞の格である。唯「之」焉」の二つたげは特別である。

「之」焉の格

「之」焉の格は客格である。その用法には他動格的用法と依據格的用法との二つが有る。

子貢曰君子之過也如日月之食焉。過也人皆見之。更也人皆仰之。論語子張

子謂南容。邦有道不廢、邦無道免於刑戮。以其兄之子妻之。同公冶長

子華使於齊。冉子爲其母請粟。子曰、與之釜。同雍也

性之品有上中下三。上焉者善焉而已矣。中焉者可導而上下也。下焉者惡焉而已矣。韓愈原性

夫隨其成心而師之、誰獨且無師乎。奚必知代而心自取者有之。愚者與有焉。未成乎心而有是非。莊子齊物論

得之於手而應於心、口不能言有數存焉於其間。同天道

貳而執之服而舍之德莫厚焉。刑莫威焉。左傳僖十五

「之」焉の格は唯客語だけであつてその用法は他動格的用法(之を)依據格的用法(之に)だけである。「之」焉の用法は唯「之を」「之に」の二義に盡きる。併し「之」焉に對する歸著語の如何に由つては「之に」と讀み難い場合が有る。例へば

〔漢文〕	〔訓〕	〔文法的直譯〕
如之	之の如し	之に如し 或之に如たり
爲之	之が爲に	之に爲に 或之に爲にし
與之	之と與に	之に與に 或之に與して
莫厚焉	焉より厚き莫し	焉に、更に厚き莫し

「之」焉の意義は依據格的で「これに」であるが、「如」「爲」の訓が日本語では名詞性であるために「これが」と連體格になり、「與」の訓が日本語で與同性であるために「これと」と與同格になり、「厚」の訓に日本語で比較態の記號が無いから「焉」が「これより」と比較格に變るのである。漢文の原義は皆右の表の下段の直譯の通りの意である。

□「之」は唯客格だけで他の格はない。主格も連體格もない。されば「爲之先後」「爲之宰」などは「之に先後を爲す」「之に宰たり」といふ風に「之」を客格のまゝに「之に」と讀むべきである。「之が先後を爲す」「之が宰たり」など讀むのは惡訓である。その「之が」と讀

むべきものでない證據は前に第三三頁に擧げて置いた。されば

抑人亦有言、曰、牽牛以蹊人之田、而田主奪之牛。左傳宣十一

晉飢秦輸之粟。秦餓晉閉之糴。同僖十五

の樣なのも「之が牛を奪ふ」之が糴を閉す」と讀むのは誤である。「之に牛を奪ふ」之に糴を閉す」であつて、「之に」又は「之より」の如く解すべきものである。「之が」と連體格に解してはいけない。

複性詞の「諸」は「之於」「之乎」の意であるから、名詞とは云へないまでも上部に名詞部が有る。その名詞部は「之」の意であるから形式名詞の「之」と同樣に客格である。複性詞の「旃」(之焉の意)も同樣である。

或る書に代名詞の「而」は連體格にのみ用ゐると書いてあつたがそんなことはない。第九頁に主語になつてゐる例を擧げておいた。

敍述態名詞の格

敍述態名詞の格は矢張一般格である。そうして其の一般格の運用には說明的用法、疑問的用法、方法的用法、狀態的用法、拘束的用法、放任的用法、連體的用法、實質的用法等が有る。

イ 王倫本一狎邪小人市井無賴。胡澹菴上高宗封事　說明的

ロ 指山而問焉曰山乎。曰山可也。韓愈原道　疑問的

ハ 不可爲常者其聖人之法乎、歐陽修縱囚論　疑問(反轉)的

ニ 子曰人而不仁如禮何。人而不仁如樂何。論語八佾　方法的

ホ 萬民子來。孟子梁惠王　狀態的

ヘ 若父名仁子不得爲人乎。韓愈諱辨　拘束的

ト 子曰富而可求也雖執鞭之士吾亦爲之。論語述而　放任的

チ 紅顏美少年　黃口竪子　連體的

リ 紅顏之美少年　布衣之士　實質的

白頭者　長袖者　同

(イ)の「市井無賴」は記述的に終止する。之を說明的用法とする。

(ロ)の「山」は疑問的に終止する。之を疑問的用法とする。「山」の下に「乎」が有るが「乎」な

しにも「山」は疑問的用法である。「乎」が有れば疑問的であることが明確になる。

(ハ)の「聖人之法」も疑問的であるがこれは疑問の形式に由つて思惟の反省を促すものである。之を反轉的用法といふ。(イ)(ロ)(ハ)の三つは何れも終止的用法である。

(ニ)の「人」は「人にして」の意であつて「不仁」に對して方法を成すものである。之を方法的用法とする。下に「而」が有つて「人」の方法的であることを明確にするが「人」といふ名詞自身が既に方法的用法に在る。「而」はそれを明確にするだけである。

(ホ)の「子」は狀態的用法である。下の「來」に對してその作用の行はれる狀態を表はす。

(ヘ)の「仁」は「仁ならば」の意で下の「子人たるを得ざる」に對して其の事柄の存在すべき機會を捉へ之をその事柄の存在に必要として拘束把持する。

(ト)の「執鞭之士」は「執鞭之士でも」の意で之を放任的用法といふ。「吾亦爲之」に對してその事柄の存在を阻む力が無いとして之を放任する。上の「雖」は「たとへ」の意で「執鞭之士」に對する副詞である。「いへども」と讀むのは文法的訓ではない。

(チ)の「紅顏黃口」は連體的用法で下の名詞を修飾する。之を表示態と思つてはいけない。「紅顏美少年」は「其顏が紅顏なる美少年」の意であつて「紅顏」には敍述性が有る。

(リ)の「紅顏」「布衣」「白頭」「長袖」は下の「之」といふ形式副體詞「者」といふ形式名詞に對して實質的意義を供給する用法である。之を實質的用法といふ。尙(イ)の「一狎邪小人」も實質的用法である。これは自己の形式的意義を自ら定めずに之を下の「市井無賴」の形式的意義に一任する用法である。卽ち自己の實質的意義を他語の形式的意義へ投入するのであるから實質的用法である。

指示態名詞の格

指示態の名詞は其の一般格に、獨立的用法、實質的用法の二つがある。

イ 高館張燈酒復淸。夜鐘殘月、雁歸聲。只言啼鳥堪求侶。無那春風欲送行。高適夜別

ロ 黃雲、城邊、烏欲棲。歸飛噰々枝上啼。李白烏夜啼

の(イ)の「夜鐘」「殘月」は自己の形式的意義を自ら定めずに下の「雁歸聲」に委任する。卽ち自己の實質的意義を他語の形式的意義へ投入する。之を實質的用法とする。

又下の「雁歸聲」は自ら自己の形式的意義を定めそうして意義が終止獨立して他語へ從屬しない。之を獨立的用法といふ。

(ロ)の「黄雲」も獨立的用法である。併しこれは一度獨立した上で更に下の語の表はす事件の背景を成すから再び從屬化する。之を獨立的用法の從屬化といふ。

喚呼態名詞の格

喚呼態名詞の格も唯一つの一般格が有るだけである。そうしてその格の運用は獨立的用法である。例へば學生が敎師を呼び掛けて「先生」といふ樣な類だ。そのまゝ一斷句になる。

併し文章に於ては單に人名を呼び懸けるだけて後を云はない樣な場合は古文に其の例を見ない。必ず引き續いて自分の思ふことを云ふ。例へば

子曰賜也女以予爲多學而識之者與。論語衞靈公

の「賜」はもと喚呼態名詞でその用法は獨立的用法であるが、その一旦終止したものを一つの材料として次の語の――へ從屬させたのである。これも獨立的詞の從屬化である。

希臘文典羅甸文典などに呼格(Vocative case)といふものが有るが、これは喚呼態名詞の獨立的用法をいふのである。表示態の格ではない。

第二節　動詞の副性

動詞の相

動詞の相の重要なるものは分主合主の相、歸著非歸著の相、實質形式の相、直接間接の相、肯定否定の相、比較の相等である。

分主態と合主態

動詞のその表はす作用の主體に對する相を分主合主の相といふ。之に分主態合主態の二態がある。

凡そ作用には必ず其の主體がある。例へば「入る」「出づ」は動作で「熱し」「冷し」は狀態で、何れも作用であるが、何物かから分出した作用であつて必ずその由つて出づる所の主體が有る。「日入る」「月出づ」「火熱し」「氷冷し」などいふ樣に必ず其の主體が有る。

單獨に作用だけ存することは無い。何となれば主體と作用とは元同一物であるのを人間が二つに分けて考へるだけであるからである。

作用には必ず主體が有るが、其れは單に事實である。人間が必ず其の主體を明確に考へるか考へないかは別問題である。明確にその主體を考へればその主體は概念として分化するから動詞は單に作用だけを表はし主體をば表はさないことになる。例へば「日入」「月出」「火熱」「氷冷」などいふ時の「入」「出」「熱」「冷」は作用だけを表はすものである。動詞のこういふ相を分主態といふ。主體の概念を分化させた態といふ意味だ。

作用に主體が有つてもその主體を明確に考へない時には主體は概念として分化されない。例へば「暑則衣」「葛」「寒則著」「裘」などいふ樣に「暑」「寒」が何の作用であるかその主體を考へない場合には主體の觀念は概念とならずに「熱」「冷」の中に含まれて仕舞ふ。主體が無いのではないが主體の概念がないのである。必ずしも「氣候暑則衣」「葛」などといふ樣に「暑」の主體を概念化させて考へるとは限らない。動詞のこういふ相を合主體といふ。合主とは主體をも合せて表はすの意である。

多數の動詞は分主態たる場合が多いが合主態たる場合も少くない。代動詞の「然」などは大抵常に合主態である。又形式動詞「而」は常に合主態であつて分主態たる場合は無い。

分主態ならば主語を要し、合主態ならば主語を要しない。其れてあるから作用を分主的に考へるか合主的に考へるかは主語を用ゐるか用ゐないかの分れる所以て、文章の巧拙の分るゝ所である。一々主語を用ゐたら煩に堪へないが、必ず主語を捨てたら譯が分らなくなる。

歸著態と非歸著態

詞のその表はす作用が或る客體に歸著するか歸著しないかに關する相を歸著非歸著の相といふ。此の相に歸著態、非歸著態の二態が有る。

歸著性動詞(第二五頁)は其の本性としては其の作用が客體に歸著する性質を持つて居る。其れてあるから其の本性のまゝに用ゐればその作用は必ず客體に歸著するので、客體の概念は作用から分化して居る。例へば「人飲酒」「士騎馬」の「飲」「騎」の類で

「酒」馬」といふ客體は作用から分化して一概念を成し、「飲」騎」は作用その物だけを表はし、客體の觀念を含んで居らず、別に「酒」馬」なる客語を求めて之に歸著する。歸著性動詞の此の本性のまゝに用ゐた相を歸著態といふ。

併し「飲」騎」の樣な客體の觀念を自己に含んで居ない動詞でも特に客體を明確に考へない場合には客體の概念が分化しないから「飲」騎」の中に客體の觀念が漠然と含まれる。例へば「我昨日大飲」敵兵或騎或歩」などいふ場合には「酒」馬」といふ概念は分化して居なくても「飲」騎」の中に觀念としては含まれる。歸著性動詞の此の本性を冷淡に取扱つた用法を歸著性動詞の非歸著態といふ。併し其れは臨時の運用であつて本性から言へば何處までも歸著性動詞である。

又非歸著性動詞はその本性から言へばその作用は客體に歸著する性質を持つて居ない。其の本性のまゝに用ゐれば客體へ歸著する筈がない。例へば「稚子哭」鳥飛」の「哭」飛」などがそうだ。此の用法を非歸著性動詞の非歸著態といふ。

併し「哭」飛」は本性としては客體を要しなくても強ひて其れへ歸著性を持たせて他の概念へ歸著させる場合はある。「稚子哭飢餓」「鳥飛天」と云へば「哭」飛」は「飢餓」天」へ歸著する。この用法を非歸著性動詞の歸著態と云ふ。

形式動詞にも歸著性非歸著性の別が有る。その歸著性なるものに歸著態、非歸著態の別がある。例へば「使」武士」捕」之」の「使」は歸著態であるが「使捕之」の「使」は非歸著態である。

實質態と形式態

動詞の意義の實質的と形式的とに關する相を實質形式の相といふ。この相に實質態と形式態との二態が有る。

單純形式動詞は常に其の本性のまゝに用ゐられ自己は實質的意義を表はすことが無い。卽ち常に形式態に在る。

被修飾形式動詞は修飾語に由つて間接に實質的意義を與へられるから、其の相は常に實質態に在る。例へば

子曰非」吾徒」也小子鳴」鼓攻」之可」也。論語先進

朝聞」道、夕死可」也。同里仁

の「可」は修飾語――に由つて間接に實質的意義を補充されるが、――は修飾語てあつて直接には補充語ではない。それ故「可」は形式上形式態ではなくて實質態てある。然るにこゝに又その修飾語さへ無い場合が有る。

吳起不悅曾田文曰請與子論功可乎田文曰可。史記孫子吳起列傳

の「可」は「論じて可なり」の意であるが「可」だけで孤立してゐる。唯前からの續きてそういふ意味が暗示されるだけである。こういふのは單行的實質態である。

寄生形式動詞は前言に寄生して間接に實質的意義を得るものであるから、此れも常に實質態である。例へば

子溫而厲威而不猛恭而安。論語述而

の「而」は前言――に寄生するが、――は「而」に對する補充語ではなく下の語に對する修用語である。「而」は何等直接の補充語を要しないから實質態である。

對等的形式態　右に述べた樣な形式態は尋常の形式態である。そうしてそういふ形式態は唯形式動詞に存するだけで實質動詞(即ち本動詞、代動詞、不定動詞の三者)には無い。何となれば實質動詞は實質的意義を有するものであるからである。然るにこゝに又一種特殊の形式態が有る。名づけて對等的形式態といふ。實質動詞は實質的意義と形式的意義との兩意義を兼ね有するものであつて、其の兩意義に過不及が無いのが常態である。然るにその形式的意義に餘力が有つて他語に對してまて關係を及ぼす場合が有る。例へば

月白風清

の「風清」は、風の清きをいふ實質的意義と、其の獨立性を有して終止するといふ形式的意義との二面を持つて居る。然るにその終止といふ形式的意義は單に自己「風清」の形式的意義たるに止まらずして、上の「月白」に對する形式的意義をも兼ねてゐる。上の「月白」は實質的用法(第三頁)であつて自ら終止的意義を成さずに、其の終止するかどうかに關する形式的意義を下の「風清」に一任してゐる。今假に日本語を以て「風清」を「風清し」とし假に「風清」を實質的意義とし語尾の「し」を形式的意義とする時は「し」は「風清」に對する「し」てあるばかりてなく上の「月白」にも對するとしての「し」てある。之を圖解すれば

月白
風清―し

の如くなる。「風清」の中に含まれてゐる形式的意義は自己の實質的意義を處理するのみならず「月白」の實質的意義をも處理する。併し其れは上に「月白」の有る場合のことであつて、單獨な場合例へば「今宵風清」などいふ場合には、他語の實質的意義に對して形式的意義を供給しない。動詞の用法にはこの二相がある。「今宵風清」の「清」の樣に自己の實質的意義と自己の形式的意義との關係に過不及の無い場合を實質態と稱し、「月白風清」の「清」の樣に形式的意義が他語にまで關係する場合を形式態と稱する。此の形式態は單純な形式態ではなく、自己の實質的意義を處理した餘力に對して名づけたのであるから、特殊の意義に於ける形式態である。之を名づけて對等的形式態といふ。對等と名づける理由は自己の有する實質的意義と對等なる實質的意義を有する他語に對して形式的意義を與へるからである。

原動態と使被動態

動詞の、その表はす動作が單に或るものゝ直接の動作であるか更に他に間接の主體が有るかに關する相を直接間接の相といふ。この相に原動態、使動態、被動態の三態が有る。

1 狂人殺人　　殺す
2 惡人嗾狂人殺人　　殺さしむ
3 人殺於狂人　　殺さる

(1)の「殺」は唯狂人の動作であるだけで他に何等の主體を持つて居ない。この「殺」の動作を狂人に對して原動といふ。(2)の「殺」は狂人の動作であるが、一面又惡人の動作である。直接の加害者は狂人であつても其の實惡人の行爲である。此の「殺」の動作を狂人の動作として原動と云ひ、惡人の動作として使動といふ。原動は直接動で使動は間接動である。又(3)の「殺」は、直接には狂人の動作であるが、間接には人の動作である。この「殺」を狂人の動作として原動と云ひ、人の動作として被動と云ふ。被動は間接動である。

使動も被動も間接動であるが、使動は間接の主體(惡人)が原動(殺)を原動の主體(狂人)

に與へるのである。被動は間接の主體(人)が原動(殺)を原動の主體(狂人)から受けるのである。

右の例の「殺」は一つの動詞で原動、使動、被動とを表はして居るが、その原動であることはその實質的意義で使動、被動であることは形式的意義である。今若しその意義を原動と使動被動とに分解し形式的意義たる使動、被動をば形式動詞をして表はさしめる時は

2 惡人使●狂人殺‖人

3 人被●狂人殺‖

となる。‖は原動(實質)で●は使動、被動(形式)だ。狂人の動作は「殺」だけだが、惡人の動作は形式的には「使」で實質的には「使殺」である、人の動作は形式的には「被」で實質的には「被殺」である。其れを前の例では「殺」の一字で表はして居る。

使動、被動を示す方法は、前の例の樣に原動の詞がそのまゝ使動、被動の意味を帶びる場合と、後の例の樣に形式動詞を附加する場合と有るが猶詳しく言ふと次の如くである。

使動態

使動態には次の四種が有る。

一原動の主體が客語に依つて表はされてゐる場合、原動の主體が主語で表はされゝばその動詞は原動態であるが、客語に依つて表はされると使動態になる。

下レ馬飲‖君酒。問レ君何所之。王維送別

坐ニ之堂下一賜ニ僕妾之食。史記張儀列傳

逞レ姦而攜服毒諸侯一而擺ニ晉吳一。左傳成十八

‖の原動の主體が——なる客語に依つて表はされてゐるから‖は使動態となつて——をその使動の客體とする。

二動詞の前に其の使動の主體を表はす名詞が有つて其れが前置詞「爲」の客語になつてゐる時はその動詞は使動態になる。

唯睢亦得レ謁睢請爲レ君見‖於張君。史記范睢列傳

三前に使動の方法を表はす本動詞が有る場合、前の本動詞が原動の方法を表は

すのでないために次の動詞が原動態たることを得ないのである。

増勸羽殺沛公。」蘇東坡范增論

管仲相桓公霸諸侯一匡天下。」論語憲問

上方踞牀洗召布入見。」史記黥布列傳

四 前に形式動詞「使」「俾」「遣」「令」「教」が有る場合

亦使後人而復哀後人。」杜牧阿房宮賦

臣請東見越令出兵以從。」史記仲尼弟子列傳子貢

「使」が「哀」の使動(哀ましむ)の方法を表はすから「哀」が使動態になるのである。この「四」はもと「三」と同じ用法である。たゞ「使」「俾」「遣」「令」「教」等は形式化して專ら使動を表はす樣になつただけである。そうして此等の形式動詞は使動的動作の方法を表はすものであつて使動そのものを表はすのではない。使動的意義は下の動詞――の中に在るのである。中間に「而」が有り得ることに注意しなければならない。

「使」「俾」「令」「教」「遣」等の用例は第三八―三三頁に出てゐる。

使動之使動 使動も一つの動作であるから之を一つの材料として見れば一つ

の原動である。使動が使動たるはその客體に對してである。主體に對しては一つの原動である。それ故使動を原動として更に他の客體に對して使動たらしめることが出來る。そこで「何々せしめしむ」といふ意の語が出來る。

不如深城令齊王使其信臣招所亡城。」史記淮陰侯列傳

「招かしめしむる」である。第一九頁の例などもそうだ。即ち

鄉使二世有庸主之行……使各反其鄉里……與天下天下集矣。

鄉に二世をして庸主の行有り……各をして其鄉里に反り……天下に與せしめしめば天下集らむ。

「與せ」は第一原動で「各」の動作である。その第一使動「與せしめ」(使各……與)は二世の動作で第二原動である。客語は「各」である。これが「與せしめしめ」(使二世……使各……與)となつて第二使動となる。その客語は「二世」である。

被動態

被動態に自己被動所有物被動の二種がある。

1 人被盗賊殺　　子被父打

2 人被盗賊偸銭　　子被父打頭

自己被動とは右の例の(1)の様に他物の動作を自己へ被るものを云ひ、所有物被動とは(2)の様に他物の動作を直接自己へ被らずに自己の所有物へ被るものをいふ。「銭」は「人」の所有物で「頭」は「子」の所有物である。

被動態たり得る動詞は主として他動性動詞である。例へば右の例の「偸」「打」は他動性である。併し必ず他動性に限るのではない。依據性動詞も亦被動態になる場合が有る。

侵晩乘涼偶獨來、不因魚躍見萍開。捲荷忽被微風觸、瀉下清香露一杯。韓偓野塘

の「觸」は「微風觸捲荷」といふ様に依據性で自動である。世には西洋文典に欺かれて自動性動詞には被動はない様に思ふ人が有るが、被動はそんなものではない。然るに他動性又は依據性の動詞はみんな被動態になるかといふとそうはいかない。條件としてその被動の主體が利害を受ける意味が無ければならない。主體が他物から他動的又は依據的の動作を受けて之に因つて利害を感ずる場合でなければならない。漢文や日本語の被動は人格的被動である。人格とは利害を感ずる能力としての人格をいふのである。

英語などの被動は一般的被動であつて他動性動詞にのみ存し、單に、主體の客體に對する他動的動作を客體から觀て客體を主體として考へて之を被動といふのである。其れだから主客を換位すれば皆被動になる。「人が月を觀る」を換位して「月が人に觀られる」といふ様に言へばそれで被動になる。漢文では「月被人觀」は「月」を擬人して利害を感ずる主體として取扱はない限りはそう言へないのである。

文法上「被動態」といふのは動詞の相の一つである。「被殺」は「殺」といふ動詞の被動態である。然るに被動態とその效果を等しうして而も動詞の被動態でないものがある。「人爲盗賊之所殺」などは被動態と同價値であつても「所殺」が名詞であるから、之を動詞の被動態とは言へない。こういふのを準被動態といふ。

被動態及び準被動態を表はす方法は非常に澤山有る。今「富人(盗賊に)殺さる」の意として被動態及び準被動態の種々の表はし方を次へ擧げる。

被動態

一　富人殺

二　富人爲盜賊殺其身

三　富人殺於盜賊

四　富人被盜賊殺……富人被殺於盜賊

富人爲盜賊殺……富人爲殺於盜賊

五　富人見殺於盜賊

富人遇殺於盜賊

富人遭殺於盜賊

準被動態

イ　富人爲盜賊之所殺

富人爲盜賊所殺

ロ　富人爲之所殺

ハ　富人盜賊之所殺

ニ　富人所殺於盜賊

右の「二」の「爲」は前置詞である。「四」の「爲」は動詞「殺」を客語とする形式動詞である。(イ)(ロ)の「爲」は名詞なる「所殺」を客語とする形式動詞である。これらみな違ふ。尙第三六—三八頁の再讀を請ふ。

被動態及び準被動態を表はす方法は右の如く種々有る。今之を右の例の頭の番號の如く區別して次へ說明する。

被動態を示す方法

一、主語或は准主語が原動の主體を表はさずに被動の主體を表はす爲に動詞が被動態となる例

軍敗身辱棲于會稽國爲虛莽。史記仲尼弟子列傳子貢

秦宗室大臣皆言秦王曰諸侯人來事秦者大抵爲其主游閒於秦。請一切逐客。李斯議亦在逐中。史記李斯列傳

昔者龍逢斬、比干剖、萇弘胣、子胥靡故四子之賢而身不免乎戮。莊子胠篋

右の例の——は主語(或は准主語)で＝の動詞の原動の主體を表はさずに＝の被動の主體を表はすから＝は餘儀なく被動化される。そうして主語は必ずしも無く

てもその觀念が暗示されればその動詞は被動化される。例へば

上怒曰烹之。通曰嗟乎冤哉烹也。上曰若敎韓信反、何冤。史記淮陰侯列傳

二、動詞の上に、その原動の主體たるべきものを表はす名詞が有つて、その名詞が上に在る前置詞「爲」の客語を成す時はその動詞が被動態になる。

愈縻於茲、不能自引去。資二生以待老。今皆爲有力者奪之。其何能無介然於懷耶。韓愈送溫處士序

三、動詞の下に形式動詞「於」「于」「乎」が有り、これに客語が有つてその客語が原動の主體を表はす時は動詞は被動態になる。

善戰者致人而不致於人。孫子

子亦知子之賤於王乎。史記張儀列傳

勞心者治人勞力者治於人。孟子滕文公

「於」「于」「乎」の例は第四巻頁四六一頁にもある。

この用法は「於」「于」「乎」なしに客語が直接に動詞に對することも有る。

天下有道、小德役大德、小賢役大賢。天下無道、小役大、弱役强。孟子離婁上

非志前定、其孰能成蓋天之功以信天下後世乎。朱伯賢論志

四、動詞が原動を表はし其の上に形式動詞「被」「爲」が有つて被動を表はすもの、

イ 陌頭楊柳枝、已被春風吹。妾心正斷絶、君懷那得知。唐詩選六郭振

ロ 以萬乘之國被圍於趙。史記魯仲連列傳

ハ 彼伍胥父兄爲戮於楚。同伍子胥列傳

原動に主語を附することは出來ない。原動の主體は卽ち被動の客體であるから被動の客語に因つて表はされる。そうして被動の客語の位置は(イ)の。。の樣に「被」「爲」の直ぐ下に置かれる。若し被動の客語を原動の動詞よりも下に置く場合は必ず(ロ)(ハ)の樣に「於」を用ゐる。但し(ロ)の樣な例は古文に稀だ。

五、動詞が原動を表はし、その上に在る形式動詞「見」が被動を表はす。「見」は見える意味で逢ふ意味があるから「遇」「遭」が代用される。

且夫臣人與見臣於人。制人與見制於人。豈可同日道哉。史記李斯列傳

「見」は原動の主に對する依據性が無いから直接にその下へ被動の客語を置くこ

とは出來ない。必ず「於」といふ形式動詞を原動の動詞の下へ置いた上でその下へ置く。即ち右の例の樣に「見」制於人」といふので「見」人制」とは云へない。「被」爲」ならば「被人制」被制於人」爲人制」爲制於人」みな言へるのであるから「見」と「被」爲」とはその點が違ふ。（第三三—三六頁參考）

准被動　文法上の被動態でなくて被動態に代用される言ひ方が有る。形式動詞の「爲」と複性詞の「所」を用ゐる。「爲」の客語は名詞だ。

イ　爲天子之計莫若少寬其法使大臣得有所守而不爲法之所奪。　蘇轍臣事策一

申徒狄諫而不聽負石自投於河爲魚鱉所食。　莊子盜跖

ロ　今足下雖自以與漢王爲厚交爲之盡力用兵爲之所禽矣。　史記淮陰侯列傳

ハ　其山行水涉沙莽之馳往々則風霜冰雪瘴霧之毒之所侵加蛟龍虺蜴虎豹之羣之所抵觸衝波急洑隤蜌落石之所覆壓。　曾鞏送江任序

ニ　燕將見魯連書泣三日猶預不能自決欲歸燕已有隙恐誅欲降齊所殺虜於齊甚衆恐己降而後見辱。　史記魯仲連列傳

＊　其窮涸不能自致乎水爲獺獺之笑者十八九矣。　韓愈應科目時與人書

「爲」の用ゐ方が（イ）（ロ）（ハ）皆違ふ。（イ）では「爲」の客語——の內部の原動「食」に魚鱉といふ主語が有る。「魚鱉の食ふ所」は連詞的名詞となつて「爲」に對して客語になる。（ロ）では原動「禽にす」に主語がなく「之」は「爲」の客語である。「之に所禽となる」である。（ホ）では原動「笑」が始から名詞である。（第三七—三八頁參考）

前々頁の「四」の「爲」はその原動が動詞であるから文法上被動態を成すものであるが、此の條の「爲」はその原動が名詞に由つて表はされてゐるから、之を動詞の被動態といふことは出來ない。

日本語との比較　日本語では被動態を示すには「殺さる」助けらる」などの樣に動詞へ「る」らる」といふ助辭を附ける。そうして被動態の用法が甚だ廣い。自動でも他動でも非歸著性動詞でも被動態になる。

日本語の被動態は次の四種ある。

1 人盜賊に殺さる……（人被盜賊殺）……自己被動

2 人盜賊に物を偷まる……（人被盜賊偷物）……所有物被動

3 父子に死なる……所有物動作被動

4 雨に降られて家に籠る……他物動作被動

漢文には此の(1)自己被動と(2)所有物被動とは有るが、(3)(4)は絶對に無い。自己被動とは動作を直接に自己(被動の主體)へ受けるのを云ふ、所有物被動とは動作を自己の所有物へ受け自分はその利害を受けるのを云ふ。所有物動作被動とは所有物その物(子)の動作を自己の利害として受ける。「妻夫に怠けらる」「主婦下女に逃げらる」の類だ。他物動作被動とは他物の動作を自己の利害として受ける。「他人に成功される」「天氣に續かれる」の類だ。日本語の被動は利害的被動であつて利害を受ける意である。自己の所有物例へば自己の父とか子とか帽子とか家とか云ふ樣なものゝ動作でも、其れが自己の利害になるならば被動態を用ゐる。他人の動作でも、其れが結局自己の利害であるならば被動態を用ゐる。子の死ぬことは父の困ることであり、雨の降ることは外へ出たい人の困ることであり、他人の成功は自己の不名譽である。そういふものは日本語では皆被動になる。併し漢文ではそんな被動は用ゐない。其の理由は被動を示す方式が日本語の樣に完備して居ないから、其處まで被動を用ゐては譯が分らなくなるからである。右の(3)(4)の樣な被動の漢譯には甚だ困らせられる。意を取つて「父悲於其子之死」「人困雨於家」「我辱於人之成功」などとしなければならない。

比較の相

詞の、其の表はす概念が比較的であるか比較的でないかに關する相を比較の相といふ。これに比較態と區分態との二つが有る。

凡そ動詞は其の意義が程度的であるものは皆比較の相が有る。形容動詞の表はす概念は凡べて程度的であるが動作動詞でも程度的意義の有るものがある。程度的意義を有する概念はその考へ方に二通りある。一は或る基準を設け之に比較してその程度を考へるのである。一は他物と比較せずに單にその狀態を甲と乙との二つに區別してその何れであるかを考へるのである。例へば今「高い」といふ狀態に就いて之を云へば

1 富士山高於泰山　　泰山よりも高し

2 山高　　高し

(1)の「高」は泰山を基準として富士山の高さを考へたので此の考へ方は比較態である。此の考へ方では比較の基準(泰山)が無ければ「高」は意義を成さない。(2)の「高」は或る狀態を「高低」の二つに區別して山の狀態がその二者中の「高」の方に屬することを考へたので他物に比較して考へたのではない。此の考へ方は區分態である。

此の考へ方では「高」は何等比較の基準なしに意義が具備する。(1)と(2)とは一方は比較の基準を要し一方は要しないのであるからその概念の運用が違ふ。

區分態は動詞本來の形を用ゐるが、比較態は下へ形式動詞「於」「于」「乎」を附ける。例へば「高」は「高於」「高于」「高乎」となる。「高」は實質語で「於」は形式語である。「於」「于」「乎」を「す」の意義とすれば「高於」は「高かりす」であるが「於」は「す」だけの意義ではなく「於てす」の意であるから「泰山」を客語として「泰山に於てす」の意となる。「於」「于」「乎」の古例は第四五頁四六頁に出してある。

比較の基準が形式名詞「焉」に由つて表はされる場合には動詞は「於」「于」「乎」なしにそのまゝ比較態になる。

上有好者下必有甚焉者矣。孟子滕文公

の「甚」などがそうだ。

肯定態と否定態

詞の、その判定性の肯定否定に關する相を肯定否定の相といふ。これに肯定態否定態の二態が有る。

肯定と否定とは判斷の範疇である。吾々が或る問題に對して判斷を下すといふことは問題たる觀念と判斷の材料たる概念とを比較してその一致を知るのが肯定で不一致を知るのが否定である。判斷はこの二範疇の外に出ることを許されない。

動詞の本來の形は皆肯定態である。「花開」は現在の直觀(花が開いたのを見た直觀)を對象として概念たる「花開」を以て之に比較して其の一致を判定した語である。「花則美」は「花」なる概念を題目として「美」なる概念を以てその一致を判定したのである。

「無」「否」といふ動詞は否定ではなくて矢張肯定である。「無」「否」といふ動詞の材料的意義は否定の結果であつても其れは判斷の材料であるから判斷の形式ではない。その判斷の形式は何處までも肯定である。即ち否定であることを肯定するのである。判斷の材料の否定は之を否定と區別して遮詮といふ。(第一九八頁參考)

否定を表はすには形式副詞「不」「未」の力を借りる。肯定態なる動詞は上に副詞「不」「未」

が有れば變じて否定態となるのである。「花不開」「花不美」「未無其効」の「開」「美」「無」は否定態である。

否定態は材料たる概念と之に附隨する否定的運用との二つから成立するものであるが、その二つを一括して一つの材料と見る時は否定と云はずに遮詮といふ。其れは一つの材料であるから唯遮詮であるだけで否定でも肯定でもないから、其れを更に否定の形式に取扱ふことが出來る。そこで「未始不相須」「不敢不奉命」などの樣なことが言へる。こういふのを直譯して「相須たざらず」「奉ぜざらず」といふと意義が不明瞭になるから「須たずんばあらず」「奉ぜずんばあらず」といふ樣に「ずんばあらず」といふ。「ずばあらず」の音便だ。

否定態は單詞の動詞にも連詞の動詞にもある。併し主語を含んだ連詞的動詞は否定態にならない。例へば「月不出」は否定態の「不出」へ主語「月」が附いたのである。「月出」を否定にして「不月出」と云ふことはない。然るに次の樣な例の有るのはどういふ譯であるか。

恐々然惟懼其人之有聞也是不亦責於人者已詳乎。 韓愈原毀

の「責於人者」は主語で「已詳」は敍述語であるのに、其の上に「不」が有るのはなぜか。これは――の全體が一旦一つの連詞的名詞（動詞性名詞）となりそれが敍述態に用ゐられたものであるから恰も「不亦君子乎」の「君子」が敍述態名詞であるのと同じである。

是れ、亦、人に責むもの已だ詳なるならずや

と讀むべきである。一度名詞となれば名詞の內部に主語の有ることは差支ない。名詞の敍述態が否定される例は澤山ある。

イ 子貢曰紂之不善不如是之甚。 論語子張

春秋用法、不如此之輕易也。 歐陽修春秋論

聖人垂教、不如是之迂也、不如是之刻也。 同

ロ 人不知而不慍、不亦君子乎。 論語學而

「此の如きの甚しからず」といふ樣に讀むが、「是の如きの甚しきならず」と讀む方が善い。――が名詞であつて敍述態に用ゐられてゐることは（ロ）の「君子」に於けると同樣である。

動詞の格

一般動詞の格

格は詞の連詞又は斷句の中に於て占むべき立場に對する資格である以上、動詞にも副詞にも副體詞にも格が有るべきことは、既に前に論じた通りである。

漢文の動詞中、形式動詞の「而」(シカウシテ)と「微」(ナカリセバ)の二つと及び修飾形式動詞(便、俾、令、教、遣、得)は格に關して特別であるから之を格の特殊動詞とし、其の餘の動詞をば之に對して格の一般動詞とする。

「而」「微」等特殊のものを除いた一般の動詞の格は唯一つである。名詞に於ける樣に矢張一つの一般格である。そうして一般格たることを示す記號は全く無い。格は唯一つであるが、其の連詞又は斷句中に於ける動詞の立場は種々雜多である。其れに對して唯一つの一般格がその重任を負ふのである。

併し唯一つの一般格だけではその詞の立場が明確でない場合が勿論有る。此の缺點を補ふために感動詞の「乎」「與」の類、形式動詞の「而」形式副詞の「以」「則」「雖」の類が有る。

漢文の動詞の一般格の運用は之を大別すると次の如くになる。

1 獨立的用法　斷句の代表部となる用法
2 連體的用法　名詞の上へ從屬する用法
3 修用的用法　動詞を修飾する用法
4 客體的用法　作用の客體を表はす用法
5 實質的用法　形式語に對して實質的意義を與へる用法

この中(1)が獨立的なるに對して、(2)(3)(4)(5)は皆從屬的用法である。意味が切れずに他語へ從屬する。

獨立的用法　獨立的用法は動詞の用法の最重要なるものであつて、他語へ從屬せずに獨立して自ら斷句の代表郡となるものである。例へば「月出」「人賞月」の「出」「賞」の用法はそうだ。「出」は月を統率してその斷句を代表し、「賞」は「月」を統率して人の作用を敍述し、その斷句の代表部を成してゐる。この獨立的用法は「出」「賞」といふ單詞なる動詞の用法であると同時に「月出」といふ連詞的動詞、「人賞月」といふ連詞的動詞

の用法である。何となれば「出」賞」は「月出」人賞月」の代表部であるからその用法は全體の用法である。

「出」賞」の用法が獨立的であることは「出」賞」の獨力では表はし得ないものであつて「月」や「人」との關係上に於て始めて表はされるのであるからこの獨立的用法を「出」賞」の用法として見る時はその問題は相關論上の問題になるのであるが、之を「月出」又は「人賞月」といふ連詞全體の用法として見る時は此等の連詞が獨力で之を表はしてゐるのであるから單獨論上の問題となるのである。

獨立的用法には說明態、疑問態、命令態の三種が有る。

燕趙古稱多感慨悲歌之士。韓愈送董邵南序

董生舉進士連不得志於有司懷抱利器鬱々適茲土。同

夫子至於是邦也必聞其政。論語學而

の太字の動詞は說明態である。そうして之に因つて同時に――なる連詞的動詞も說明態である。

イ 子曰二三子以我爲隱乎。論語述而

定公問、一言而可以興邦有諸。同子路

子貢問曰師與商也孰賢。同先進

ロ 子曰天生德於予桓魋其如予何。論語述而

噫斗筲之人何足算也。同子路

季路問事鬼神。子曰未能事人焉能事鬼。曰敢問死。曰未知生焉知死。同先進

の太字は疑問態である。隨つて――なる連詞的動詞は疑問態である。疑問には右の(イ)の樣な尋常の疑問と(ロ)の樣な反轉と二種ある。反轉態は疑問を以て思惟の反省を求める形式に否定を表はすものである。

疑問態には尋常の疑問と反轉態とに拘らず次の二種が有る。一は概念の實質の疑問であつてその詞の內に「何」誰」孰」といふ樣な不定詞を含むものである。二は判斷そのものゝ疑問で大抵は下へ「乎」與」等疑問を表はす形式感動詞を附ける。しかし「乎」與」などの附かない場合もある。

季子然問、仲由冉求可謂大臣與。子曰、吾以子爲異之問曾由與求之問。論語先進

先生起拜祝辭曰、敢不蚤夜以求從祝規。韓愈送石處士序

是故主獨制於天下而無所制也能窮樂之極矣賢明之主也可不察焉。史記李斯列傳

嗚呼曷歸、予懷之悲。萬姓仇予、予將時依。鬱陶乎予心、顏厚有忸怩。弗愼厥德、雖悔可追。夏書五子之歌

檜乃厲聲曰、侍郎知故事、我獨不知。胡澹菴上高宗封事

の――などはそうだ。併し此れらも無暗に反轉態になるのではない。倒置法になつてゐるか、「可」の樣な形式動詞が有るか「敢」「獨」「乃」「其」「必」などの樣な副詞が有るか、その他そんな樣な强調の場合でなければ反轉されない。

動詞が疑問態になるのは「乎」「與」などが附いて始めて疑問態になるのではない。「乎」「與」などの附く前に既に疑問態なのである。疑問態であるから「乎」「與」などが附くのである。「乎」「與」などは唯疑問態であることを明確にするに過ぎない。

曾子有疾。召門弟子曰、啓予足、啓予足。論語泰伯

韓信謝曰、先生且休矣、吾將念之。後數日蒯通復說。淮陰侯列傳

略不辭讓、遂盡言。惟吾子諒察。韓愈答陳商書

丞相其選宗室四品一人持節往賜君長告之朕意、又選學有經法通知時事者一人與之爲貳。同送殷員外序

兵之著於晉陽三年、今、旦暮將拔之而、鄉其利。何乃將有他心。必不然、子釋勿憂勿出於口。韓非子十過貪愎

の太字は命令態である。隨つて――なる連詞的動詞全體も命令態である。

西洋文典及び多數の日本文典では文章(斷句)を分けて說明文、疑問文、命令文、感嘆文などとするが、說明、疑問、命令等は斷句中に用ゐられた動詞(又は敍述態名詞)の用法の區別である。何も斷句の分類とするには當らないと思ふ。

連體的用法　平易に言へば名詞の上に在つて之に從屬する用法である。嚴密に言へば他語の意義の實體に從屬する用法である。

今子使萬里外國。獨無幾微出於言面。豈不眞知輕重大丈夫哉。韓愈送殷員外序

又不以其淺弊無過人智識、且諭以所守。同答陳商書

の太字は連體的用法に在つて下の――の名詞を修飾する。從つて――なる連詞的動詞も連體的用法である。多くの場合には――の下へ「之」を入れるが「之」が有る場合は上の動詞は動詞性名詞となり、「之」へ關係する語となり、直接には――へ關係しなくなる。

修用的用法　平易に云へば下の動詞を修飾する用法であるが、喧しく言へば下の語の運用へ從屬する用法である。

1　牀前看月光、疑是地上霜。擧頭望山月、低頭思故鄕。　李白靜夜思……〔方法〕

林昏楚色來、岸遠荆門閉。　常建西山……〔方法〕

玉輦縱橫過主第、金鞍絡繹向侯家。　盧照鄰長安古意……〔方法〕

唉息此人去、蕭條徐泗空。　李白懷張子房……〔方法〕

2　言未既有笑、於列者曰、先生欺予哉。　韓愈進學解……〔方法〕

長橋臥波未雲何龍、複道行空不霽何虹。　杜牧阿房宮賦……〔方法〕

3　南登碣石館、遙望蓟丘。黃金臺。　陳子昂蓟丘覽古……〔狀態〕

廊腰縵廻簷牙高啄。　杜牧阿房宮賦……〔狀態〕

功名富貴長在、漢水亦應西北流。　李白江上吟……〔狀態〕

4　君子篤於親則民興仁。故舊不遺則民不偸。　論語泰伯……〔拘束〕

子曰、父在觀其志、父沒觀其行。　同學而……〔拘束〕

5　携幼入室有酒盈罇。　陶淵明歸去來辭……〔拘束〕

脫帽露頂王公前、揮毫落紙如雲煙。　杜甫飲中八仙歌……〔拘束〕

6　如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已矣。　論語泰伯……〔放任〕

當此之時雖無袁盎錯亦未免于禍。　蘇東坡論錯論……〔放任〕

7　雖然倫不足道也。　胡澹菴上高宗封事……〔放任〕

園日涉以成趣門雖設而常關。　陶淵明歸去來辭……〔放任〕

右の例の太字は皆修用的用法に在る。隨つて――なる連詞的動詞も亦修用的用法を成し、下の――を修飾する。

修用的用法には種々ある。右の例に就いて說明すると

1の太字乃至――は下の――の動作の方法を表はす。之を方法的用法とする。日本語では「て」「して」を添へて讀む。

2の太字も方法的用法であるから「て」「して」を添へて讀んでも善いが、豫想に反する場合であるから「に」を添へて讀む方が適當である。

3の太字は形容動詞に限る用法であつて之を狀態的用法といふ。此の用法を副詞的用法といふことは差支ないが、副詞だと思ふのは誤である。副詞には叙述性はないが「遙縵」

高長等には叙述性が有る。

4の太字は下の——を修飾してその事件を發生せしむる機會を捉へて之を拘束把持する。之を拘束的用法といふ。假定だ。

5の太字も拘束的用法であるが、これは確定だ。且つ自然的である。

6の太字は下の——の動作の發生を阻止する力がないとしてその事柄を放任する。之を放任的用法といふ。假定だ。

7の太字も放任的用法であるがこれは確定だ。

客體的用法　作用の客體を表はし他語(大抵、歸著形式動詞)に對して客語になる用法である。

如賜寛觀亦足以知其志之所在。韓愈與于襄陽書

周之德其可謂至德也已矣。論語泰伯

子曰、主忠信毋友不如己者過則勿憚改。同子罕

の——は——に對して客語を成してゐる。その格は一般格であるが用法は客體的である。——は動詞のまゝ客語になるのである。動詞性名詞ではない。

實質的用法　形式語に對して實質語となり、之に實質的意義を供給する用法である。

イ　蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。蘇東坡赤壁賦

客有吹洞簫者。同

ロ　月白風清。同

山高月小水落石出。同

の(イ)の——は下の——に對して實質的意義を供給するを以て專一の役目としてゐる。——は意義が形式的であるが——の實質的意義を統率して——なる一連詞を成す。(ロ)の——は自ら自己の運用を定めずに、自己の實質的意義を下の——の形式的意義に投入し、其の處置を之に一任するものであるから、——に對して實質語になる。

特殊動詞の格

一般動詞は唯一つの一般格を以て種々の運用をなすが「而」「微」の二詞及び修飾形式

動詞の「使」「俾」「令」「教」「遣」「得」は特殊の格が有る。

「而」の格

「而」の格は之を方法格と名づける。方法格は日本語の例で言へば

古人の道を行ひて晉の鄙に居る。

大臣聞いて之を天子に薦む

の――の樣に下の――の方法を表はす格である。嚴密に言へば方法格は作用を以て他の作用の成立する經路を表はす格である。右の例で言へば――の作用は――の作用を經由して成立つものである。

「而」の用法には確定的用法と假定的用法との二種が有る。そうして格は何れも方法格であつて他の格はない。

イ 子之武城聞絃歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。論語陽貨

惡居下流而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。論語陽貨

微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死。孔子曰殷有三仁焉。論語微子

荀爲後義而先利不奪不饜未有仁而遺其親者也未有義而後其君者也。孟子梁惠王上

臧丈人昧然而不應冷然而辭。莊子田子方八

子乃規々然而求之以察索之以辯。莊子秋水十

吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。論語陽貨

賢者而後樂此。孟子梁惠王上

曾子曰、戒之戒之、出乎爾者也、夫民今而後得反之也、君無尤焉。同、下

園日涉以成趣門雖設而常關。陶淵明歸去來辭

有復於王者曰吾力足以舉百鈞而不足以舉一羽明足以察秋毫之末而不見輿薪則王許之乎。孟子梁惠王上

管仲曾西之所不爲也而子爲我願乎。同公孫丑上

右の「而」はその上の動詞又は敍述態名詞又は斷句の實質的意義を借りて自己の意義を充實せしめ、その上で下の――の事柄に對して方法を表はしてゐる。そうして其の用法は確定的である。即ちその上から借りた實質的意義は實際の事件で

ある。その中(イ)は當然、方法たるべきものを方法として表はし、(ロ)は普通の場合に於ては方法たるべからざるものを特に方法として表はす。

假定的用法に於ける方法格は次の如くである。

堯讓天下於許由曰……夫子立而天下治、而我猶尸之吾自視缺然。請致天下。
莊子逍遙遊

焉知曾史之不爲桀跖也。故曰絶聖棄知而天下大治。莊子在宥

王曰何以利吾國、大夫曰何以利吾家、士庶人曰何以利吾身、上下交征利而國危矣。孟子梁惠王

故天道亂而日月星辰不得其行、地道亂而草木山川不得其平、人道亂而夷狄禽獸不得其情。韓愈原人

心不在焉視而不見、聽而不聞、食而不知其味。大學

日本語でも方法格が假定的に用ゐられることが無いではないが假定の意を明示するために日本語では大抵「……ば」……ども」といふ樣に拘束格、放任格を用ゐる。それ故「而」が假定的である場合にはその上の動詞の訓は「ば」「ども」を添へて「夫子立たば」「視れども」などの樣に讀む。そうして「而」をば讀まない人が多い。

「而」は何故に方法格以外の格が無いか。それは必要が無いからである。元來「而」といふ形式動詞の出來たのは、一般の動詞に方法格がないからその缺點を補ふためである。他の格の必要はない。それならば「て」といふ助辭が有れば濟む譯であるのに、支那人は方法格「て」といふものを抽象的に考へなかつた。動作の形式的概念(日本語の「す」)の一運用としての方法格を考へたから「而」が出來た。「而」は日本の「す」と「て」との融合したもの卽ち「して」の意である。

「微」の格

歸著形式動詞「微」の格は機會格であつてその用法は假定的である。

公曰子之教敢不承命。抑微子寡人無以待戎不能濟河。左傳哀十一

漢高祖挾數用術以制一時之利害不如陳平。揣摩天下之勢舉指搖目以封制項羽不如張良。微此二人則天下不歸漢。蘇老泉高祖論

然則何時而樂邪。其必曰先天下之憂而憂、後天下之樂而樂歟。噫微此人吾誰與

右の「微」は「なかつせば」なかりせば」と讀む。その格は假定の拘束的機會格である。機會格とはある事件の發生の機會を表はすものである。「微」は下の○○を統率して下の――の事件の成立の機會を表はしてゐる。そうしてその機會を――の事件の成立に必要として拘束把持するから拘束的と云ひ假に機會を拵へていふのであるから假定的といふ。

太子丹恐懼、乃請荊軻曰、秦兵旦暮渡易水、則雖欲長侍足下、豈可得哉。荊軻曰、微太子言、臣願謁之。史記刺客列傳

管仲有病、桓公往問之。仲父病不幸、卒於大命、將奚以告寡人。管仲曰、微君言、臣故將謁之。韓非子難一

對曰、雖微先大夫有之、大夫命側、側敢不義、側亡君師、敢忘其死。左傳成十六

これも假定的機會格であるが、これは――の事件の成立を阻害する力なしとしてその機會を無視して之を放任するものであるから放任的機會格といふ。

「微」の格は大體に於て假定機會格であるが稀には一般動詞の樣に一般格にも使ふ。

伐木許々釃酒有藇、既有肥羜、以速諸舅、寧適不來、微我弗顧、於粲洒埽、陳饋八簋、既有肥牡、以速諸舅、寧適不來、微我有咎。毛詩小雅鹿鳴伐木

柳下季曰、今者闕然數日不見、車馬有行色、得微往見跖邪。孔子仰天而嘆曰、然柳下季曰、得無遂汝意若前乎。莊子盜跖

汎彼柏舟、亦汎其流、耿々不寐、如有隱憂、微我無酒、以敖以遊。毛詩邶風柏舟

この用法は後世のものには餘り見ない。最後の例の「微」は「非」の意だ。

「使」「俾」「令」「教」「遣」「得」の格

「使」「俾」「令」「教」「遣」は修飾形式動詞であつて其の格は常に方法格である。「被」「見」「爲」等と用法が違ふ。「使」は「使」人而怨」の如く云へるが「被」は「被人而怨」と云へない。「使人怨」は「人に怨むことを使む」ではなく「人を使て怨ましむ」である。「使」人」が「怨ましむ」の方法であつて「怨」がその連詞の代表部になる。「使」人而爲善」の「使」は「勸」人而爲善」導」人而爲善」の「勸」導」と同じ用法(方法格)である。「俾」「令」「教」「遣」も同樣だ。

「得」も修飾形式動詞の「得」は「不」可」得而言」の「得」の如く常に方法格である。

第三節　副詞副體詞感動詞の副性

副詞の副性

副詞の相　副詞の相には實質形式の相と歸著非歸著の相が有る。副詞は皆常に實質態に在る。形式態に在ることはない。形式副詞と雖も常に實質態に在る。何となれば形式副詞には單純形式副詞とも云ふべきものがなく、唯接續詞、前置詞、及び修飾形式副詞が有るだけだからである。

接續詞は、說明的に名づければ寄生形式副詞であつて、前言に寄生して自己の形式的意義を實質化するものである。別に補充語を要しない。補充語なしに實質化するのであるから實質態である。例へば

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力則以學文。論語學而

の「則」は實質態である。それは前言――に寄生するから――に由つて實質化するのである。然るに前言――は「則」に對する補充語ではなくて「則」に關係なしに自己の力を以て下へ從屬するものである。「則」は間接に――に補充されるので――に對して何等の統合關係はない。統合關係の無い語に由つて間接に補充されるのであるから形式態ではない。併し前言――に寄生するには相違ないから無條件なる實質態ではない。特に之を寄生態といふ。寄生的實質態である。

前置詞は歸著形式副詞である。客語を統率し客語に由つて間接に實質化される。例へば

以善服人者未有能服人者也。孟子離婁下

齊人無以仁義與王言者豈以仁義爲不美也。孟子公孫丑下

の「以」與」は下の――なる名詞を客語とし之に歸著して間接に自己の形式的意義を實質化してゐる。――は「以」與」に對する客體を表はす語である。決してその形式的意義を充實させる爲の語ではない。唯間接にその形式的意義が實質化されることになるのである。それだから「以」與」は補充語なしに意義が實質化されると見るべきである。即ち實質態である。併し「以」與」は歸著性が有るから客語なる――に歸著しなければその歸著の客體概念を得ることが出來ない。この「以」與」は歸著

態である。その餘の前置詞も同樣だ。

前置詞は客語なしにその歸著すべき客體の觀念が暗示される場合がある。

苟能充之足以保四海、苟不充之不足以事父母。孟子公孫丑上

其心曰、是何足與言仁義也。同公孫丑下

の「以」「與」は客語なしにその客體が暗示されてゐる。卽ち「以之」「與之」の意である。こういふ相を非歸著態といふ。勿論同時に實質態でもある。

修飾形式副詞は常にその修飾される語に由つて間接に形式的意義が實質化される。例へば

予豈好辯哉。予不得已也。孟子滕文公下

の「不」はそうだ。下の「得已」は「不」に對する補充語ではなくて「不」に對する被修用語であるのに、間接に「不」の意義を實質化させる。

副詞の格　副詞の格は常に連用格である。その餘の格はない。連用格とは他語の上に從屬してその意義の運用を調節する格である。連用とは運用に連るの意だ。

連用格的用法は名詞にも動詞にもある。之を副詞と混同してはいけない。

副體詞の副性

副體詞の相　副體詞の相には實質形式の相が有る。形式副體詞「之」は形式態に在る場合がある。

父母之恩

朋友之信

の「之」の樣に「の」と讀むべきものは形式態に在る。自己は實質的意義を表はさずにその上の補充語――に實質的意義を求める。

而且說明邪、是淫於色也。說聰邪、是淫於聲也。……說知邪、是相於疵也。天下將安其性命之情。之八者、存也亡也。天下將不安其性命之情。之八者乃始攜卷愴囊而亂天下也。莊子在宥

知謂無爲謂曰、予欲有問乎若何思何慮則得道。……三問而無爲謂不答也。……知以之言也問乎狂屈狂屈曰、唉予知之。同知北遊

2 鴻雁于飛、肅々其羽、之子于征、劬勞于野。爰及矜人、哀此鰥寡。毛詩小雅

金天方蕭殺、白露始專征、王師非樂戰、之子愼往兵。海氣侵南郡、邊風掃北平。莫賣盧龍塞、歸邀麟閣名。唐詩選三陳子昂

の「之」は實質態である。(1)の「之」は前言に寄生して實質化し(2)の「之」は自己に修飾される語に由つて間接に實質化する。これら皆自己を補充すべき語に由つて當然補充されるのではないから形式態と見るべきものではない。

この「之」の實質態は餘り多く用ゐられない。(1)の例は莊子に多く(2)の例は詩經に多いが、その他の書には餘り用ゐてない樣に思ふ。彼の

王奪之人、蒯奪之輿、彌奪之地。奪之人者臣諸侯、奪之輿者友諸侯、奪之地者敵諸侯。荀子王制

荊軻出。人或言、復召荊卿。蓋聶曰、曩者吾與論劍有不稱者、吾目之、試往、宜去、不敢留。使使往之、主人荊卿則已駕而去。檢次矣。史記刺客列傳

などの「之」を「この」と副體詞に讀む習慣であるが、私は「之に」(形式名詞)であらうと思ふ。「之に人を奪ふ」之に與を奪ふ」之に主人に往かしむ」と讀むべきものだと思ふ。

本副體詞、代副體詞、不定副體詞の相は常に實質態である。

副體詞の格　副體詞の格は常に連體格である。連體格は他語の上に從屬してその意義の實體を調節する格である。

連體とは名詞に連るといふ意味ではない。他語の意義の實體に連るといふ意味である。副體詞の格は連體格であつて、動詞の意義の實體に從屬する場合がある。

不用其言而弑其所立。蘇東坡范增論

孔子之作春秋也諸侯用夷禮則夷之。韓愈原道

の「其」「之」などがそうだ。下の――なる動詞に從屬するがやはり連體格である。又――の主體を表はしても主語ではない。連體語である。

感動詞の副性

實質感動詞の相は常に實質態である。

形式感動詞の相は常に形式態である。故に必ず他語の下に用ゐられ他語の實質的意義を以て自己の形式的意義を實質化する。例へば「矣」「哉」だけでは實質的意義

はない。「甚矣」悲哉」といふ樣に他語と連結して始めて實質的意義を得る。實質感動詞の格は常に獨立格である。獨立格であるから他語へ從屬せずにそのまゝ一つの斷句を成し得る。「嗚呼悲哉」などの樣に下へ從屬することが多いが其れは自己だけの意義は一度終結し一度獨立して居るのである。一度獨立しても嗚呼といふ感嘆は「悲」といふ思念の狀態としての感嘆であつて「嗚呼」だけでは概念ではないから概念の方から言つて「悲」へ從屬するのである。

形式感動詞の格は一般格である。そうしてその用法には獨立的、連用的の二種がある。

イ 舜人也。我亦人也。 孟子離婁下

ロ 始吾於人也聽其言而信其行。 論語公冶長

(イ)の「也」は獨立的で(ロ)の「也」は連用的である。

第三編　詞の相關論

第一章　連詞の成分

第一節　從屬統率の關係

詞の單獨論が詞の單獨に有する性能を論ずるものであり、相關論が詞の他詞との關係上に有する運用を論ずるものであることは、既に總論に於て說明した通りである。(第壹—壹四頁)

文法學の任務は、言語が原辭、詞、斷句の三階段を蹈んで說話を構成する過程を論ずるに在る。斷句は說話の單位であるから、言語は斷句といふ階程を蹈めば既に說話に到達したのである。斷句を成すには如何な要件が要るかと云へば、一に是れ斷定としての意義の具備である。斷定としての意義さへ具備すれば如何なる詞でも斷句を成すのである。必ずしも連詞たるには及ばない。隨分、單詞でも斷句

に成り得るのてある。

如何なる單詞が獨力て一斷句になるかの問題は總論に於て論ずべきてあつた。其れは簡單に論じて置いた積りてある。詞の相關論は專ら、連詞內に於ける、成分としての詞と詞との關係を論ずるものてあるから、如何なる單詞が獨力て斷句を成すかは、表面上相關論の問題てはない。併し連詞とならなければ斷句を構成することの出來ない詞は如何なる詞てあるかの問題は相關論の論ずべき重要問題てあるから、如何なる單詞は獨力て斷句を成すかといふことは間接に相關論て論ぜられることになるのてある。間接にてはあるが其れは總論に於けるよりも詳しく論ぜられる。

詞の相關論に於て論ずべき事項は、一、連詞中に於ける相關的成分の種類、二、連詞中に於ける相關的成分としての詞と詞の統合作用、三、連詞中に於ける成分と成分との排列、この三つてある。本章はこの第一問題を論ずる。

□連詞中に於ける成分と成分との關係は相對的關係てある。唯一つの從屬と統率との關係てある。卽ち甲の成分が乙の成分に從屬し、乙の成分が甲の成分を統率する關係てあつて、之を名づけて統合關係といふ。二つの成分てあるが同一意識內に統合されて一連詞となるのてある。

□成分と成分との關係は唯一つの從屬統率の關係に由つて一貫される。決して對等の關係といふものは無い。常識を以て考へると

山高月小水落石出。

蘇秦張儀遊說於六國。

の――と――とは對等の關係てあつて一方が一方に從屬するものては無い樣に見えるが、文法上から二成分の相對的關係を觀れば決して對等の關係てはない。其れは其の詞に表はされてゐる事件と事件とは對等てある。物と物とは對等てある。併し語と語とは相對てはない。「山高月小」は意義が終止せずに下へ續くが「水落石出」は意味が終止してゐる。二者の用法が違ふ。「山高月小」の方は自分て自分の態度を定めずに自己を「水落石出」へ寄託して自己の處置を「水落石出」へ一任してゐる。されば

イ 山高月小水落石出矣

"山高月小水落石出乎
(イ)山高月小水落石出時則我知"其既冬至"

といふ樣に「水落石出」の運用が變れば「山高月小」の運用も之に伴つて變る。(イ)の樣に「下が說明態ならば上も說明態になり、(ロ)の樣に下が疑問態ならば上も疑問態になり、(ハ)の樣に下が連體的ならば上も連體的になる。「水落石出」は自分で自分の態度を決める力が有る。そうして委任された「山高月小」の態度をも自分が決める。

譬へて言へば「山高月小」は、私は何も意見は無い、全部「水落石出」氏に一任しますと云ひ「水落石出」は、私は自分の意見通りに行ふ、「山高月小」氏の意見をも私が代表しますと云つた樣なものである。即ち「山高月小」と「水落石出」は株主たる點に於ては對等であるが、取締役としては「水落石出」が會社を代表するのである。

そういふ譯で、事件と事件、事物と事物には對等のものがあつても、連詞中の成分と成分とには決して對等の關係はない。全く從屬と統率の關係のみである。「山高月小」蘇秦は「水落石出」張儀へ從屬し「水落石出」張儀は「山高月小」蘇秦を統率して自分がその連詞の代表者になる。

詞の相關論は徹頭徹尾、從屬と統率の關係を以て一貫されなければならない。

第二節　五種の成分關係

連詞內に於ける成分と成分との統合は從屬統率の一關係に統一される。併しながら其の從屬の爲方、統率の爲方には種々ある。之を分けると

主體關係……主語と敍述語との關係
客體關係……客語と歸著語との關係
實質關係……實質語と形式語との關係
修用關係……修用語と被修用語との關係
連體關係……連體語と被連體語との關係

この五種になる。此の五種の統合關係は、概念觀念の統合に於ける根本的のものであつて世界に共通普遍なるものである。如何なる國語に於てもその連詞の成分關係は此の五種に盡きる。そうしてこの五種は何れも從屬と統率の關係である。

成分と成分との關係は五種であるが、各關係は從屬語と統率語の關係であるから成分は一關係に二種あるので成分の種類は五對で十種である。

一、主體關係　主體關係は主語と敍述語との關係である。或る事柄の直觀的觀念が分解されて一は主體の概念となり一は作用の概念となり、この二概念が統合されて一つの統合概念となる。その主體を表はす成分が主語で作用を表はす成分が敍述語である。例へば

「月出於東山之上。」蘇東坡赤壁賦

「白露横江」「水光接天。」同

「月白」「風清。」同

の｜｜は主語で――は敍述語である。この二者の統合された「…」は主體關係の連詞である。

主語は敍述語に從屬し、敍述語は主語を統率する。反對に考へてはいけない。「月出於東山之上」は一つの事件である。物ではない。「月」は物であつて事件ではない。「月出於東山之上」は「月」ではない。實は「出」である。主語は唯作用の主(ジ)である。主體

關係の連詞は作用を表はすものである。作用の方が重要だ。

二、客體關係　客體關係は客語と歸著語との關係である。事柄の直觀が相對作用とその客體(作用の關係物)との二概念に分解され其れが統合されて一統合概念となる。客語は客體を表はし歸著語は客語に歸著する相對作用を表はす。例へば

白露「横江」水光「接天」蘇東坡赤壁賦

「舉酒」「屬客」「誦明月之詩」「歌窈窕之章。」同

の――は歸著語で｜｜は客語「…」は客體關係の連詞である。客語は歸著語に從屬し、歸著語は客語を統率して全連詞を代表する。

三、實質關係　實質關係は實質語と形式語との關係である。事柄の直觀が分解されて實質的概念と形式的概念との二つとなり再び統合されると一つの統合概念になる。實質語は實質的概念を表はし、形式語は形式的概念を表はす。そうして二者の關係は單に實質と形式との關係である。例へば

月出於「東山之上。」蘇東坡赤壁賦

「李斯者」「楚上蔡人也。」史記李斯列傳

の═══は實質語で──は形式語である。形式語は實質的意義が缺けてゐるが、實質語に由つてその形式的空虛が補充される。實質語は唯意義の材料を形式語に提供するものであつて重な部分ではない。重な部分は形式語である。實質語は形式語に從屬し、形式語が實質語を統率して全連詞を代表する。逆に考へてはいけない。「之」「者」「也」等は之を除去しても殘部が文を成すから「之」「者」「也」は重要でないと思ふ人が有るであらうが、其れは「之」「者」「也」などが無い場合には上の「東山」「李斯」「楚上」「蔡人」が自ら形式的意義をも表はし自己が形式語を兼ねるからである。形式語の意義は最も重要である。

四、修用關係　修用關係は修用語と被修用語との關係である。事柄の直觀が本體と屬性との二概念に分解され、其れが再び統合されるのに屬性概念が本體概念の運用へ從屬せしめられる場合がある。其の場合に本體概念の運用へ從屬する屬性概念を表はすものは修用語で、本體概念を表はすものは被修用語である。

霜露「既降」木葉「盡脫」。蘇東坡赤壁賦

清風「徐來」水波「不興」。同

の═══は修用語で──は被修用語である。修用語とは他語の運用を修飾する語といふ意だ。大體に於て所謂る連用的修飾語である。

五、連體關係　連體關係とは連體語と被連體語の關係である。屬性概念が本體概念の實體(運用でなく)へ從屬せしめられる時、屬性概念を表はすものが連體語で、本體概念を表はすものが被連體語である。

月出「於」「東山之上」、徘徊於「斗牛之間」。蘇東坡赤壁賦

「白露」横「江」「水光」接「天」。同

の═══は連體語で──は被連體語だ。連體語とは他語の意義の實體へ連る語と云ふ意義である。大體に於て所謂る連體的修飾語のことである。

從來の說　連詞の成分と成分との關係は上述の如く相對的關係であるから其の成分は相對的成分であるべく、從つて成分の名稱も相對的でなければならない筈である。卽ち

主語と敍述語とが相對である。

客語と歸著語とが相對である。

實質語と形式語とが相對である。
修用語と被修用語とが相對である。
連體語と被連體語とが相對である。

でなければならない。

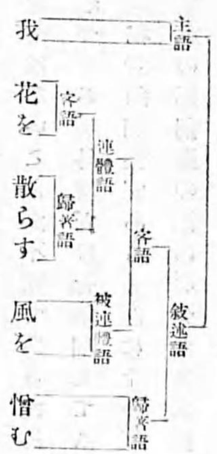
然るに從來の說は成分と成分との關係が相對的であることに十分氣が附いて居ない樣である。其れでは連詞の構成が說けまいと思ふ。從來の說では斷句の成分は大抵

主語　敍述語　客語　補語　修飾語

の五種とされてゐる。或は補語を客語の中へ入れて四種としてゐるものも澤山有る樣である。相對的關係といふことも多少は考へられてゐるであらう。主語と敍述語は相對として考へられてゐるであらう。修飾語も被修飾語と相對的に考へられてゐるかどうか不明である。然るに客語補語に至つては果して相對的に考へられてゐるかどうか不明である。敍述語の有る場合には敍述語に相對であると考へられもしよう。卽ち

といふ風に考へられ得る。併し敍述語の無いもの例へば

の「花を」は客語であることは勿論だが、之に對して相對的なる敍述語は無い。「花を散らす」は「花を」と「散らす」とに分けられるのに之を分けると名稱に困る。そこで「花を散らす」を分けずに唯修飾語として「風を」に相對的なる成分とする。分け得べきものを分けないことが不安であるために、單に修飾語と云ふことを恥ぢて修飾小句と名づける。外層だけを解剖しても內層の解剖が出來なければ徹底しない。これは相對的關係であることに十分氣が附かなかつた罪である。相對的に解剖すれば左の解剖圖の樣になつて各成分の關係が徹底的に判明する。小句だとか



節（クローズ）だとかいふ名稱は全然不必要だと思ふ。內層を解剖すれば主語を含んで居るものは含んで居るだけの話で主語と註すれば善い。何も節といふ名稱を與へる必要はない。內層の解剖が出來ないから節とか小句とか云はなければならなくなるのである。

成分關係の層　連詞が單詞と單詞とより成る場合には之を單層の成分關係といふ。例へば「月出」は單層の主體關係「觀月」は單層の客體關係である。併し連詞は單詞と連詞とより成る場合も有り連詞と連詞とより成る場合もある。之を複層の成分關係といふ。そうしてこの複層は三層四層に止らず五層にも十層にも及ぶのである。理論上より云へば人間の腦力が許すならばその層數は無限であるべきである。右に擧げた解剖は四層である。

第三節　成分關係分類の理論

連詞の成分關係は五種有る。此の五種は如何なる順序に由つて見出されたかを考へる必要が有る。

連詞の成分關係は從屬統率の關係であるが、その從屬の方法に二種ある。其れは、他の成分の意義の實體に從屬するか、運用に從屬するかの二つである。前者を連體的從屬とし後者を連用的從屬とする。又從屬成分の質の上に於て二種ある。一は從屬成分の意義が統率成分に缺けてゐる意義であるかどうかである。缺けてゐる意義であるならば之を補充的從屬とし、そうでなければ修飾的從屬とする。連體的從屬に於ては補充的從屬であるべきものをも修飾的從屬としての形式に於て從屬するから、連體的從屬は全部修飾的從屬として取扱はれる。連用的從屬に在つては補充的從屬は補充的として取扱はれ、修飾的從屬は修飾的として取扱はれる。そこで連用的從屬は補充的と修飾的との二つに分たれる。前者を補用と云ひ、後者を修用といふ。補用的從屬は其の質の上から主客的從屬と實質的從

屬とに分たれ、主客的從屬は主體的と客體的とに分たれる。

- 從屬的關係
  - 連用的關係
    - 補用的關係
      - 主體的關係……主語と敍述語
      - 客體的關係……客語と歸著語
    - 實質的關係……實質語と形式語
  - 修用的關係……修用語と被修用語
- 連體的關係……連體語と被連體語

こういふ順序に由つて分類されたものであるから漏れてゐるものは無い。

第二章　成分の統合

第一節　主語と敍述語

主體關係の連詞

主語と敍述語とより成る連詞を主體關係の連詞といふ。主語は共に連詞を構成する相對的二成分の一方であつて對手の一方の表はす作用の主體を表はして之に從屬するものである。例へば

「霜露既降」「木葉盡脫」「人影在地」　仰見明月。蘇東坡赤壁賦

「我有斗酒」「藏之久矣」　以待子不時之需。同

「江流有聲」「斷岸千尺」「山高」「月小」「水落」「石出」同

劃然長嘯、「草木震動」「山鳴」「谷應」「風起」「水湧」同

の――は主語であつて――の作用の主體を表示して――に從屬する。

敍述語は共に連詞を成す相對的二成分の一方であつて他の一方に對して其の表はす主體の作用を判定的に表はすものである。（判定的に表はすこと之を敍述といふ。）例へば前例の――は敍述語であつて――の表はす主體の作用を判定的に表はしてゐる。そうして主語――と敍述語――とは共に一つの連詞を成す。

主語と敍述語とは觀念の分解に由つて生ずるものである。一つの事象の觀念が主體の概念と作用の概念とに分解されて再び其れが同一意識に統覺されて始めて主語敍述語の關係を成すのである。其れ故主語と敍述語とは相對的である。